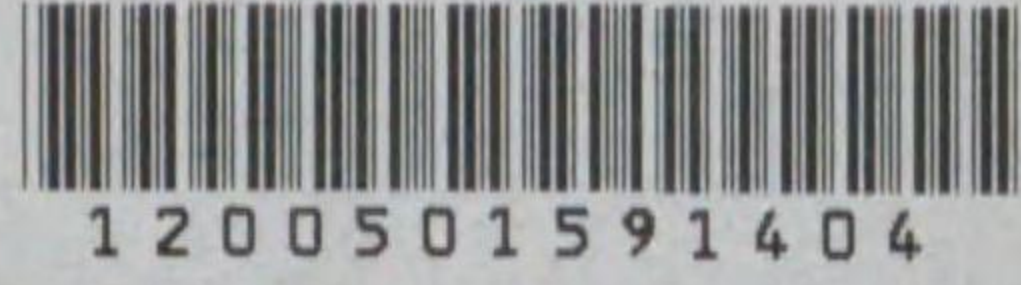


738-65



1200501591404

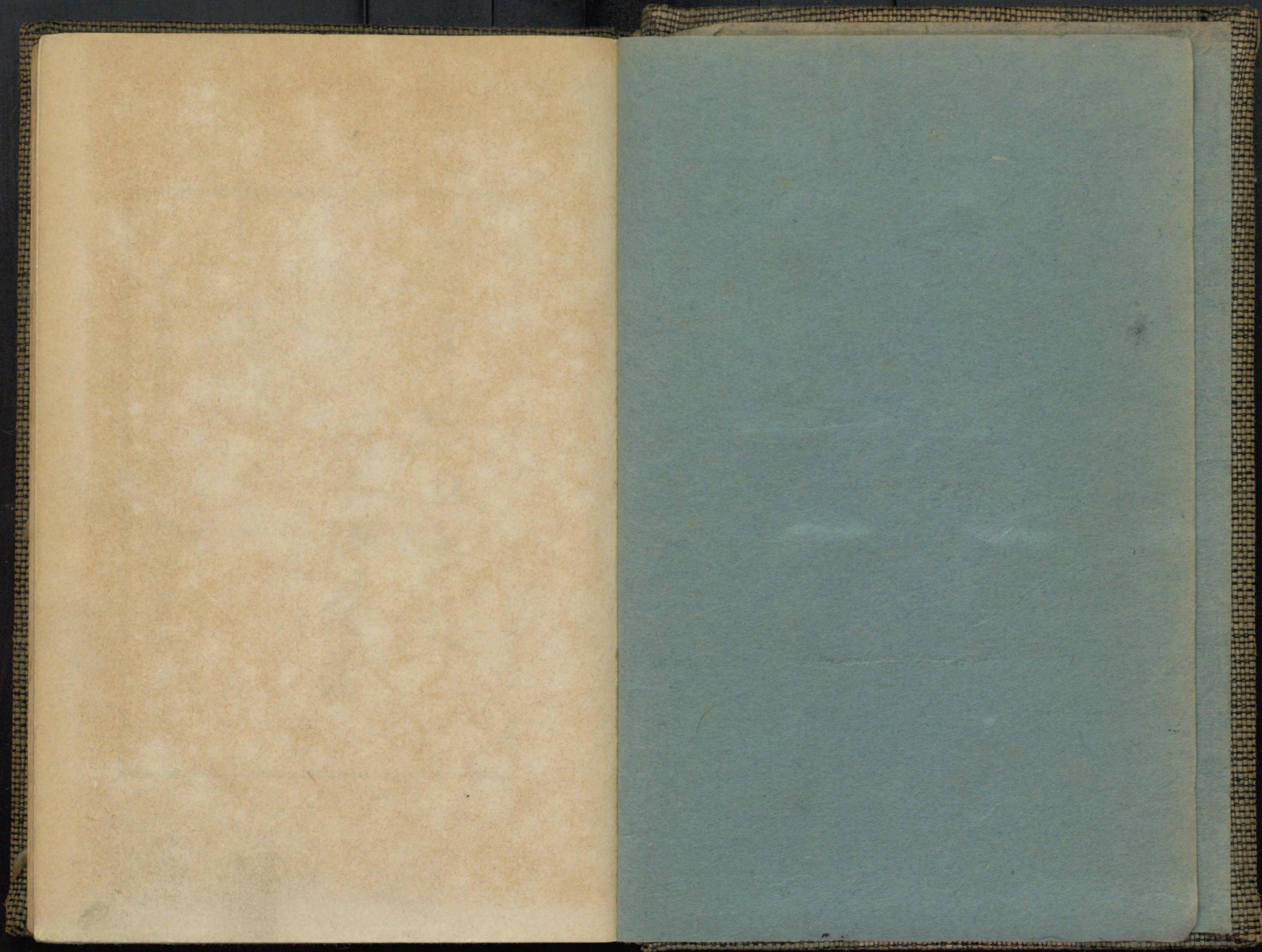
738

65

心筆思以出草

岡本綺堂著

334





隨筆

思以出草

岡本綺堂著

昭和拾貳年拾月

相模書房上梓



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '岡本綺堂' and '隨筆'.

738
65

小 序

この隨筆集に『思ひ出草』の題名を冠させたのは、兎かく昔を語るやうな記事が多きを占めてゐる爲である。

昔を語るは老人の癖である。又その老人を捉へて昔を語れといふ人が多いので、なほさらに昔話の數を増す事にもなるのである。その昔話のうちで『非常時夜話』三編は最近の八月中に起稿したもの、他は昭和七年以降の執筆である。ほかには特に云ふべきこともない。

昭和十二年九月、目黒の西郷山房に於て

岡 本 綺 堂



目次

非常時夜話

四十餘年前……………三

昔の從軍記者……………六

日清戰爭劇……………七

西郷山房隨筆

○我家の園藝……………五

怪奇一夕話……………六

雷雨……………七

團十郎を語る……………七

仁左衛門と梅幸	101
明治時代の寄席	113
大劇場を憂ふ	113
かたき討の芝居	117
太子河	117
御堀端三題	118
孝子貞女	118
正月の思ひ出	119
年賀郵便	119
銀座	119
鳶	119
汽車の窓	119

牛	181
★はなしの話	191
○十番雑記	191

寄席と芝居と

高坐の牡丹燈籠	217
舞臺の牡丹燈籠	218
圓朝の旅日記	221
鹽原多助その他	226
團十郎の圓朝物	228
柳櫻と燕枝	233

非常時夜話

四十餘年前

青年 北支の風雲いよ／＼急になりましたね。

主人 まことに容易ならぬ形勢になつたやうだ。四十三四年前の昔が思ひ出されるな。

青年 四十三四年前、即ち明治二十七八年ですね。僕等はまだ生れない昔のことで、殆どなんにも知らないんですが、その當時と今とは、よつぽど違ひますか。

主人 それを皆んなから訊かれるが、明治の昔と昭和の今日では萬事違つてゐる。明治二十七年は私の二十三の年で、殊にその頃わたしは新聞社に籍を置いてゐたから、普通の人よりは當時の實狀はよく知つてゐる積りだが、まづ第一に違つてゐるのは、いよ／＼開戦となるまでは一般國民が割合に冷靜——褒めていへば冷靜だが、悪くいへば無關心の姿であつた。しかしそれは國民が

悪いといふわけではない。そこが即ち時代の相違だ。

朝鮮に東學黨の亂が起る。それを鎮壓するために、清國の軍隊が六月八日に上陸する。わが國からも六月十二日に第五師團の一部を上陸させる。それらの事情は歴史を讀めばわかることで、今さら説明するまでもないが、もうかうなると所詮衝突を免れがたいのは、當路の人は勿論、一部の人々も覺悟してゐた。新聞社でも承知してゐたので、皆それ／＼に従軍記者を朝鮮へ派出することになつた。それでも一般國民はそれほど動搖しなかつた。日清兩國が出兵したので、問題の東學黨は忽ち蟄伏してしまつたから、これで無事に済むだらうぐらゐに思つてゐる者が多かつた。

その前年、日本と朝鮮とのあひだに防穀令事件といふのがあつた。それも一旦は頗る面倒になつて、朝鮮征伐を始めることになるかも知れないといふ評判であつたが、これは朝鮮の方から折れて出て、何事もなしに納まつた。今度もそんな事で済むだらうといふ者もある。それでも湯屋や髪結床へゆくと、どこで聞いて來たのか、熊さん八さんの連中が聲を大にして日清開戦を論じてゐるのもあつて、いつぞや丁汝昌が軍艦を率ゐて横濱へ乗込んで來たのは、やがて日本と戦争

を始める下檢分に來たのだなどと、手に取るやうに講釋してゐるのもあつたが、一般の人はまだそれに耳を傾けなかつた。明治二十四年の七月、水師提督丁汝昌が北洋艦隊を率ゐて横濱へ來航したのは事實で、それには一種の示威的の意味が含まれてゐたに相違ないが、戦争の下檢分は餘りに邪推だ。そんなわけで、たとひ日清兩國が出兵したからといつて、必ず衝突になるものとは豫想してゐなかつた。

青年 のん氣なもんですね。

主人 のん氣ではない。前にもいふ通り、そこが時代の相違で、日清兩國がこのまゝ無事に撤兵すればどうなるものか、朝鮮の政治改革とはどういふ意味か、それらの事情を政府でも詳しく説明しない。新聞も今日のやうに親切な説明をあたへない。それだから事件の真相が一般國民によく諒解されなかつたのだ。併しさう落付いてばかりはゐられない。二十日前後の各新聞には『開戦の期迫る』といふやうな記事があらはれて來て、いざ開戦となれば、我が派遣軍は先づ牙山に駐屯する清兵を撃ち攘はなければならぬといふので、世間は俄に騒々しくなつた。その矢先に大地震だ。

青年 大地震……。それはいつの事ですか。

主人 今の若い人たちは、大地震といへば直ぐに大正十二年の關東大震災を聯想するだらうが、その以前にも大地震があつた。それは明治二十七年六月二十日の午後二時四分の出来事だ。もちろん大正十二年の關東大震災に比較すれば甚だ輕微なものであつたが、それでも東京市内で潰れ家九十餘戸、破損四千八百餘戸、死傷八十餘人に上つたのだから、その當時においては安政以來の大地震だといふので大騒動。なにしろ一方には『開戦の期迫る』といふのに、また一方には地震騒ぎだから大變だ。我々のやうな若い新聞記者は、汗みづくになつて駈け廻らなければならぬ。おまけにその日はカン／＼天氣の暑い日で、まったく眼が眩みさうになつたよ。

青年 そんな事があつたんですかね。

主人 夏のことではあり、時刻が好かつたので、幸ひに大きい火事もなかつたから、まあ大難が小難で済んだのだ。時刻が好かつたばかりでない、その頃は水道がまだ敷設されてゐなかつたから、どこにも井戸の水がある。瓦斯も普及されてゐなかつたから、瓦斯が燃え出すなどと云ふ危険もない。關東大震災當時のやうに、グラ／＼と來ると、直ぐに水道が止まるといふ虞れもなかつた。

それだから消防も行き届いて、大きい火事も起らなかつたのだ。これは震災ばかりでなく、防空の準備としても大いに考究しなければならぬ事だと思ふ。

いや、それはそれとして、この大地震以來、御幣かつぎの連中はこれぞ何かの前兆に相違ない、戦争がいよ／＼始まるに相違ないなどと、頻りに觸れ廻る者もあらはれた。各新聞でも朝鮮問題について毎日書き立てるやうになる。一般國民にもその事情がだん／＼わかつて來たので、七月に這入ると到るところで戦争の噂だ。熊さんや八さんばかりではない、堅氣な商家の主人までも湯屋や髮結床で開戦論を説くやうになつて來た。それでも今日に比べると、世間は靜かであつたな。尤も電車があるでは無し、自動車があるでは無し、品川から上野淺草までの大通りを鐵道馬車がガタ／＼通行するに過ぎない時代だから、なんといつても世の中が落付いてゐたらしい。報道機敏を誇る新聞紙とても實に緩漫なもので、七月二十九日の拂曉にはじまつた成歡牙山の戦報が、八月三四日頃の諸新聞に發表されるといふ始末、それでも遅延を怪む者もなかつた。今度の北支事變の報道迅速に比べると、まったく隔世の感がある。萬事がこの式だから、今日の君達の眼から見たらば、實際のん氣に思はれるかも知れない。しかしそれは日本ばかりでなく、支那ば

かりでなく、十九世紀の世界列國は大抵そんな有様であつたのだから仕方がない。

青年 いよ／＼開戦となつた時には、どんな景氣でした。

主人 戦報の達したのは八月だが、七月下旬からもう戦争氣分だ。どうしても戦争は免れないといふ事が一般國民に徹底したので、出征將士に對して恤兵寄附の企ても起る。豫後備の在郷軍人等も何時召集されるかも知れないといふ覺悟をする。八日一日には清國に對して宣戦の詔勅が下される。世間はいよ／＼騒がしくなつた。

その騒がしい中にも、一種の不安が潜んでゐた。今日では必ず支那に勝つと決めてゐるが、その當時はまだ安心が出来ない。清國の軍隊が果して強いか弱い、確にはわからない。何をいふにも相手は大國である。歐洲列國も『支那は眠れる獅子である』などと云つてゐるのであるから、その正體が本當に獅子であるか羊であるか見透しがつかない。現に日本在留の外國人のあひだにも『最初は日本が勝つだらうが、長期の戦争をつゞけると、最後には日本が屈するだらう』といふ觀測を下してゐる者もあるくらゐだから、日本國民はなか／＼油斷が出来なかつたのだ。

青年 それぢやあ、あなたも不安のお仲間だつたんですね。

主人 私ばかりではない。口の先や筆の先では強がつてゐても、内心はみんな不安を感じてゐたのだ。秀吉の朝鮮征伐は別として、わが國が外國と戦ふのは今度が初めてだから、なほさら安心が出来なかつた。豊島沖の海戦、成歡牙山の陸戦、いづれもわが勝利に歸しながら、まだ／＼安心は出来なかつた。陸では九月十六日の平壤陥落、海では九月十六、十七兩日の黄海大戦、これで相手の實力も先づ試験済みになつて、支那兵恐るゝに足らずと初めて豪語するやうになつたわけだ。

二

青年 今度の事變については、學國一致が頻りに提唱されてゐますが、その當時もさうでしたらうね。

主人 勿論さ。しかもその學國一致の日本精神を理解しない人間があつた。但しそれは日本人ではなく、わが國駐在の支那公使汪鳳藻といふ男だ。汪は永く東京の公使館にあつて、朝野の人士に交際が多く、陰曆中秋の夜には森槐南、矢土錦山その他の漢詩人を招待して、觀月の詩會を開いたりしてゐた。それほどの日本通でありながら、彼はやはり日本精神を理解し得なかつた。

その當時の伊藤内閣は議會における民黨と衝突を續けてゐて、すでに昨年末には第五議會を解散し、今年の五月十二日をもつて第六議會を召集したが、それもまた六月二日に解散となつた。かういふわけで、議會は解散また解散、官民衝突の激甚なる最中に、朝鮮問題が突發したのだから、客觀的には頗る危殆の情勢にあるといつてよい。汪鳳藻はその情勢を本國の李鴻章に報告して、たとひ日本政府が開戦をこゝろみても、民黨の反對に妨げられて手足を伸ばすことは出来まいと云つて遣つた。その近い例は安南戦争で、フランスの國論が一致しなかつた爲に、出征のクルーパー提督は空しく澎湖島に蟄伏し、却つて清將劉銘傳の功名を成さしめた。日清戦争も恐らくこんな結果に終るであらうと、汪鳳藻は觀測した。李鴻章もさう信じたらしい。兩者ともに日本精神を理解しなかつた爲に、取返しつかない失敗を招くことになつたのだ。

青年 第七議會は一致して政府を支持したんですね。

主人 戦争最中の九月一日に總選舉を終つて、第七回臨時議會は十月十五日廣島の大本營に開かれたが、バラツク建ての假議事堂で官民が必死の緊張振りには、實に悲壯といふべきであつた。さうして、従來の行きがかりは忘れたやうに、官民は一致協力、俱に外敵に當ることになつたのだ。

李鴻章も汪鳳藻も定めて意外におどろいたらうが、驚くのが間違つてゐるのだ。今さら驚いてももう遅い。彼等は遂に祖國を誤ることになつた。

青年 今お話しのお劉銘傳といふのは、安南戦争の時には勝つたさうですが、日清戦争には出て來なかつたんですか。

主人 清國側の旗色が悪いので、北京政府では劉銘傳を呼び出すことになつたが、劉は眼病をいひ立て、出征を辭退したさうだ。眼病か、臆病か、本當のところはわからない。併しこの劉銘傳といふのは仲々の傑物らしく、若い時には鹽の密賣をする、喧嘩をして人を傷ける、いはゆる無賴の悪少年であつたが、長髮賊の亂が起つた時、李鴻章の軍に投じたのが出世の始まりで、その後しばしば軍功を立て、遂に臺灣巡撫にまで昇つたのだ。こんな經歷の人物に似合はず、文學の素養も相當にあつて、大潜山房詩稿などを残してゐる。

それから、さつきも云つた丁汝昌、これも仲々しつかりした人物で、北洋艦隊の定遠、鎮遠その他を率ゐて、威風堂々と横濱へ乗込んで來た時は、素晴らしい威勢だつた。東京へも來て、紅葉館の饗宴に列した事もあつたが、その席上、紅葉館の一美人に對して戀々の情に堪へず、白扇

に詩を題して贈つたとかいふ風流の逸話を傳へてゐる。それが三年の後には、我と敵對することになつて、連戦連敗、二十八年の春には威海衛に追ひ籠められて、二月十二日、敗殘の戦艦を我に引渡し、遂に降伏を申出ることになつた。彼としては恐らく感慨無量であつたらう。

降伏の條件は、軍艦、兵器、砲臺等はすべて引渡すに因つて、陸海軍人及び西洋人の生命を助けてくれといふのであつたが、こちらでそれを承知すると、丁汝昌は一切の始末を終つた上で、翌十三日、鎮遠の艦内で毒を服して自殺した。その毒薬は金であつたといふ。丁汝昌ばかりでなく、定遠艦長の劉もこれに殉じ、陸軍統領の張も運命を同じうした。勢ひ已に窮まるを知つて、無益に人命を損せず、無益に艦艇を傷けず、後事を處理して自決したのは、さすがに古名將の風があると云つて同情された。そのとき引渡した軍艦は鎮遠、濟遠、ほか八隻であつたが、我が伊東司令長官はそのうちの一隻康濟を支那側にあたへて、丁汝昌等の柩を送らせることにした。これも日本武士の情といふのだらう。そんなわけで、丁汝昌も日本側には同情されてゐるが、敗軍の將といふので支那側には評判が悪く、その事蹟もよく傳へられてゐないらしい。現に中國人名大辭典を見ても甚だ簡短、わづか三行ばかりに片附けられてゐるのは憫むべしだ。

青年 併し丁汝昌の最期は劇的ですな。

主人 まつたく劇的だよ。その年の五月、川上音二郎の一派が歌舞伎座へ乗込んだ時の一番目に、

この『威海衛陥落』三幕を出して大當りを取つた。高田實の丁汝昌が大變な評判で、書生芝居の團十郎などと祭り上げる者も出來たくらゐだ。

青年 その『威海衛陥落』ばかりでなく、當時の戦争劇についてお話はありませんか。

主人 戦争劇……。それについて話すことが無いでもないが、實はある雑誌にたのまれて、日清戦争劇の話をかく筈になつてゐるから、劇に關する事はそれを讀んで貰ひたい。

青年 それぢやあ寄席の方は……。

主人 芝居と違つて、寄席は戦争によつて客を引く法がなく、戦争落語とか戦争淨瑠璃とかいふ工夫もないので、一旦はさびれた。それでも落語家は高坐で何か戦争に因んだやうな小話をいひ、戦争當込みの都々逸や替へ唄などを歌つた。その見本に、こんなのを一つ紹介しよう。平壤が陥落して、清國側の大将左寶貴が戦死したといふ新聞記事があらはれた時に、柳派の頭領の柳亭燕枝はこんな小話を作つて高坐に持出した。

『御承知の通り、長居の客を歸すお呪ひには、箒を逆さに立て、置くと申しますが、あれはまつたく争はれないもので……。現に今度の平壤の戦ひでも、日本の軍隊が向ひますと、支那兵は城を捨て、皆んなズン／＼歸つてしまひました。あとで調べてみますと、左は、うき、が逆さに立つて居りました。』

まことに他愛のない話だが、それでも客はドツと笑つた。寄席はさびれたと前に云つたが、その不況のあひだにも女義太夫の席は割合におとろへず、どこもみな相當に繁昌してゐた。女義太夫は日清戦争前後から日露戦争前後にわたる十餘年間が最も全盛の時代であつたから、戦争の影響を蒙ること多からず、依然として太功記十段目や三勝酒屋で客を呼んでゐたのだ。その頃には『爆彈三勇士』のやうな新作も出来なかつたやうに記憶してゐる。

青年 文學の方面はどうでしたか。

主人 新聞に戦争小説が現れたぐらゐで、特に語るほどの事もなかつた。なにしろ其當時は、文藝方面にも通俗方面にも雑誌といふものが甚だ少く、讀賣新聞以外には文藝欄を設けてゐる新聞もない位だから、文藝方面の振はないのは無理もなかつた。俳人の正岡子規は従軍記者として滿洲に向つたが、俳句方面にも餘り大きい影響はなかつたやうだ。私の知つてゐる限りでは、その當時最も活氣を呈してゐたのは漢詩壇であつたらしい。時は恰も森槐南を始めとして、矢土錦山、野口寧齋、本田種竹などの詩人が輩出して、明治時代における漢詩の全盛期であつたのみならず、相手が清國で、戦場が朝鮮や滿洲であるから、漢詩の世界にはお誂へ向きだ。したがつて、この方面が最も賑はつたらしい。戦争後に野口寧齋は、その中の佳作を撰んで『大燾餘光』といふ漢詩集を發行した。

三

青年 その頃の銀座はどんなでしたね。

主人 明治二十七八年頃の銀座通りは、決して今日のやうに賑かな土地ではなかつたが、夏場の七月八月だけは東側に夜店が出るので、涼みながらの人出が相當にあつた。その八月にいよ／＼開戦となつたので、各新聞社では號外を出す、社の前には貼出しをする。それを見ようとして集まる人で大へんな混雑だ。

その頃の銀座は新聞街で、大通りだけでも讀賣、新朝野、自由、東京日日、中央、毎日の諸新聞社がある。南鍋町に時事新報、尾張町にやまと、三十間堀に報知と萬朝報、日吉町に國民、瀧山町に東京朝日といふわけで、都と二六を除くの外は、あらゆる新聞社が銀座界限にあつまつてゐたので、その各社から號外賣りが鈴を鳴らして駈け出すと、待受けてゐる人達が飛びついて買ふ。まるで喧嘩のやうな騒ぎだ。各社の前に貼出しを眺めてゐる人達も黒潮のやうに渦巻いてゐるので、殆ど往來止めの姿。最初のうちは冷靜に構へてゐた人達も、開戦と共に大嵐が吹出したやうに騒ぎはじめた。

その頃はラヂオの放送などはなかつたから、山の手方面の人たちは號外を待つのが悶かしく、一刻も早く新聞社の貼出しを見ようとして、わざ／＼銀座方面へ出て来る者もある。電車などはないから、みんなテク／＼歩きだ。それだから平生は左のみ賑かでもない銀座界限は大混雑、氷屋や汗粉屋は意外の金儲けをしたさうだ。

青年 そのほかにも金儲けをした者があるでせうね。

主人 それはあるだらう。なんといつても、軍需品關係の方面は忙がしかつたに相違ない。やがて

滿洲の冬が近づくといふので、出征將士の防寒準備に忙がしく、洋服屋やメリヤス業者などは夜も寝ないやうな騒ぎであつた。梅干などはドン／＼戦地へ送られるので、忽ちに相場は五割方の騰貴となつた。併し世間一般は不景氣だつたな。

青年 それは察しられますね。

主人 いざ開戦となると、八月の暑い最中であるが、避暑地や温泉場へ行つてゐた人たちは續々引揚げて來るといふ始末で、どここの避暑地も忽ち寂寥、この方面が先づ第一に打撃を蒙つた。寄れば障れば戦争の噂で、花柳界は勿論、すべての盛り場も火の消えたやうに寂れてしまつた。そればかりでなく、何事も遠慮といふ意味から、家屋の新築も修繕も、庭の手入れも、差當りは見合せといふ向が多いので、大工、左官、植木屋等の職人はみな手明きになつた。これも彼等に取つては大打撃で、失業の職人等は一時凌ぎに、軍需品工場に雇はれる者もあつた。軍夫となつて戦地へ出かける者もあつた。

青年 日清戦争にはよく軍夫の話が出ますが、やはり戦地で働く人夫ですか。

主人 さうだ。戦地では戦闘員以外の人夫を澤山に使役しなければならぬので、大倉組その他が

下受けで戦地行の軍夫を募集すると、前にいふ失業の職人や、人力車夫や、土方や立ん坊のたぐひが續々あつまつて來た。その當時、土方や車力は一日二三十錢の收入に過ぎないのに、軍夫になれば一圓乃至一圓五十錢の日給が貰へるといふので、みな争つて応募した。堅氣な小商人の中にも、こんな不景氣に悩んでゐるよりも、いつそ戦地へ行つて一と稼ぎしようかと、進んで軍夫を志願するのちもあつた。『おれも軍夫にならうか。』などと冗談半分にいふ者もある。『あたしも男なら軍夫に行くけれど。』といふ女もある。その當時の軍夫は到るところで噂の種になつた。軍夫は五十人又は百人を一組として、その組々を五十人長とか百人長とか云ふ者が統率することになつてゐた。その組長は主に土木の請負業者の子分で、なか／＼幅を利かせたものであつた。最初は急場のことだから、片ツぱしから応募者を戦地へ送り出したが、そのなかには體質が虚弱で戦地の勞働に堪へない者が往々あらはれたので、中途から體格検査を行つて採用することになつた。

而もこの軍夫は大體に於て成績が良くなかつた。何分にも土方や立ん坊のたぐひもまじつてゐるので、嚴重な軍律の網をくゞつて、酒を飲む、博突を打つ、喧嘩をする。中には掠奪を働く者もあつて、軍隊でもその取締りに苦んださうだ。その經驗にかんがみて、その後の日露戦争には軍夫を一切採用せず、軍夫の役目は輜重輸卒が勤めることになつた。日露戦争の始まつた時、今度も軍夫になつて一と稼ぎと手ぐすね引いて待つてゐた連中は、軍夫不用と聞いて落膽したさうだ。そんなわけで、軍夫の中でも心がけの好い者は、相當の金を握つて歸つたらしい。

青年 軍夫のほか、戦争に關して何か新しい職業が生まれませんでしたか。

主人 もう一つ、この戦争について新しい職業を見出したのは、新聞の號外賣だ。新聞の號外發行はこれまでも絶無ではなかつたが、それはよく／＼の重大事件に限られてゐて、各社の配達人がその購讀者の家々へ配達するに過ぎず、號外だけの一枚賣りはしなかつたのだが、日清戦争勃發と共に新聞號外が飛ぶやうに賣れはじめた。ラヂオの放送もなく、新聞の夕刊もない時代に、悠々閑々と明日の朝刊を待つてはゐられないので、各人が争つて號外を買ふことになる。今までは無代價と決まつてゐた號外が、こゝに一枚五厘とか一錢とかいふ價を生じて、各社直屬の配達人ではなく、臨時に號外だけを賣りあるく者が出來た。いはゆる號外屋である。各新聞社でも我が社の廣告になるといふやうな意味で、その號外屋にも號外を分けて遣る。最初は無代價であつた

が、それでは無制限になるので、中途から百枚一錢ぐらゐを徴收することにした。而も百枚一錢で仕入れた號外が五十錢にも一圓にも賣れるのだから大儲け、今日の言葉で云へばポロイ商賣だ。

軍夫になつて戦地へ渡る者は相當の危険を覺悟しなければならないが、號外屋には何の危険もなく、足を播粉木にして嘯鳴り歩けばいゝのだから、失業の労働者の中にはこの號外屋に化けるのも多かつた。輕子や立ん坊が號外屋に續々轉業した爲に、魚河岸や青物市場では困つてゐるといふ噂も聞いた。一枚一錢といつても、その當時の一錢は今日の七八錢にも相當するのだから、全くポロイ商賣に相違ない。前の軍夫で云つたやうに、心がけの好い號外屋は戦争中に稼ぎ溜めて、立派な店を開いたのもあるさうだ。

青年 そんな際物商賣や軍需品關係の商賣は別として、世間一般の不景氣は戦争の終りまで續いたんですか。

主人 いや、その不景氣は最初の小半年で、こつちが必ず勝つといふ見透しがつくと、世間も自然に明るくなつて來た。殊に二十七年の十二月九日、東京市では上野公園で盛大な祝捷會を開いた。

戦争の最中だが、もう勝つたことに決めてしまつて、馬鹿に景氣の好いお祭り騒ぎだ。その日は薄曇りの寒い日だつたが、種々の餘興などあつて大そうな賑ひ、各新聞でも前々から盛んに書き立てたので、地方からわざ／＼出て來る人達もあつて、その當分は東京市中も繁昌した。

青年 いはゆる世直しの策ですね。

主人 まあそんな意味もあつたのだらう。それをキツカケのやうに世間はいよ／＼明るくなつて、廿八年の正月は戦捷の新年といふので、新しい國旗が家々の軒にひるがへる。今まで遠慮してゐた人達もこの初春は特別に祝へといふわけで、景氣よく浮れ出した。いや、私などは浮れ出すどころか、ます／＼忙がしくなつたのだが、世間がパツと明るくなつたやうに感じられて、唯なんとなく嬉しかつた。

青年 戦争についての流行物はありませんでしたか。

主人 いつの時代も同じことで何か流行物が出來るものだが、今に比べると其頃は更に多かつた。先づ各劇場で日清戦争劇を上演する。淺草などでも日清戦争の人形を見せる。羽子板や紙鳶や双六にも戦争物が出來た。煙草も官營でなかつたから、金鵝煙草、凱旋煙草などといふ色々の名を

つけた煙草が賣出された。女のあたまの根掛けにも勝利掛、名譽がけがある。駄菓子の微塵棒に支那微塵の名をつけて賣るのがある。料理屋では凱旋煮、乗取汁などと稱して、豚を入れた薩摩汁のやうな物を食はせる。それ等は一々枚擧に違あらずだ。滿洲事變當時に子供の鐵兜が流行つたと同様、子供が海陸軍人帽をかぶつて新年の町々に遊んでゐるのが眼についた。

流行唄も澤山出来たが、在來の歌澤では『金時』が流行つて、半玉などが屢々踊つたものだ。いふまでもなく、この『金時』は五月人形を歌つたもので、尙武の氣を帯びてゐるところが軍國の宴席に適してゐるのもあらうが、唄のなかに『唐の大將あやまらせ』といふ文句がある。それが人氣に投じて喝采されたのだ。今度もまた流行るかも知れない。それから義大夫の二十四孝の『回向せうとお姿を繪には描かせはせぬものを』といふのをもちつて『李鴻章とて大かたは逃げも隠れもせぬものを』などと歌つてゐたのは大笑ひだが、こんな替へ唄が幾らも出来た。例の法界節では『日清談判破裂して、品川乗り出す吾妻艦——』これは戦争の後までも、殆ど天下を風靡するといふ勢で流行したものだ。

青年 その頃も戦争の寫眞などがありましたか。

主人 寫眞術が今日のやうに發達せず、各新聞雜誌社に寫眞班などが置かれてゐない時代だから、新聞紙上にあらはれる戦地の光景はみな木版畫だ。器用な新聞記者は自分でスケッチして戦地から送つて來るのもあり、新聞社によつては畫家を戦地へ派遣するものもあつた。いづれにしても、野戦郵便で内地まで送つて來て、それを木版に彫刻して紙上に掲載するのであるから、十日も十五日も後れてしまふ事は珍しくない。日露戦争當時になると、寫眞術も相當に進歩して來たが、それでも戦況報道に寫眞を利用してゐたのは、戦時畫報とか軍事畫報とか云つたやうな戦争専門の雜誌にかぎられ、普通の新聞雜誌はやはり木版に依るものが多かつた。前にも云ふ通り、今日に比べると、實に隔世の感がある。

日清戦争當時に繪葉書は無かつたが、錦繪はまだ廢れなかつたから、東京市中に繪草紙屋といふものが多かつた。繪草紙ばかりでなく、小説や雜誌も賣るのだから、今日の本屋である。錦繪は芝居の似顔繪や武者繪や美人畫や風俗畫のたくひで、一枚繪もあり、二枚續き、三枚續きもあつて、それが店先に美しく掛けならべてあるので、往來の人も立ちどまつて眺めてゐた。かういふ明治時代の姿は現代人には想像されないかも知れない。その錦繪には時事を寫したのものも屢々

出版された。明治十年の西南戦争や、十七年の朝鮮事變や、清國の安南戦争や、みな色々の錦繪になつて繪草紙屋の店を賑はしてゐた。したがつて、日清戦争の錦繪も澤山に出來た。安城渡の松崎大尉戦死や、玄武門の原田重吉先登や、黄海大海戦や、みな錦繪の好材料で、新しい繪が出る毎にドシ／＼賣れた。銀座尾張町の西側、即ち今日の松坂屋の向う角に、佐々木といふ繪草紙屋があつたが、場所柄だけに戦争中はいつも混雜してゐた。

今度の北支事變でも、上海邊では支那軍大捷などといふ虚報がしきりに傳へられてゐるやうであるが、日清戦争當時の支那側の新聞をみると、いつでも皇軍連捷とか日軍大敗とかいふ記事ばかりで、日本兵が支那兵に追ひまくられてゐるやうな挿畫が大々的に掲載されてゐる。それを見るとまつたく噴き出したい位であつた。今日の支那民衆はいつまでも此の種の虚報に瞞されてはゐまい。

青年 戦時の街頭風景といふべき千人針は、その頃にも行はれたんですか。

主人 日清戦争當時には千人針といふことを聞かなかつた。千人針を云ひ出したのは日露戦争の時からで、誰が始めたかを知らない。新聞などにも『彈丸よけの呪ひとして千人針が行はれる。』と

いふことを報道してあるだけで、その由來を明かにしてゐない。併し今日のやうに盛んに行はれてはゐなかつた。これも婦人の街頭進出に伴ふ時世の變化と見るべきだらう。

それからそれへと話してゐたら際限がない。今日はこのくらゐで御免を蒙らう。

(昭和十二年八月)

昔の従軍記者

××さん。

仰せの通り、今回の事變について、北支方面に、上海方面に、従軍記者諸君や寫眞班諸君の活動は實にめざましいもので、毎日の新聞を見るたびに、ひと事とは思はれないやうに胸を打たれます。取分けて私などは自分の経験があるだけに、人一倍にその勞苦が思ひ遣られます。

その折柄、恰もあなたから『昔の従軍記者』に就ておたづねがありましたので、自分が記憶してゐるだけの事を左にお答へ申します。御承知の通り、日露戦争の當時、私は東京日日新聞社に籍を置いてゐて、従軍新聞記者として滿洲の戦地に派遣されましたので、なんと云つても其の當時のことが最も多く記憶に残つてゐますが、お話の順序として、先づ日清戦争當時のことから申上げませ

ろ。

日清戦争當時は初めての對外戦争であり、従軍記者といふものゝ待遇や取締りについても、一定の規律はありませんでした。朝鮮に東學黨の亂が起つて、清國が先づ出兵する、日本でも出兵して、二十七年六月十二日には第五師團の混成旅團が仁川に上陸する。かうなると、鷄林の風雲おだやかならずと云ふので、東京大阪の新聞社からも記者を派遣することになりましたが、まだ其時は従軍記者といふわけではなく、各社から思ひ／＼に通信員を送り出したといふに過ぎないので、直接には軍隊とは何の關係もありませんでした。

そのうちに事態いよ／＼危急に迫つて、七月二十九日には成歡牙山の支那兵を撃ち攘ふこととなる。この前後から朝鮮にある各新聞記者は我が軍隊に附屬して、初めて従軍記者といふことになりました。戦局がますます／＼擴大するに従つて、内地の本社からは第二第三の従軍記者を送つて來る。これ等はみな陸軍省の許可を受けて、最初から従軍新聞記者と名乗つて渡航したのでした。

これ等の従軍記者は宇品から御用船に乗込んで、朝鮮の釜山又は仁川に送られたのですが、前にもいふ通り、何分にも初めての事で、従軍記者に對する規律といふものが無いので、その扮装も思

ひく／＼でした。どの人もみな洋服を着ておりましたが、腰に白木綿の上帯を締めて、長い日本刀を携へてゐるのがある。槍を持つてゐるのがある。仕込杖をたづさへてゐるのがある。今から思へば嘘のやうですが、其當時の従軍記者としては、戦地へ渡つた曉に軍隊が何の程度まで保護してくれるか判らない。萬一負け軍とでもなつた場合には、自衛行動をも執らなければならない。非戦闘員として油断は出来ない。まかり間違へば支那兵と一騎討をするくらゐの覺悟が無ければならない。非戦闘員といづれも嚴重に武装して出かけたわけです。實際、その當時は支那兵ばかりでなく、朝鮮人だつて油断は出来ないのですから、この位の威容を示す必要もあつたのです。軍隊の方でも別にそれを咎めませんでした。

*

前にもいふ通り、従軍新聞記者に對する待遇や規定がハッキリしてゐないので、その配屬部隊の待遇がまち／＼で、非常に優遇するものもあれば、邪魔物扱ひにするものもある。記者の方にも、おれは軍人でないから軍隊の拘束を受けない、と云つたやうな心持があつて、めい／＼が自由行動を執

るといふ風がある。軍隊の方でも餘りやかましく云ふわけにも行かない。それが爲に、軍隊側にも困ることがあり、記者側にも困る事があり、陣中における色々の挿話が生み出されたやうでした。

明治三十三年の北清事件當時にも、各新聞社から従軍記者を派出しましたが、これは戦争といふほどの事でもないもので、やはり日清戦争當時と同様、特に規律とか規定とか云ふやうなものも設けられませんでした。

次は三十七八年の日露戦争で、この時から従軍新聞記者に對する待遇その他が一定されました。従軍記者は大尉相當の待遇を受ける。その代りに軍人と同様、軍隊の規律に一切服従すべしと云ふことになりました。もう一つ、従軍記者は一人一人に限るといふのです。かうなると、畫家も寫眞班も同行することを許されないわけです。

これには新聞社も困りました。畫家や寫眞班は兎もあれ、記者一人ではどうにもなりません。軍の方では第一軍、第二軍、第三軍、第四軍を編成して、それが別々の方面へ向つて出動するのに、一人の記者が掛持をすることは出来ません。そこで、先づ自分の社から一人の従軍願ひを出して置いて、更に他の新聞社の名儀を借りるといふ方法を案出しました。

京阪は勿論、地方でも有力の新聞社はみな従軍願ひを出してゐますが、地方の小さい新聞社では従軍記者を出さないのがある。その新聞社の名儀で出願すれば、一社一人は許されるので、東京の新聞社は争つて地方の新聞社に交渉する事になりました。東京日日新聞社からは黒田甲子郎君が已に従軍願ひを出して、第一軍配屬と決定してゐるので、私は東京通信社の名をもつて許可を受けました。

東京通信社などは好い方で、そんな新聞があるか無いか判らないやうな、遠い地方の新聞社員と稱して、従軍願ひを出す者が續々あらはれる。陸軍省でその新聞社の所在地を訊かれても、御本人はハッキリと答へることが出来ないといふやうな滑稽もありました。陸軍側でもその魂膽を承知してゐたでせうが、一社一人の規定に觸れない限りは、いづれも許可してくれました。それで東京の各新聞社も少きは二三人、多きは五六人の従軍記者を送り出すことが出来たのでした。

勿論それは内地を出發するまでのことで、戦地へ行き着くと皆それ／＼に正體をあらはして、自分分は朝日だとか日日だとか名乗つて通る。配屬部隊の方でも怪みませんでした。併し袖印だけは届け出での社名を用ゐることになつてゐて、私もカーキ服の左の腕に東京通信社と紅く縫つた帛を巻いてゐました。日清戦争當時と違つて、槍や刀などを携帯することは一切許されません。武器はピストルだけを許されてゐたので、私達は腰にピストルを着けてゐました。

*

従軍記者の携帯品は、ピストルのほかに雨具、雑囊又は背囊、飯盒、水筒、望遠鏡で、通信用具は雑囊か背囊に入れるだけです。澤山に用意して行くことが出来ないで困りました。万年筆はまだ汎く行はれない時代で、万年筆を持つてゐる者は一人もありませんでした。鉛筆は折れ易くて不便であるので、どの人も小さい毛筆を用ゐてゐました。したがつて、矢立を持つ者もあり、小さい硯と墨を使つてゐる者もあり、今から思へば随分不便でした。

併し又、一利一害の道理で、我々は机にむかつて通信を書く場合は殆ど無い。支那家屋のアンペラの上に俯伏して書くか、或は地面に腹這ひながら書くのですから、ペンや鉛筆では却つて不便で、寧ろ柔かい毛筆を用ゐた方が便利だと云ふ場合もありました。紙は原稿紙などを用ゐず、巻紙に細かく書きつゞけるのが普通でした。

宿舎は隊の方から指定してくれた所に宿泊することになつてゐて、妄りに宿所を更へることは出来ません。大抵は村落の農家でした。併し戦闘繼續中は隊の方でもそんな世話を焼いてゐられないので、私たちは勝手に宿所を探さなければなりません。空家へ這入つたり、古廟に泊つたり、時には野宿することもありました。草原や畑に野宿してゐると、夜半から寒い雨がビショ／＼降り出して来て、あわてゝ雨具をかぶつて寝る。かうなると、少々心細くなります。鬼が出るといふ古廟に泊ると、その夜なかに寝像の悪い一人が關羽の木像を蹴倒して、みんなを驚かせましたが、ほかには怪しい事ありませんでした。鬼が出るなどと云ひ觸らして、土地のごろつき共の賭場になつてゐたらしいのです。

食事は監理部へ貰ひに行つて、米は一人について一日分が六合、ほかに罐詰などの副食物をくれるのですが、時には生きた雞や生の野菜をくれる事がある。米は焚かなければならず、雞や野菜は調理しなければならず、三度の食事の世話もなか／＼面倒でした。私たちは七人が一組で、二人の苦力を雇つてゐましたが、支那の苦力は日本の料理法を知らないのです、七人の中から一人の炊事當番をこしらへて、毎日交代で食事の監督をしてゐました。煮物をするには支那の鹽を用ゐ、或は醬

油エキスを水に溶かして用ゐました。砂糖は監理部で呉れることもあり、私たちが町のある所へ行つて買ふこともありました。

苦力の日給は五十錢でしたが、みな喜んで忠實に働いてくれました。一人は高秀庭、一人は丁禹發といふのですが、そんなむづかしい名を一々呼ぶのは面倒なので、私の考案で一人を十郎、他を五郎といふ事にしました。この二人が『新聞記者雇苦力、十郎、五郎』と大きく書いた白布を胸に縫ひ付けてゐるので、誰の眼にも着き易く、往來の兵士等が面白半分に『十郎、五郎』と呼ぶので、二人も一々その返事をするのに困つてゐるやうでした。苦力の曾我兄弟はまったく珍しかつたかも知れません。

東京へ歸つてから聞きますと、伊井蓉峰の新派一座が中洲の眞砂座で日露戦争の狂言を上演、曾我兄弟が苦力に姿をやつして満洲の戦地へ乗込み、父の仇の露國將校を討取るといふ筋であつたさうで、苦力の五郎十郎が暗合してゐるには驚きました。但し私達の五郎十郎は正真正銘の苦力で、かたき討などといふ芝居はありませんでした。

『なにか旨い物が食ひたいなあ。』

そんな贅澤を云つてゐるのは、駐屯無事の時で、一とたび戦闘が開始すると、飯どころの騒ぎでなく、時には唐蜀黍を焼いて食つたり、時には生玉子二個で一日の命を繋いだこともありました。沙河會戦中には、農家へ這入つて一椀の水を貰つたきりで、朝から晩まで飲まず食はずの日もありました。不眠不休の上に飲まず食はずで、よくも達者に駈け廻られたものだと思ひますが、非常の場合にはおのづから非常の勇氣が出るものです。そんな場合でも露西亞兵携帯の黒パンはどうしても喉に通りませんでした。支那人が常食の高梁も再三試食したことがあります、これは食へない事ありませんでした。戦闘が始まると、支那人はみな避難してしまふので、その高梁飯も戦闘中には求めることが出来ず、空腹をかゝへて駈けまはる事になります。

燈火は蠟燭か火繩で、物をかく時は蠟燭を用ひ、暗夜に外出する時には火繩を用ゐるのですが、この火繩を振るのが案外にむづかしく、緩く振れば消えてしまひ、強く振れば振り消すと云ふわけ

で、五段目の勘平のやうな器用なお芝居は出来ません。今日ならば懷中電燈もあるのですが、不便な事の多い時代、殊に戦地ですから已むを得ないのです。火繩を振るのは路を照らす爲ばかりでなく、野犬を防ぐ爲です。滿洲の野原には獐猛な野犬の群が出没するので困りました。殊にその野犬は戦場の血を嘗めてゐるので、ますく獐猛、殆ど狼にひとしいので、我々を恐れさせました。そのほかに、蝸、南京蟲、虱、等。いづれも夜となく、晝となく、我々を悩ませました。蝸に螫されると命を失ふと云ふので、虱や南京蟲に無神経の苦力等も、蝸と聞くと顔の色を變へました。

『新聞記者に危険はありませんか。』

これは屢々たづねられますが、決して危険がないとは云へません。従軍記者も安全の場所にばかり引籠つてゐては、新しい報告も得られず、生きた材料も得られませんから、危険を冒して奔走しなければなりません。文字通りに、砲烟彈雨の中をくぐることも屢々あります。日清戦争には二六新報の遠藤君が威海衛で戦死しました。日露戦争には松本日報の川島君が沙河で戦死しました。川島君は砲彈の破片に撃たれたのです。私もその時、小銃彈に帽子を撃ち落されましたが、幸ひに無事でした。その彈丸がもう一寸と下つてゐたら、唯今こんなお話をしてはゐられませんまい。私のほ



かにも、斯ういふ危険に遭遇して、危く免れた人々は幾らもありません。殊に今日は空爆といふ事もありますから、いよ／＼油断はなりません。

今度の事變にも、北支に、上海に、もう幾人かの死傷者を出したやうです。この事變がどこまで擴大するか知れませんが、従軍記者諸君のあひだに此の以上の犠牲者を出さないやうにと、心から祈つて居ります。

(昭和十二年八月十三日)

日清戦争劇

一

明治二十七八年の日清戦争は、七月二十五日の豊島沖海戦、二十九日の牙山陸戦を経て、八月一日の宣戦公布に始まる。その當時の東京大劇場は歌舞伎、新富、明治、市村、春木の五座であつたが、八月は例に依つて各座休場である。明治十一年の新富座における西南戦争劇大當りの噂話は今も楽屋内に残つてゐたのであるから、劇場関係者はいづれも今度の戦争に眼を着けたらしいが、何分にも國と國との戦争で、事件が頗る大きいために、迂濶に手を着けることが出来なかつた。警視廳でも容易に許可しない方針であつた。

その面倒をくゞり抜けて、種々に運動の結果、どうか警視廳の許可を得て、第一着に戦争劇の旗擧げをしたのは、書生芝居の川上晋二郎であつた。それは『日清戦争』七幕で、八月三十一日か

ら開場した。劇場は浅草座である。この劇場は明治二十五年四月から浅草區新猿屋町、俗稱どぜう屋横町に新築開場したもので、浅草公園の吾妻座に對抗し、小劇場中では先づ高等の地位を占めてゐたが、興行成績はあまり思はしくなかつたらしく、最初は澤村座といひ、更に浅草座と改稱し、今年も三月以來殆ど興行を休んでゐる有様であつたが、この興行は近來無比の大當りで、連日満員の好成績を擧げた。

この脚本は誰の筆に成つたのかを知らないが、恐らく川上や藤澤浅二郎等が相談の上、藤澤や岩崎薺花などの人々が分擔して、一日の狂言に綴り上げたものであらうかと察せられる。勿論一種の實際物であるから、むづかしく論評すべきではないが、短時日のあひだに纏めた急仕事としては、人物の配合や場面の變化にも相當の注意を拂つた跡があり、その後に出した各種の日清戦争劇のなかでは、やはり此の『日清戦争』などが優等の地位を占めるものではないかと、私は今でも思つてゐる。

川上は比良田鐵哉といふ新聞記者に扮してゐた。藤澤も水澤恭二といふ新聞記者に扮し、この二人が戦地で活躍するのを主眼としたもので、それに石田信夫の春田しげ子といふ婦人を配してある。

事實をそのまま脚色することは遠慮せよといふ當局の注意でもあつたと見えて、一切が架空の脚色で、川上の新聞記者が間諜の嫌疑を受けて北京城内の牢獄に投ぜられ、更に李鴻章の面前に牽き出されて大いに氣焔を吐く所が一日中の見せ場になつてゐた。李鴻章に扮した高田實が好評で、高田はこれから俄に賣出したのである。戦争の場はいづれも大喝采で、日本軍人と支那兵との激戦、これは書生芝居の獨特で、歌舞伎役者にあの真似は出来まいと賞讃された。舞臺に南京花火をボンボン投げ付けて小銃弾と見せる技巧も、その當時の観客の耳目を駭かして、さながら實戦を観るが如くだと云はれた。

一方には、右の如き寫實めいた亂闘を演じながら、又その間に相當の歌舞伎式を取入れることを忘れないのが、彼等の俐口な點でもあつた。たとへば北京城外で戦闘が一回あつた後、舞臺は暫く空虚、そこへ上手から水野好美の植島少將が出て、望遠鏡で向うをながめてゐると、下手から一人の支那兵が旗をつけた槍を持つて出で、少將をめがけて突いてかゝると、少將は軽く身をかはして片手に槍の柄をつかみ、やはり無言で向うを眺めてゐる。槍をつかまれた支那兵はブル／＼顫へてゐるので幕。かういふ幕切れは、俳優も好い心持であらうが、観客も大喝采である。歌舞伎に反抗

して寫實を標榜してゐながら、歌舞伎の形式で觀客に受けさうな所は遠慮なく取入れる。彼等が人氣を獲る所以もそこにあると、私はひそかに感心した。

これを皮切りに、戦争劇が各劇場に續々上演されて、みな相當の成績を擧げた。それらを一々紹介するに堪へないが、前にもいふ通り、第一回の『日清戦争』は生々しい事實を避けて、架空の脚色、架空の人物のみを以て組み立てられてゐた。その遠慮は無用となつたらしく、その後の戦争劇には大島公使、松崎大尉、原田重吉など、實在の人物がみな登場した。敵國の李鴻章や袁世凱などは勿論である。その代りに、檢閲濟みの脚本を忠實に上演すべく、妄りに臺詞を變更し、あるひは餘計な臺詞を付け加へてはならぬと、警視廳から特に注意された。

開戦當初は軍需品關係の一部を除いて、世間一般はかなりの不景氣であつた。殊にこの際、各種の遊樂は遠慮すべきであると云ふので、温泉場や料理屋のたぐひは總て寂寥たる有様であつたが、戦争劇を上演する各劇場はみな相當に繁昌した。取分けて戦争劇は書生芝居に限ると歡迎されて、川上一派以外の書生芝居も戦争劇で大入りを占めた。今までは壯士芝居とか書生芝居とかいふ名の下に、一種輕蔑の眼を以て眺められてゐた彼等一派が大いに世間に認められ、今日の新派劇の基礎

を築くに至つたのは、この時より始まつたのである。

淺草座で成功した川上は、材料蒐集の爲と稱して朝鮮まで出て行つたが、十一月下旬に歸京すると、十二月三日には直ぐに市村座の初日を明けた。元來がセカ／＼してゐるやうな男であつたが、萬事が實に機敏であつた。その狂言は『川上晋二郎戦地見聞日記』七幕、これまた人氣に投じて、小屋も割れるばかりの大入りを取つた。つゞいて翌二十八年二月には同じく市村座で『戦争餘談明治四十二年』を上演すると、これも大當りであつた。我が陸海軍と同様に、川上一派は連戦連捷、まつたく破竹の勢を示して、その五月には歌舞伎の本城たる歌舞伎座に乗込み、彼等は完全に新派劇の一王國を築くことになつた。その狂言は『威海衛陥落』三幕で、高田實の丁汝昌は『日清戦争』の李鴻章と異曲同工であつたが、その悠然たる態度が更に好評を博した。

いづれにしても日清戦争は新派に對して大活躍の機會をあたへた。その機會を巧みに捕捉したのは川上晋二郎の功である。第二の日清戦争が勃發した場合、現在の新派はいかなる態度を取るか、我々は多大の興味を以て注目してゐる。

二

歌舞伎の側でも今度の戦争をよそに眺めてゐるわけではなかつた。浅草座の川上一派に對抗して、先づ第一に開場したのは本郷の春木座であつた。春木座は後年の本郷座で、その當時の経営者は溝口権三郎である。狂言は『日本大勝利』で、初日は九月十一日、浅草座と十日間の差であるから、この當時としてはこれも早手廻しの部であつた。

筋立は新聞記事の継ぎ合せで、俳優は市川八百藏(後の中車)岩井松之助、四代目中村芝翫、中村勘五郎、それに大阪俳優の中村雀右衛門、中村富士郎、市川駒之助等が加はつて、先づ相當の顔觸れであつたが、脚本も大阪仕込みの勝何某の筆に成つたので、どこまでも在來の歌舞伎調を離れず、俳優もかういふ現代物には不馴れの連中のみであつたので、舞臺の上の活氣に乏しく、時節柄とて興行成績は左のみに悪くもなかつたが、その評判は甚だ悪く、八百藏の李鴻章は高田實に遠く及ばずといふ不評であつた。殊にその眼目とする戦争の場が兎かくに舊式の立廻りに流れ、一向に實感を誘はないといふのが不評の大原因であつた。

春木座はかゝる不評に終つたが、戦争劇でなければ観客に顧みられない時節であるから、他の劇場も安閑としてはゐられなかつた。明治座の左團次一派も十月五日から戦争劇の蓋をあけた。作者は黙阿彌が高弟の一人たる竹柴其水で、狂言は『會津産明治組重』七幕である。通し狂言でありながら、一番目と二番目に書き分けられたやうな形で、前の四幕は明治初年の會津戦争、後の三幕は今度の日清戦争、そのあひだに登場人物の連絡があるやうに仕組まれてゐた。

前半はこゝに紹介する必要はない。後半の日清戦争も海陸戦の場は春木座と同様、歌舞伎俳優の弱點を暴露するに留まつたが、第六幕の築地入船町長屋の場が好評であつた。どこの劇場で上演する戦争劇もみな一種の傑作で、浅草座の『日清戦争』以外はいづれも新聞記事を拾ひ集めたに過ぎず、その時かぎりの掛け流しに終つたが、この一幕だけは全く作者の創作で、確に戯曲的價値を具へてゐた。その當時、幾十種に上る日清戦争劇を淘汰して、そこに残る物があるとすれば、恐らく此的一幕であらうと思ふ。

筋の大意は、日清戦争が起つた爲に、在留の清國人は殆どみな本國へ引揚げることになる。入船町の長屋に住む道昌恵といふ清國人は、おぎんといふ日本人を妻とし、双種といふ男の兒まで儲け

だが、これも同國人等に誘はれて歸國することになつた。彼は自分の故國を好まない上に、妻子に強い愛着を抱いてゐるので、このまゝ引揚げる心になれない。差配人の長兵衛から有難いお達しといふのを聞かされて、彼は一旦喜んだ。

そのお達しに據ると、たとひ交戦國民であらうとも、無理に歸國するには及ばない。留まりたい者は勝手に留まれ、我が警察で完全に保護して遣るといふのである。家主はそれを説明して、わが文明國を誇るのであるが、こゝに一つの難儀があつた。日本に留まる清國人はその住所、姓名、年齢、職業を届け出て、登録を受けなければならぬと云ふのである。住所姓名などは仔細ないが、表向きに届け出ることを許されないのは道昌惠の職業である。彼は祕密にチーハーを売り歩いてゐるのであつた。

チーハーは一種の富圖のやうなもので、その賣買は禁じられてゐるが、築地邊に住む清國人のあひだには密かにそれを携へて、工場の職工や人力車夫や裏長屋の女房などに売り歩いてゐるのが多い。道昌惠も最初は南京縹子を賣つてゐたのであるが、その商賣が思はしくないので、近頃は専門のチーハー賣に化けてしまつた。おまへの商賣は何だと警察から訊かれた時に、禁制のチーハーを

賣つてゐますとは答へられない。無職業の彼には登録を受ける資格がないのである。道昌惠は涙を揮つて歸國するの外はなかつた。彼は最愛の妻子に別れ、同情ある相長屋の日本人等に見送られ、自分の荷物を人力車に積み込んで、その後押しをしながら悄然として立去るのである。その當時、入船町、新榮町のあたりは下級清國人の巢窟で、そのなかでも高等な者は國産の南京縹子を売り歩く、次は支那製の駄菓子を売り歩く、又その次は例のチーハーを売り歩くのが多い。作者の其水は南八町堀に住んでゐたから、その近所の下級清國人等の生活を平素から親しく見聞してゐたのであらう。あるひは實際にこんな事があつたのかも知れない。

この劇を観て、先づ愉快に感じられるのは、この不幸なる道昌惠に對して周囲の日本人等が多大の同情を寄せてゐることである。當時の流行語のチャン／＼坊主とか、チャンコロとか云つたやうな、輕侮や憎惡の念を以て立向ふ者なく、彼に對しても、又その妻子に對しても、みな濫い同情の眼を以て眺めてゐる。この場合になつても、夫は妻を愛してゐる、妻も亦夫を愛してゐる。これも美しい人情の流露である。道昌惠は李鴻章等の無謀を難じて、なぜ戦争を始めたか、國が大きくとも人民に愛國心が乏しいから、屹と負けるに相違ないといふ。かうした意味のことを日本人の口か

ら云はせず、却つて清國人の口から云はせたのは效果的で好い。

その中で唯一人、道昌恵に對して敵愾心を發揮してゐるのは、その妻おぎんの兄である。兄は請負師か何かであるらしいが、舞臺には姿をあらはさず、道昌恵が歸國の旅費について、妹から無心の手紙を出した處、彼はキビ／＼した拒絶の郵便をよこしてゐる。曰く『このあひだの返事、たびたびの催促だから忌々ながら出し候。ヤイ妹、よく物を考へてみる。手めえの心柄で、チャン／＼の所へ行きやがつて——。ベランメエ、たとひ石が舍利になるとも、南京のな、の字には百も貸せねえ。手めえに貸す錢があるなら、陸海軍に献金すらあ。あんまり人を甘く見やがるな——。』

大體こんな文句の手紙で、チャン／＼なんぞに構はずに、お前はおれの家へ歸つて來いと云ふのである。手紙の文句はモツと長く、盛んに江戸子を振廻してゐるので、道昌恵にはよく判らない。妻のおぎんが一々に通譯して聞かせるのである。こゝらは一種の悲喜劇で、観客は思はず笑ひ出すのであるが、舞臺の俳優は飽までも眞面目である。道昌恵は嘆息する、おぎんは泣く。こゝらの段取りも頗る戯曲的に出來てゐる。

その頃の歌舞伎狂言であるから、たとひザンギリ物の世界でも、かういふ世話場にはチヨボを用ゐてゐる。子供をカセにして泣かせるやうに巧んである。それ等を舊套と云へば云ふものゝ、歌舞伎式の日清戦争劇としては確に佳作であると云つてよい。作者ばかりでなく、俳優も皆好かつた。役割は左團次の道昌恵、坂東秀調のおぎん、市川壽美藏の差配人長兵衛等であつたが、左團次の支那人は殊によかつた。平生のキリ、とした舞臺顔にも似合はず、いかにも薄ボンヤリしたやうな下級支那人の風采を寫し得て妙といふの外なく、向う揚幕から悄然と出て來た時には、誰も左團次とは思はない位であつた。私も最初は別人かと疑つた。臺詞廻しも平生のキビ／＼した調子でなく、いかにも支那人らしい薄鈍い片言が眞に迫つてゐた。

この一幕は大好評で、都新聞の評者は「これが際物でなくば、大杯や慶安太平記と同様に、優の專賣物ともなつて將來歓迎さるべきものを、惜しいことなり」と云つてゐるが、私も同感である。左團次はその後も横濱で此的一幕だけを再演したやうに記憶してゐるが、狂言の性質上、平生はどらうも出しにくいと見えて、『支那人の別れ』といふ噂は樂屋に残つてゐながら、東京では今まで再演されない。今度若し日支戦争劇でも上演されるやうな場合になつたら、當代の左團次は先づ先代の形見たる『支那人の別れ』に着手すべきであらう。

三

次は團十郎と菊五郎の戦争劇である。書生芝居は勿論、いづこの歌舞伎劇でも一順は戦争劇を上演することになつたので、その本城の歌舞伎座でも黙視してゐるわけには行かなくなつたのであらう、十一月一日から福地櫻痴居士作の『海陸連勝日章旗』五幕を上演した。中幕は團十郎の吃又、菊五郎のおとくで『傾城反魂香』を見せた。

戦争劇の役割は團十郎の大森公使、土族近藤新右衛門、水夫舵藏、菊五郎の榎本少佐、近藤新五郎、尾淵中將、澤田重七で、兩優いづれも幕毎に登場といふ勉強振りであつた。菊五郎は澤田重七の役名で平壤の玄武門先登を見せる。團十郎は水夫舵藏の役で軍夫等をあつめ、鏗節を軍艦になぞらへて舞臺に置き列べながら、黄海々戦の物語をする。この二場が菊五郎と團十郎の見せ場になつてゐたが、どれも喝采を博するに至らなかつた。戦争の場は御多分に洩れず、こゝも不評であつた。さうして、かういふ芝居は團菊を煩はすまでも無いといふのが一般の評判であつた。

私もこの劇を見物したが、中幕の『反魂香』は實に結構で、流石は兩名優の顔揃ひであると感服させられた。而も戦争劇は甚だ不感服であつた。團菊を煩はすまでも無いと云はれるのは脚本の罪であつて、戦争劇の爲ではない。若し明治座の『支那人の別れ』か、又はそれ以上の脚本をあたへたならば、兩名優がどんなにそれを仕活したか判らない。こんな乾燥無味な脚本では、どんな名優でも技倆を揮ふ餘地があるまい。際物であるから兩優もよんどころなく承知したのであらうが、こんなことで幕毎に働かされる團十郎も菊五郎も氣の毒であると私は思つた。兎もかくも戦争劇と名乗つてゐるお蔭で、それほど惨めな不入りでもなかつたが、この興行は決して好成绩とは云はれなかつた。

歌舞伎側の戦争劇はいづれも一回かぎりに終つたが、大小の書生芝居は其後も幾たびか同じ題材を繰返して、戦争劇は長く彼等の米櫃となつた。四十餘年後の今日は劇界の形勢も大いに變化してゐる。俳優の藝風も變化してゐる。新しい戦争劇が上演される場合、歌舞伎派が勝つか、新派が勝つか、これも興味ある問題であらう。而も良い脚本を得たものが勝つと云ふことは、以上の事實が證明してゐる。新しい戦争劇は新聞の切抜きであつてはならない。

西鄉山房隨筆

我家の園藝

目黒へ移つてから三年目の夏が来るので、彼岸過ぎから花壇の種蒔きをはじめた。舊市外であるだけに、草花類の生育は悪くない。種をまいて相當の肥料をあたへて置けば、先づ普通の花はさくので、我々のやうな素人でも苦勞はないわけである。

そこで、毎年慾張つて二十種乃至三十種の種をまいて、庭一面を藪のやうにしてゐるのであるが、それでは藪蚊の棲家を作る虞れがあるので、今年はあまり多くを蒔かないことにした。それでも、ちま、と百日草だけは必ず栽ゑようと思つてゐる。

私はむかしの人間であるせゐか、西洋種の草花はあまり好まない。チューリップ、カンナ、ダリアのたぐひも多少は栽ゑるが、それに広い地面を分譲しようとは思はない。日本の草花でも優しげな、な、よ、くしたものには面白くない。桔梗や女郎花のたぐひは餘り愛らしくない。私の最も愛する

のは、へちまと百日草と薄、それに次いで日まはりと鶏頭である。

かう列べたら、大抵の園藝家は大きな聲で笑ひ出すであらう。岡本綺堂といふ奴はよく／＼の素人で、とてもお話にはならないと相場を決められてしまふに相違ない。私もそれは萬々承知してゐるが、心にもない嘘をつくわけには行かないから、正直に告白するのである。まあ、笑はないで聽いて貰ひたい。

先づ第一には絲瓜である。私はむかしからへちまを面白いものとして眺めてゐたが、自分の庭に栽ゑるやうになつたのは十年以來のこと、震災以後、大久保百人町に假住居をしてゐる當時、庭のあき地を利用して、唐蜀黍の畑を作り、へちまの棚を作つた。その棚は私自身が書生を相手にこしらへたもので、素人の作つた棚が無事に保つかと聊か不安を感じてゐたところが、棚はその秋の強い風雨にも恙なく、へちまの蔓も葉も思ふさま伸びて擴がつて、大きい實が十五六もぶらりと下つたので、私たちは子供のやうに手をたゞいて嬉しがつた。

その翌年の夏、銀座の天金の主人から、暑中見舞として式亭三馬自畫讚の大色紙の複製を貰つた。それはへちまでなく、夕顔の棚の下に農家の夫婦が涼んでゐる圖で、いはゆる夕顔棚の下涼みであ

らう。それに三馬自筆の狂歌が書き添へてある。

なりひさご、なりにかまはず、すゞむべい

風のふくべの木蔭たづねて

これを見て、わたしは再びへちまの棚が戀しくなつたが、その頃はもう麴町の舊宅地へ戻つてゐたので、市内の庭にはへちまを栽ゑるほどの餘地をあたへられなかつた。そのまゝ幾年を送るうちに、一昨年から目黒へ移り住むことになつたので、今度は本職の植木屋に頼んで相當の棚を作らせると、果して其年の成績はよかつた。昨年の出来もよかつた。

私の家ばかりでなく、こゝらには同好の人々が多いとみえて、所々に絲瓜を栽ゑてゐる。棚を作つてゐるのもあり、或は大木にからませてゐるのもあり、軒から家根へ這はせてゐるものもあるが、皆それ／＼に面白い。由來、へちまといふものはぶらりと下つてゐる姿が、何となく間が抜けて見えるので、兎かくに輕蔑される傾きがあつて、人を罵る場合にも「へちま野郎」などといふが、そのぶらりとした所に一種の俳味があり、一種の野趣があることを知らなければならぬ。その實ばかりでなく、大きい葉にも、黄い花にも野趣横溢、靜にそれを眺めてゐると、まつたく都會の塵の

浮世を忘れるの感がある。丝瓜を輕蔑する人々こそ却つて俗人ではあるまいかと思ふ。

次は百日草で、これも野趣に富むがために、一部の人々からは安つぽく見られ易いものである。梅雨のあける頃から花をつけて、十一月の末まで咲きつゞけるのであるから、實に百日以上である上に、紅、黄、白などの花が續々と咲き出すのは、なんとなく爽快の感がある。元來が強い草であるから、蒔きさへすれば生える、生えれば伸びる、伸びれば咲く。花壇などには及ばない、垣根の隅でも裏手の空地でも簇々として發生する。あまりに強く、あまりに多いために、やゝもすれば輕蔑され勝の運命にあることは、彼の鳳仙花などと同様であるが、私は彼を愛すること甚だ深い。

炎天の日盛りに、彼を見るのも好いが、秋の露がやうやく繁く、こほろぎの聲がいよゝ／＼多くなる時、花もますますその色を増して、明るい日光の下に咲き誇つてゐるのは、いかにも鮮かである。所詮は野人の籬落に見るべき花で、富貴の庭に見るべきものではあるまいが、我々の荒庭には缺くべからざる草花の一種である。

その次は薄で、これには幾多の種類があるが、普通に見られるのは糸すゝき、縞すゝき、鷹の羽すゝきに過ぎない。而も私の最も愛好するのは、そこらに野生の薄である。これは宿根の多年草で

あるから、もとより種まきの世話もなく、年々歳々おひ茂つて行くばかりである。野生のすゝきは到るところに繁茂してゐるので、ひと口にカヤと呼ばれて殆ど園藝家には顧みられず、人家の庭に栽ゑるものでは無いとさへも云はれてゐるが、繪畫や俳句ではなか／＼重要な題材と見なされてゐる。

十郎の簞にや編まん青薄

これは角田竹冷翁の句であるが、まつたく初夏の青すゝきには優しい風情がある。それが夏を過ぎ、秋に入ると、殆ど傍若無人ともいふべき勢ひで生ひ擴がつてゆく有様、これも一種の爽快を感じずにはゐられない。殊に尾花がやうやく開いて、朝風の前になびき、夕月の下にみだれてゐる姿は、あらゆる草花のうちで他にたぐひなき眺めである。

すゝきは夏も好し、秋もよいが、冬の霜を帯びた枯すゝきも十分の畫趣と詩趣をそなへてゐる。枯れかゝると直ぐに刈り取つて風呂の下に投げ込むやうな徒は俱に語るに足らない。而も商賣人の植木屋とて油斷はならない。現に去年の冬の初めにも、池のほとりの枯すゝきを危く刈り取られようとするのを發見して、私があわてゝ制止したことがある。彼等もこの愛すべき薄を無名の雜草並

に取扱つてゐるらしう。

市内の狭い庭園は薄を栽ゑるに適しないので、私は箱根や湯河原などから持ち來つて移植したが、いづれも年々に瘦せて行くばかりであつた。目黒に移つてから、近所の山や草原や川端をあさつて、野生の大きい幾株を引抜いて來た。誰も知つてゐることであらうが、薄の根を掘るのはなかくの骨折り仕事で、書生もわたしもがつかりしたが、それでもどうにか引摺つて來て、池のほとり、垣根の隅、到るところに栽ゑ込むと、こゝらは流石に舊郊外だけに、その生長はめざましく、あるものは七八尺の高きに達して、それが白馬の尾髪をふり亂したやうな尾花をなびかせてゐる姿は、わが家の庭に武藏野の秋を見るこゝちである。あるものは小さい池の岸を掩つて、水に浮かぶ鯉の影をかくしてゐる。あるものは四つ目垣に乗りかゝつて、その下草を壓してゐる。生きる力のこれほどに強大なのを眺めてゐると、自分までがおのづと心強いやうにも感じられて來るではないか。

すゝきに次いで雄姿堂々たる草花は、鶏頭と日まはりである。いづれも野生的であり、男性的であることいふまでも無い。日まはりも震災直後はバラックの周圍に多く栽ゑられて一種の壯觀を呈してゐたが、區劃整理のおひく進捗すると共に、その姿を東京市内から消してしまつて、わづか

に場末の破れた垣根のあたりに、二三本ぐらゐづつ栽ゑ残されてゐるに過ぎなくなつた。而も盛夏の赫々たる烈日の下に、他の草花の凋れ返つてゐるのをよそに見て、悠然とその大きい花輪をひろげてゐるのを眺めると、暑い暑いなどと弱つてはゐられないやうな氣がする。

鶏頭も美しいものである。これにも種々あるらしいが、やはり普通の深紅色がよい。オレンジ色も美しい。これも初霜の洗禮を受けて、その濃い色を秋の日にかゞやかしながら、見あぐるばかりに枝や葉を高く大きく擴げた姿は、まさに目ざましいと禮讚するのほかは無い。わたしの庭ばかりでなく、近所の籬落には皆これを栽ゑてゐるので、秋日散歩の節には諸方の庭をのぞいて歩く。それが私の一つの楽しみである。葉鶏頭は鶏頭に比してやゝ雄大の趣を缺くが、天然の錦を染め出した葉の色の美しさは、なんとも譬へやうがない。而もわたしの庭の葉鶏頭は、どういふわけか年々の成績がよろしくない。他から好い種を貰つて來ても、餘り立派な生長を遂げない。私はこれのみを遺憾に思つてゐる。

わたしの庭の草花は勿論これに留まらないが、わたしの最も愛するものは以上の數種で、いづれも花壇に栽ゑられてゐるものではない。それにつけても、考へられるのは自然の心である。自然は

人の勞力を費すこと少く、物質を費すこと少きものを選んで、最も面白く、最も美しく作つてゐる。それは人間にあたへられる自然の恩恵である。人間はその恩恵にそむいて、無用の勞力を費し、無用の時間を費し、無用の金銭を費して、他の變り種のやうな草花の栽培にうき身をやつしてゐるのである。さうして自然の恩恵を無條件に受入れて楽しむものを、或は素人といひ、或は俗物と嘲つてゐるのである。かういふのはあなたがちに私の負惜みではあるまい。

(昭和十年五月)

怪奇一夕話

*

春の雑誌に何か怪奇趣味の隨筆めいたものを書けと命ぜられた。これは難題であると私は思つた。

昔も今も新年は陽氣なものである。お屠蘇の一杯も飲めば、大抵の弱蟲も氣が強くなつて、さあ矢でも鐵砲でも幽霊でも化物でも何でも來いといふことになる。怖い物見たさが人間の本能であると云つても、屠蘇氣分と新年氣分とに壓倒されて、その本能も當分屏息の體である。その時、ミステリアスが何うの、グロテスクが何うのと云つたところで、恐らくまじめに受付けては呉れないであらう。同じグロならマグロの刺身でも持つて來いぐらゐに叱られるか、岡本もいよゝ老筆したなと笑はれるか、二つに一つである。

初春の寄席の高坐で牡丹燈籠を口演する者はない。春芝居の舞臺に四谷怪談を上演した例を知らない。さう考へると、全くこれは難題であると思つたが、一旦引受けた以上、今更逃げるわけにも行かない。私が若い時、狂歌の會に出席すると、席上で『春の化物』といふ題を出された。これも難題で頗る閉口したが、まあ我慢して左の二首を作つた。

春雨にさす唐傘のろくろ首けら／＼と笑ふ梅が香

執着は娑婆に残んの雪を出でて誰に恨をのべの若草

それでも高點の部に入つて、いさゝか天狗の鼻を高くしたことがある。そこで、これから書く隨筆まがひの物も、春は春らしく、前に掲げた狂歌程度で御免を蒙らうと思ふ。百物語式の物凄い話は——と云つても、實はそんな怪談を澤山に知つてゐるのでは無い。——秋の雨がそぼ／＼と降つて、遠寺の鐘がポーンと聞えて来るやうな時節までお預かりを願つて置くことにしたい。

なんと云つても、怪談は支那が本場である。日本に傳來の怪談は畢竟わが國産ではなく、支那大陸からの輸入品が多い。就ては、先づ支那を中心として、日本と外國の怪奇談を少しく語りたい。

*

論語に『子は怪力亂神を語らず。』とある。この解釋に二様あつて、普通は孔子が妖怪を信じないと云ふやうに受取られてゐるのであるが、又一説には、孔子は妖怪を語らないと云ふに過ぎないのであつて、妖怪を信じないと云ふのではない。孔子も世に妖怪のあることを認めてはゐるが、そんなことを妄りに口にしないのであるといふ。成程、さういへば然ういふ風に解釋されないことも無い。『語らず』と『信ぜず』とは、少しく意味が違ふやうに思はれる。

現にその孔子も妖怪に襲はれてゐる。衛にあるあひだに、ある夜その旅舎の庭に眞黒な姿の怪しい物が現れたので、子路と子貢が庭に飛び降りて組み付いたが、敵はなか／＼の曲者で、二人の手に負へない。そこで、孔子も燭を執つて出て、そいつの鬚をつかめとか、胸を押へるとか指圖した。それでやう／＼取押へてみると、怪物は巨大なる鯉魚であつたといふ。鯉魚は鯰のやうな魚類であるらしい。大鯰はなんの爲に化けて出たのか、相手を聖人と知つてか知らずか、それは勿論穿索の限りでないが、兎も角もかういふ怪物が目前に出現した以上、孔子も妖怪を信じないわけには行か

なかつたであらう。かうなると、『語らず』は文字通りの『語らず』であつて、『信ぜず』といふのでは無いらしい。

唐の韓退之は佛教大反對で、聖人の道を極力主張したので有名の人物であるが、この韓退之も雪の降る夜、柳宗元等と一堂に集まつて鬼神を論じてゐると、折から烈しい吹雪のなかに螢のごとき火が點々と現れた。忽ちに千萬點、それが一團の大きい火の玉となつて室内に飛び込んで来て、そこらをくるくると舞つてゐたかと思ふと、やがて一堂も揺らぐばかりの凄まじい響きをなして飛び去つたので、剛厲を以て聞えた韓退之もさすがに顔色を變へた。ほかの人々はもろろん蒼くなつた。その後、韓退之も柳宗元も遠流されたりして、その怪を見た者はみな不運であつたといふ。

そんなわけで、孔子を始めとして、その道を祖述した學者や識者も皆さまざまの怪異に出逢つてゐるのであるから、一般の人間が妖怪を信ずるのも無理はない。東晋の干寶は幼より學を好み、古來の怪奇傳説などを一切信憑しなかつたが、あるとき我家に仕へてゐる下婢に關して靈異の事實があつたので、世には理外の理あることを初めて信ずるやうになつて、爾來専らその研究に没頭することになつた。有名なる『搜神記』二十卷は、彼が多年の研究の産物であると傳へられてゐる。そ

の『搜神記』の中には、眉唾に値するものが多々あるやうに思はれるが、著者の干寶自身は案外まじめにそれを信じてゐたのかも知れない。

『搜神記』は古來有名の書であるから、今更わたしが改めて紹介するまでもないが、この書の特徴といふべきは妖を妖とし、怪を怪として記述するに留まつて、支那一流の勸善懲惡や因果應報を説いてゐない所にある。總て理窟もなく、因縁もなく、單に怪奇の事實を蒐集してあるに過ぎない。そこに怪談の價値があるのであつて、流石に支那の怪談の開祖と稱してよい。唐の段成式の『酉陽雜俎』は正續あはせて三十卷、一種の三才圖會式の物ではあるが、これにも『搜神記』同様の怪談が多い。支那に所謂『志怪の書』の多いのは周知の事實で、まったく汗牛充棟と云へるであらう。又、普通の隨筆又は筆記のうちにも大抵は幾多の怪奇談を編入してあるから、量に於ては實におびたゞしいものであるが、その根源は『搜神記』と『酉陽雜俎』の兩書を出でない。殊に後世の作物には教訓的の勸懲主義を多量に含んでゐるものが多いので、怪談としての價値がいよゝ稀薄になつてゐる。

清の紀曉嵐の『閱微草堂筆記』は有名の大著で、奇談怪談のたぐひ三千餘種を網羅し、斯界に新

生面を拓いたと稱せられてゐるが、一方には宋儒の説を排撃し、又一方には例の勸懲主義を鼓吹するに急にして、肝腎の怪奇趣味を大いに滅殺してゐる感がある。それと同時代の作物で、袁隨園の『子不語』もまた有名の大著である。世間一般の定評では、『子不語』を『閔微草堂筆記』の下位に置くやうであるが、私などの観るところでは、『子不語』は怪談を怪談として記述するに留まつて、前者のやうに種々の議論を加へてゐないのが却つて良いと思ふ。怪談に理窟を附會するのは禁物である。宋の洪邁の大著『夷堅志』などにも殆ど理窟を説いてゐない。

以上の『閔微草堂筆記』や、『子不語』のたぐひは、時代が比較的新しいので、文化文政度における我が作家連の眼に觸れなかつたらしく、翻案専門の曲亭馬琴などの作物にも全然借用されてゐない。而も『搜神記』『酉陽雜俎』『夷堅志』の類になると、第一は六朝、次は唐、次は宋といふのであるから、遠い昔から我國に輸入されて、彼の『今昔物語』や『古今著聞集』などに種々の翻案材料を提供してゐる。『今昔物語』は大納言隆國卿が宇治に閑居し、往來の者を呼びあつめて其の物語を筆記したなどと傳へられてゐるが、實は『搜神記』その他の記事を翻案したものが多し。したがつて、源義家がどうしたの、平貞盛がどうしたのと云ふ、實在人物に關する記事にも信を置けな

いのが往々にして見出される。

更に下つて江戸時代の初期になると、元祿前後から享保前後に亙る五六十年間は、實に怪談全盛時代と云ふべきであつて、出版がまだ完全に發達しない時代であるにも拘らず、多數の怪奇談集が續々發行され、西鶴や團水の諸家は皆その方面にも筆を染めてゐる。而もその大部分は例の『搜神記』や『酉陽雜俎』のたぐひの翻案で、どこの國の何といふ村に起つた出來事であるなどと、まさしく書いてあつても、大抵は作り話であること云ふまでもない。作り話も創作でなく、その多くは翻案である。わが國に創作の怪談は少い。

前にも云ふごとく、更に文化文政度まで下つて來ると、本家の馬琴を始めとして、その他の作家の小説類にも、なにかの怪談を取入れてあるが、それが矢張り翻案であるのは、少しく支那の小説筆記類を讀んだ者の悉く知る所である。したがつて、日本人の怪奇趣味は支那趣味を多量に含んでゐるものと思はなければならぬ。

春の化物に理窟や考證めいたことは無用である。こゝは好加減に切上げて話題を他に轉向することにする。

*

デフォアの書いた『ヴェキール夫人の亡霊』は千七百五年九月八日の正午十二時に、カンタベリに住むバークレー夫人を訪問したのである。意外の事を『白晝の幽霊』といふが、これは確に白晝の幽霊である。筆者のデフォもそれが事實であることを強調し、一般の讀者もそれを事實談として信じ來つたのであるが、今日ではそれが作り話であると云ふことになつた。デフォが某書店に頼まれて、フランスの神學者の著書を宣傳するために書いたのだと云ふのである。デフォ先生もそんなインチキを遣つたのかと、私も少々意外に感じてゐるのであるが、兎も角もヴェキール夫人の訪問が正午十二時とあるからは、眞晝間に幽霊が出現したと云つても、事實談として他人を信用させることが出来たらしい。

併し外國でも白晝の幽霊は少い。幽霊は夜陰に出現するものであると云ふのが一般の常識になつてゐる。日本でも幽霊は暗い時、暗い處にぼんやりと現れるものに決められてゐるやうである。ところが、支那の幽霊はさうでない。白晝公然と現れるのは一向に珍しくない。中には從者を大勢引

連れて、馬や輿で堂々と乗込んで來るものもあるから偉い。いや、まだ物騒な話がある。これは諸種の隨筆中に記載されてゐて、支那では有名な話と見えるから、左に紹介する。

ある人が城内の町を通ると、舊僕の李といふ男に出逢つた。互ひに懐かしく思つて、そこの酒店へ立寄つて一緒に飲みはじめた。それまでは好かつたが、其人が不圖思ひ出したのは、舊僕の李は疾うに死んだと云ふことである。さあ、大變だと、彼は形をあらためて訊いた。

『どうも不思議だな。お前はもう死んでしまつた筈だが……。』

『はい。十年前に死にました。』

『さうすると、おまへは幽霊か。』

『左様です。』と、李は笑ひながら答へた。『併しびつくりなさるには及びません。幽霊だつて自由に娑婆へ出て來られます。私のやうな幽霊はそこらに幾らも歩いてゐますよ。』

『それがお前に判るか。』

『判ります。現にこの店にも一人ゐます。普通の人間には判りませんが、わたくしが觀れば、それが生きてゐるか幽霊か、すぐに見分けられます。まあ、表へ出て御覽なさい。』

かうなると一種の好奇心も手傳つて、彼は李と共に往來へ出た。時は白晝で、町は賑はつてゐる。その混雜のあひだを通り抜けながら、李は摺れ違ふ人を指さして小聲で教へた。

『あの男も幽霊です、あの女も……。』

およそ七八町を行くあひだに、李は男女十人あまりを教へたので、其人は顫へあがつた。早々に李に別れて歸つたが、その後は人ごみへ出るのが怖ろしくなつて、晝も滅多に外出しなかつたといふ。

これでは全く怖ろしい。迂濶に銀ブラも出来ないことになる。カフェーへ這入れれば女給の幽霊あり、デパートへ這入れればマネキンの幽霊あり、それが普通の人間の眼には見分けられないと云ふのでは物騒千萬である。この奇怪なる報道が一たび新聞紙上にでも現れたら、銀ブラ黨も定めて大恐慌を來すであらうが、驚く勿れ、それは支那の話である。

なにしろ斯う云つたやうなわけで、支那の幽霊は白晝雜沓のなかを横行濶歩してゐるのである。いかに彼等が大膽であり、勇敢であり、明朗であるかが窺ひ知られるではないか。それに比較すると、日本の幽霊や外國の幽霊は、小膽で卑怯で陰鬱で、彼が男性的英雄的であるに反して、これは

女性的小人的である。國際聯盟の席上に幽霊を連れ出せば、支那は優に世界列強を懾伏せしめ得るに相違あるまい。

もう一つ、日本の幽霊の弱點は足の無いことである。支那は勿論、外國の幽霊にも立派に二本の足がある。不幸にして日本の幽霊は足が無い。いや、日本の幽霊も昔は足があつて、憎い奴を蹴殺した例もあるのであるが、江戸時代に丸山應擧などといふ不心得の畫家が現れて、おのれ一個の功名を擅まゝにする爲に、腰から下をばかしたやうな幽霊を描き出したのが抑も間違ひの始まりで、我が幽霊は胴斬りの様な片輪者にされて仕舞つたのである。恨みがあらば應擧に云へ。なぜ其當時の幽霊達がこの残酷なる畫家を執殺さなかつたかと思ふ。或はこの方が自分達の凄味を加へるのに好都合だと考へて、執殺すどころか、却つて畫家に感謝してゐたかも知れない。

支那や外國の幽霊は暗夜に無燈で出没する。それが幽霊の特權であらうと思はれるのに、日本の幽霊は警視廳令を守る自轉車乗りの如くに必ず燈火を携帯する。外國でも燐光は飛ぶ。支那でも古沼や墓場には燐火が見られる。現に鬼火とか鬼燐とかいふ言葉もあるくらいで、詩人は『陰房鬼火青』などと歌つてゐるが、その鬼火は幽霊に伴つて出るものとは考へられてゐない。鬼火が幽霊の

提灯代用になるのは、日本獨特のものであるらしい。日本の幽霊も室内に現れる場合には鬼火を伴はず、室外又は往來の暗い所で専ら鬼火を照すのを見ると、確に提灯代用であるに相違ない。

日本の傳説によると、狐狸妖怪のたぐひは暗夜でもその姿を見せるといふ。それであるから、暗夜の途上で行人に出逢つた場合、暗中でその容貌衣服等を認め得るものは、妖怪であると鑑定して差支へないと云ふことになつてゐる。而も幽霊に限つて、暗中にその姿をあらはし難く、いつも燈火を假りてゐるのも不思議である。その不思議が即ち怪の怪たる所以でもあらうか。但し我が幽霊も昔は自由に暗夜を出没し得られたのであるが、これも江戸時代の畫家のさかしらで、燒酎火の如きものを燃やすことになつたのである。

かういふわけで、外國や支那の幽霊は千古不易(?)であるにも拘らず、日本の幽霊界は江戸時代に一種の革命を経て、總ての様式を改めたものと認められる。したがつて、江戸中期以後の幽霊を標準として、その以前の幽霊を揣摩臆測してはならない。我國といへども、昔の幽霊は支那式であつたことを記憶して置く必要がある。その點に於て三遊亭圓朝作の『牡丹燈籠』の幽霊が鬼火を照らさずして牡丹燈籠をたづさへ、而も駒下駄の音をカランコロンと響かせて來るなどは、支那小

説の翻案によるとは云へ、明かに復古趣味であるとも云ひ得るのである。

*

幽霊はこゝらで消えることにしよう。也有の句にこんながある。

傘持たで幽霊消ゆる時雨かな

幽霊も時雨に逢つては堪らないと見える。夕立に逢つたらいよ／＼驚くであらうと思ひやられて可笑しくもなる。そこで、今度は妖怪變化について少しく考へ出してみたい。幽霊以外の怪物はすべて妖怪變化と認めてよいのであるが、外國語で云ふモンスターは日本語でいふ妖怪變化の部類には編入し難い。巨大なる爬行蟲や奇怪なる大蛸のたぐひはモンスターと呼んでも差支へないのであるが、それ等を日本では普通に妖怪變化とは云はないやうである。日本でいふ妖怪變化の定義はなか／＼複雑であるが、要するに『化ける』と云ふことが第一義となつてゐるらしい。

『化ける』とか『化かす』とか云ふことになると、我國では狐と狸を代表的の妖怪變化と決定するに異論はあるまい。古いところでは姐己の狐で、日本では三國傳來九尾の狐などと云つてゐるが、

本家本元の支那では妲己の狐を認めてゐない。支那の學者の考證によると、正しい記録に狐妖を書してあるのは、秦の終りに彼の陳勝と吳廣が兵を擧げた時、狐の啼聲をよく真似る者を暗夜に出沒させて『楚、興らん』と叫ばせたのを嚆矢とするさうである。陳勝等は楚の後裔とか稱してゐたので、狐の告げのやうに粧つて人氣を得ようと巧んだのであるから、所詮は一種の計略で、眞實の狐妖では無いのであるが、彼等がさういふ計略を廻らしたと云ふことは、一般の人間が已に狐妖を信じてゐた證據であつて、恐らくその以前から狐妖の説が民間に行はれてゐたのであらうと云ふのである。假りに陳勝等の創意としても、その歴史は頗る古い。

外國にはウエヤー・ウルフ即ち人狼の傳説であつて、今でも僻遠の山村などでは信憑されてゐる。晝間は普通の人間であつて、夜間は變じて狼となり、墓地などを荒らし廻つて新しい死人の肉を喰ふと云ふのである。而も狐が化けるといふ話を聞かない。それに反して、支那や日本では狐は化けるものと決められてゐる。狐が男に化け、美女に化けたといふ話は、支那では多きに堪へない位である。無智の支那人のあひだには、狐は普通の獸類でなく、人類と獸類との中間に位する一種の靈ある動物であつて、千歳を経れば狐仙となり得ると信じられてゐる。

狐や狸が人を化かすといふのは、その動物電氣に因るのであると説明されてゐるが、まあそんな事にもして置くのほかはあるまい。私の叔父にこんな話がある。江戸末期に、私の父と叔父は上總の富津の臺場お固めを命ぜられて出張してゐた。その當時、父は二十七歳、叔父は二十一歳であつたといふ。そこで、ある初夏の日の午後、藤井とかいふ同役と、父と叔父と三人連れで、富津の村へ遊びに出た。その小料理屋で飲んで食つて、日の暮れかゝる頃に歸つて來ると、その途中に長い田圃路がある。そこを通りかゝると、叔父は兎角によろ／＼して田の中に踏み込まうとする。最初は酔つてゐるのだと思つてゐたが、幾たび注意しても田の方へよろけて行くのである。そのうちに、連れの藤井が何を見たか俄に叫んだ。

『畜生、化かしたな。』

見ると、田を隔てた向うの大樹の下に、一匹の狐がゐる。狐は右の前足をあげて、恰も招くやうな眞似をしてゐるのである。叔父はそれに招かれて、よろけて行くらしい。それに氣が注いで、父も畜生と呷鳴つた。それと同時に、刀を抜いて高く振りかざすと、狐は早々に逃げ去つた。その後は叔父もよろけなくなつた。曩によろけてゐる間は、むやみに眠氣を催したさうである。狐が人を



化かすと傳へられるのは、かう云ふたぐひであらうと、父は常に語つてゐた。

河瀬もいたづら者である。普通の人は狐や狸を眼のかたきにしてゐるが、他國は知らず、江戸邊では狐狸よりも河瀬の方が妖物であつたやうに聞いてゐる。今日ではだん／＼に埋められ、或は狹ばめられて仕舞つたが、江戸時代には郡部は勿論、市内にも所々に小川や大溝があつた。河瀬はそこに巢を作つてゐて、或は附近の人家を襲ひ、或は往來の人々をおびやかした。彼は不意に往來の人に飛び付き、或は雨傘の上に飛びあがる。それに脅かされた人々は、その正體をよくも見定めず種々の怪談を傳へた。江戸市内に流布する怪談の種を洗ふと河瀬の仕業が多いといふ。これも父の話であるが、虎の門の内藤藩士福嶋某が雨のふる夜に虎の門を通行すると、暗い中から眞黒な小僧のやうな者が飛んで出て、突然に横合からその腰に組み付いたので、福嶋は小僧の襟首を引つ擱んで力任せに地面へ投げ付けると、彼は低く走つて堀のなかへ水音高く飛び込んだ。これも大きい河瀬に相違ないと、福嶋は人に語つたさうである。

次は猫である。化け猫といふ一つの熟語が出来てゐるくらゐに、猫の化けるのは有名であつて、尾上菊五郎の家の藝にまでなつてゐるが、十二ひとへ姿の官女に化けたり、絞りの浴衣を着て踊つ

たりするのを、實地に見たといふ人は無いやうである。猫が手拭をかぶつて踊ると傳へられるのは、彼がその頭からんだ手拭を拂ひ退けようとする前足の働きが、恰も踊るやうに見えるからであらう。猫が立つて歩くのは事實で、私も一度目撃したことがある。

それは今から三十年ほど前のことで、その頃わたしは麴町元園町に住んでゐたが、八月なかばの暑い夜で何分にも寝苦しいので、午前一時頃に起きて庭に出て、更に門の外に出た。私の家は表通りから五六間引込んだ袋地のやうな所にあつて、狭い路が往來に通じてゐる。その狭い路のまん中に、一匹の猫が立つてゐるのである。私は立ちどまつて、月明りに窺と窺つてゐると、猫は長い尾を曳いて往來の方へ向つて歩いてゆく。後足二本と長い尾との三脚によつて、體の中心を取つてゐるらしい。それで徐かに歩いてゆくこと五六歩、やがて背後に窺ふ人あるのを覺つたのであらう。私の方を鳥渡見返つたかと思ふと、忽ち常の姿勢に復つて、飛鳥のごとくに走り去つた。それは表通りの氷屋の飼猫であるらしかつた。

あくる朝、私は氷屋の店をのぞくと、猫は腰掛けの上に何げなく遊んでゐた。而もそれから一ヶ月の後、猫はゆくへ不明になつた。立つて歩く姿を私に見られた爲でもあるまいが、彼女は遂に戻

つて來なかつたさうである。猫の尾を長くして置くといふ傳説は、猫が尾の力によつて突つ立ち上る爲であらう。前にもいふ通り、後足二本と長い尾との三脚によれば、猫の立ち上るのも不思議では無い譯であるが、實際にその立つて歩く姿を目撃すると餘り氣味の好いものではない。

猫ばかりでなく、鼬も立つ。しかも彼は後足で眞直に立つて、右の前足を眼の上にかざして人を見る。これを昔から、『鼬が眼まかけさす』といふのであるが、その姿勢と動作が恰も人の如くであるので、女などには忌がられる。この動物の特性とは知りながら、薄暗い夕がたの庭先などで、鼬の前足をかざして窺はれると、男でもあまり好い心持はしない。彼も何となく妖氣を帯びた動物である。鼬に往來を横ざられると通路が断えるといふ傳説は何から出たのか、私は知らない。

こんなことを話してゐると際限がないから、こゝらで幽霊を消すことにして、あとは春らしく賑かに、歌留多でも取りませう。

雷 雨

夏季に入つていつも感じるのは、夕立と雷鳴の少くなつたことである。私たちの少年時代から青年時代にかけては、夕立と雷鳴が随分多く、いはゆる雷嫌ひをおびやかしたものであるが、明治末期から次第に減じた。時平公の子孫萬歳である。

地方は知らず、都會は周圍が開けて來る關係上、氣壓や氣流にも變化を生じたとみえて、東京などは近年たしかに雷雨が少くなつた。第一に夕立の降り方までが違つて來た。むかしの夕立は、今までカン／＼天氣であつたかと思ふと、俄に蟬の聲が止む、頭の上が暗くなる。おやツと思ふ間に、一朵の黒雲が青空に擴がつて、文字通りの驟雨沛然、水けむりを立て、瀧のやうに降つて來る。

往來の人々はあわてゝ逃げる。家々では慌てゝ雨戸をしめる、干物を片附ける。周章狼狽、いやもう亂痴氣騒ぎであるが、その夕立も一時間とはつゞかず、せい／＼二十分か三十分でカラリと晴

れて、夕日が赫と照る、蟬がまた啼き出すといふ始末。急がずば濡れざらましを旅人の、あとより晴るゝ野路の村雨——太田道灌よく詠んだとは、まったく此の事であつた。近年こんな夕立はめつたにない。

空がだん／＼に曇つて来て、今に降るかと思つてゐても、この頃の雷雨は待機の姿勢を取つて容易に動かない。三四十分乃至一時間の餘裕をあて、それからポツ／＼降り出して來るといふ順序で、昔のやうな不意撃を喰はせない。況んや青天霹靂などは絶無である。その代りに揚り際もよくない。雷も遠くなり、雨も止むかと見えながら、まだ思ひ切りの悪いやうにビショ／＼と降つてゐる。むかしの夕立の男性的なるに引きかへて、このごろの夕立は女性的である。雷雨一過の後も爽かな涼氣を感じる場合が少く、いつまでもジメ／＼して、蒸暑く、陰鬱で、こんな夕立ならば降らない方が優しだと思ふことが屢々ある。

かういふと、ひどく江戸子で威勢が好いやうであるが、正直をいへば私はあまり雷を好まない。いはゆる雷嫌ひといふ程でもないが、聞かずに済むならば聞きたくない方で、電光がピカリ／＼、雷鳴がゴロ／＼などは、どうも愉快に感じられない。而も夕立には雷電を伴ふのが普通であるから、

自然に夕立をも好まないやうになる。殊に近年の夕立のやうに、雨後の氣分が好くないならば、降つてくれない方が仕合せである。雷ばかりでなく、私は風も嫌ひである。夏の雷、冬の風、いづれも私の平和を破ること少くない。

むかしの子供は雷を呼んでゴロ／＼様とか、かみなり様とか云つてゐたが、私が初めてかみなり様とお近付き(?)になつたのは、六歳の七月、日は記憶しないが、途方もなく暑い日であつた。私の家は麴町の元園町にあつたが、その頃の麴町邊は今日の舊郊外よりもさびしく、どこの家も庭が廣くて、家の周囲にも空地が多かつた。

わたしの家と西隣の家とのあひだにも、五六間の空地があつて、隣の家には枸杞の生垣が青々と結ひまはしてあつた。私はその枸杞の實を喰べたこともあつた。その生垣の外に一株の大きい柳が立つてゐる。それが自然の野生であるか、或は隣の家の所有であるか、そんなこともよく判らなかつたが、兎もかくも相當の大木で、夏から秋にかけては油蟬やミン／＼やカナ／＼や、あらん限りの蟬が來てさう／＼しく啼いた。柳の近所にはモチ竿や紙袋を持つた子供のすがたが絶えなかつた。前にいふ七月のある日、なんでも午後の三時頃であつたらしい、大夕立の眞最中、その柳に落

雷したのである。

雷雨を恐れて、わたしの家では雨戸をことごとく閉ぢてゐたので、落雷當時のありさまは知らない。唯すさまじい雷鳴と共に、家内が俄に明るくなつたやうに感じただけであつたが、雨が晴れてから出てみると、彼の柳は眞黒に焦げて、大木の幹が半分ほども裂けてゐた。わたしは子供心に戦慄した。それ以來、わたしはかみなり様が嫌ひになつた。

それでも幸ひに、ひどい雷嫌ひにもならなかつたが、さりとて平然と落付いてゐるやうな勇士にはなれなかつた。雷鳴を不愉快に感ずることは、昔も今も變りがない。その私が暴雷におびやかされた例が三回ある。

その一は、明治三十七年の九月八日か九日の夜とおぼえてゐる。私は東京日日新聞の従軍記者として滿洲の戦地にあつて、遼陽陥落の後、半月ほどは南門外の迎陽子といふ村落の民家に止宿してゐたが、そのあひだの事である。これは夕立といふのではなく、午後二時頃からシト／＼と降り出した雨が、暮るゝと共に烈しく降りしきつて、九時を過ぎる頃から大雷雨となつた。

雷光は青く、白く、あるひは紅く、あるひは紫に、みだれて裂けて、亂れて飛んで、暗い村落を

色々に照らしてゐる。雨はがう／＼と降つてゐる。雷はすさまじく鳴りはためいて、地震のやうな大きい地ひびきをする。それが夜の白むまで八九時間も小歇みなしに續いたのであるから、實におどろいた。大袈裟にいへば、最後の審判の日が來たのかとも思はれる程であつた。もちろん眠られる筈もない。私は頭から毛布を引つかぶつて、小さくなつて一夜をあかした。

『毎日大砲の音を聞き慣れてゐる者が、雷なんぞを恐れるものか。』

こんなことをいつて強がつてゐた連中も、仕舞にはみんな降参したらしく、夜の明けるまで安眠した者は一人もなかつた。夜が明けて、雨が晴れて、ほつとすると共にがっかりした。

その二は、明治四十一年の七月である。午後八時を過ぎる頃、わたしは雨を衝いて根岸方面から麴町へ歸つた。普通は池の端から本郷臺へ昇つてゆくのであるが、今夜の車夫は上野の廣小路から電車線路を眞直に神田にむかつて走つた。御成街道へさしかゝる頃から、雷鳴と電光が強くなつて來たので、臆病な私は用心して眼鏡をはづした。

もう神田區へ踏み込んだと思ふ頃には、雷雨はいよ／＼強くなつた。まだ宵ながら往來も途絶えて、とき／＼に電車が通るだけである。眼の先もみえないやうに降りしきるので、車夫も思ふやう

には進まない。やう／＼に五軒町附近まで来かゝつた時、ゆく先がばつと明るくなつて、がんといふやうな霹靂一聲、車夫はたちまちに膝を突いた。車は幌のまゝで横に倒れた。わたしも一緒に投げ出された。幌が深いので、車外へは轉げ出さなかつたが、兎も角もはつと思ふ間にわたしの體は横倒しになつてゐた。二三町先の旅籠町邊の往來のまん中に落雷したのである。

私は別に怪我もなかつた。車夫も膝がしらを少し擦り剝いたぐらゐで、差したる怪我もなかつた。落雷が大地にひゞいて、思はず膝を折つてしまつたと、車夫は話した。併し大難が小難で濟んだわけ、若し私の車がもう一二町も南へ進んでゐたら、どんな禍を蒙つたか判らない。二人はたがひに無事を祝して、豪雨のなかを又急いだ。

その三は、大正二年の九月、仙臺の鹽釜から金華山參詣の小蒸汽船に乗つて行つて、島内の社務所に一泊した夜である。午後十時頃から山もくづれるやうな大雷雨となつた。

『なに、直ぐに晴れます。』

社務所の人は慰めてくれたが、なにしろ場所が場所である。孤島の雷雨はいよ／＼凄愴の感が深い。あたまの上の山からは瀧のやうに水が落ちて来る、海はどう／＼と鳴つてゐる。雷は縦横無盡

に駆けめぐつてがら／＼とひゞいてゐる。文字通りの天地震動である。こんなありさまで、明日は無事に歸られるかと危ぶまれた。天候の悪いときには幾日も歸られないこともあるが、社務所の倉には十分の食料がたくはへてあるから、決して心配には及ばないと云ひ聞かされて、心細いながらも少しく意を強うした。

社務所の人の話に嘘はなかつた。さすがの雷雨も十二時を過ぎる頃からだん／＼に衰へて、枕もとの時計が一時を知らせる頃には、山のあたりで鹿の鳴く聲がきこえた。喜んで窓をあけて見ると、空は拭つたやうに晴れ渡つて、舊曆八月の月が晝のやうに明るく照らしてゐた。私はあしたの天氣を楽しみながら、窓に倚つて徐かに鹿の聲を聞いた。その爽やかな心持は今も忘れないが、その夜の雷雨のおそろしさも、おなじく忘れ得ない。

白柳秀湖氏の研究によると、東京で最も雷雨の多いのは杉並のあたりであるといふ。私の知る限りでも、東京で雷雨の多いのは北多摩郡の武蔵野町から杉並區の荻窪、阿佐ヶ谷のあたりであるらしい。甲信盆地で発生した雷雲が武蔵野の空を通過して、房總の沖へ流れ去る。その通路が恰も杉並邊の上空に當り、下町方面へ進行するに従つて雷雲も次第に稀薄になるやうに思はれる。但し俗

に『北鳴り』と稱して、日光方面から押込んで来る雷雲は別物である。

團十郎を語る

*

九代目市川團十郎のこと、私はこれまで新聞雑誌に屢々書いてゐるので、今度の追遠興行に際しても、特にこれぞといふべき所感もない。唯、三十年の月日のあまりに早いに驚かるゝばかりである。

もう一つ驚かるゝことは、この十一月の歌舞伎座における三十年追遠興行が豫想以上の好成績を収めて、日々割れ返るほどの大入を占めてゐることである。その狂言の列べ方をみると、高時の天狗舞、勸進帳、助六、忠信のたぐひ、近來幾たびも舞臺の上に繰返されるものが大部分を占めてゐて、特に今度の興行に限られたものは、三升の「解脱」と翠扇の「團十郎娘」に過ぎない。それでこれほどの観客を吸ひ寄せるといふのは、勿論劇場側の宣傳や運動も手傳つたのであらうが、いづ

れにしても素晴らしいものである。

俳優の顔揃ひといふことも其原因の一つに數へられるであらうが、たとひこれだけの俳優が顔を揃へても、それが普通の興行であつた場合には、恐らくこれだけの好成績を挙げ得なかつたであらうと思はれる。要するに「團十郎」といふ名がおのづからに観客を惹き付けたのである。死後三十年、しかも刹那に消えてゆく舞臺藝術の所有者にして、かくの如く萬人に尊敬せられ、追慕せらるるのは、他にその類例が少いと云つてよい。

その團十郎について何事かを語るべく注文されたのであるが、今度の追遠興行に際して團十郎に關する断片的の談話は、諸人の口によつて已に各新聞雑誌にも發表されてゐる。私も断片的の記事については種々の材料を持つてゐる。而も翻つて考へると、今日の若い人達は一口に團十郎といふけれども、特殊の研究家を除いては、團十郎といふのはどんな經歷の俳優であるか、どんな藝風の俳優であるかを良く知つてゐる人は少いやうである。

したがつて、こゝでは断片的の追憶談や批評のたぐひを語るよりも、終始一貫して團十郎といふ名優の輪廓を説明した方がよいかと思ふ。平たく云へば「團十郎早わかり」といふやうな物を語り

出す積りであるから、さう思つて讀んで貰ひたい。

*

團十郎は今から九十四年前の天保九年三月、七代目市川海老藏の子と生まれた。十二人の兄弟のうち五男で、母は海老藏の妾おためといふのである。五歳のときに河原崎座の座元河原崎權之助に所望されて養子となり、弘化二年三月、八歳にして初めて舞臺を踏んだ。幼名の長十郎をそのまま藝名として、河原崎長十郎と稱してゐたのであるが、嘉永五年、十五歳のときに權之助の一字を取つて權十郎と改めた。それは時の十二代將軍に男子出生して、長吉郎と命名されたので、その當時の慣例として長の字を憚つて改名したのである。

養父の權之助はその時代の芝居道には珍しいと云はれるほどの、氣むづかしい、理窟つばい人物で、あだ名を神主さんと呼ばれてゐたさうである。さういふ人物であるから、彼は養子の權十郎を寵愛すると同時に、その教育は非常に嚴重であつた。先づ淺草馬道の手跡指南森田藤兵衛に就て讀書習字を修業させ、土佐派の畫家花所隣春くわしんちかばるについて繪畫を學ばせ、舞臺上に必要な舞踊、淨瑠璃、

琴、三味線は勿論、生花、茶の湯のたぐひに至るまで残りなく稽古させた。

それがために、長十郎の幼年時代より權十郎の少年時代に互つて、團十郎は殆ど朝から晩まで息をつく暇がなかつたと傳へられる。少しぐらゐの病氣では權之助は容赦しないで、忘れてはならぬと叱り付けて稽古に追ひ出すといふ始末。それでも團十郎は素直に勉強してゐた。而も權之助の育て方があまりに嚴酷であるといふので、周囲の者はみな團十郎を憫んだ。いかに修業が大切だと云つても、遊び盛りの子供に殆ど半時の暇もあたへず、それからそれへと追ひ廻すのは餘りに苛酷であるといふ噂がしきりに傳へられた。

海老藏の弟子たちも見るに見兼ねて、それを師匠に訴へた。あのまゝに捨て置いたらば若旦那は責め殺されて仕舞ふであらうといふのである。海老藏もさうかも知れないと思つた。併し一旦他家へ遣つた以上、いかに實父でも妄りに口出しをすることは出来ない。殊にその當時は座元の威勢が甚だ強いのであるから、座元の權之助に對して迂濶なことを云ふわけにも行かない。それでも或時權之助にむかつて、海老藏は冗談のやうに云つた。

『あなたは長十郎をよく仕込んで下さるさうですが、あんまり仕込み過ぎて、今に責め殺すかも知れないといふ噂ですよ。』

それに對して、權之助は儼然として答へた。

『成程さうかも知れませんが。その代りに、もし責め殺されずに生きてゐれば、屹とあなたよりも好い役者になります。』

海老藏も苦笑して黙つてしまつたと云ふ。權之助の豫言あやまたず、果して實父以上の名優となり負せたのであるが、その當時に於ては權之助の嚴酷な教育法に對して、反感を懐く者が頗る多かつたと云ふことである。團十郎も後年は人に對して「これも養父おやぢが仕込んでくれたお蔭です。」と云つてゐたが、その當時はなんと思つてゐたか判らない。いづれにしても、彼はおとなしく養父の命令に服従して、他念なく勉強してゐたのであつた。

併し舞臺の上では座元の悴、いはゆる若太夫であるから、少年時代から優遇されて、興行ごとに相當の役も付き、観客にもまた認められて、やがて花形役者の一人となつた。さうして、若い婦人客のあひだには「權ちゃん、權ちゃん」と騒がれるやうになつたのであるが、養父の監督が依然嚴重であるのと、本人自身の性格とに因つて、かゝる青年俳優にあり勝ちの艶名を謳はるゝやうな出

來事は絶無であつた。

青年時代における彼の藝風について一般に傳へらるゝ所によると、彼が觀客に認められ、婦人等の人氣を博したのは、その家柄と其の容貌とに因つたのであつて、舞臺の藝は別に賞讃すべき程のものでは無かつた。一部の見巧者からは大根役者と嘲けられてゐたと云ふことである。後年にはそれほど雄辯の俳優となつたが、青年時代の彼は辯舌がよくなかつた。何だか舌の長いやうな臺詞廻しで、兎かくに聴き辛い場合が多かつた。殊にその時代の青年俳優のあひだには、坂東彦三郎、中村芝翫、澤村田之助、市村羽左衛門(後の五代目菊五郎)のごとき花形役者が大勢控へてゐたので、權十郎の名聲は彼等に壓倒され勝ちであつた。勿論、將來の彼が日本隨一の名優にならうなどと期待してゐる者は、殆ど一人もなかつたのである。

彼は三十歳にして東京の人となつた。江戸時代における半生の修業が、明治時代に入つて大に其効果を發揮したわけである。而もその年、即ち明治元年九月二十三日の夜に養父權之助を亡つた。維新當時に流行せる浪人組の強盜六七人が今戸の宅へ押込んで來て、金百兩を奪つた上に、主人權之助を殺害して立去つたのである。その夜、權十郎も在宅したのであるが、他の家族等と共に二階

に隠れて、わづかに難を免れたといふ。思へば危いことであつた。

*

養父の歿後、當然の結果として彼は河原崎權之助の名跡を繼ぐことゝなつた。藝名もその通りに改めて、俳名を三升と號した。

此頃から彼はその團十郎らしい藝風をおひひに發揮して、好劇家を刮目させることになつたのである。明治二年三月の市村座における「勸進帳」の辨慶、同年八月の市村座における「地震加藤」の清正の如き、三年五月の市村座における「一の谷」の熊谷のごとき、他に比類無しといふ好評を博した。彼はもう「權ちやん」などの人氣を頼まずに、一個の大立者として舞臺を濶歩するやうになつたのである。聞く所によると、彼の「權ちやん」時代にも、その最眞はいはゆる御殿女中の婦人達に多く、町家の女達には比較的に人氣が薄かつたと云ふ。それに因つても、彼の藝風が大かた推知せらるゝのである。

明治六年九月、權之助はその俳名を藝名として、市川三升と改めた。八代目團十郎は早く死んで、

劇界に市川の家名漸く衰へんとして來たので、それを復興する一着手として先づ市川三升と名乗ることになつたのである。前にもいふ如く、その技藝は年を逐うて進歩して、彼こそは九代目團十郎を相續すべきものと世間一般から認めらるゝに至つたので、その翌七年の七月、芝の新堀に河原崎座を建築すると同時に、養家の河原崎權之助の名跡を親戚の山崎福次郎にゆづり、自身は市川家に復籍して、こゝに初めて九代目團十郎を名乗ることになつた。その河原崎座新開場の狂言は一番目「新舞臺 巖 楠」中幕「一谷嫩軍記」ワキ狂言「壽二人狸々」二番目「袖浦戀紀行」であつた。

好劇家の語る所によれば、團十郎の「活歴」なるものは先づ此頃から芽を吹き始めたのであると云ふ。この狂言の一番目に團十郎は兒島高德を勤めてゐたが、例の櫻樹に詩を題する場で、彼は鎧の上に簑を着て出で來り、無言で櫻樹に詩を題し終ると、上のかたより澤村訥升の千種中將忠顯が窺ひ出で、たがひに顔を見あはせて無言で幕。要するに徹頭徹尾無言劇で、一種の活人畫ともいふべきものであつたので、その當時の観客は烟にまかれた。團十郎は大に新機軸を出したと稱して、頗る得意であつたと云ふことである。

今日の藝術觀を以て、いたづらにこれを幼稚淺薄と評してはならない。時は明治の初年である。

在來の作劇術から云へば、兒島高德はこゝで何かの述懐の臺詞があるか、或は行在所に對してよそながら苦衷を訴ふるの臺詞があるか、或は警固の番卒等が彼を捕へんとするので立廻りがあるか、所詮はもう少し芝居らしい段取りがあるべき筈である。私はこの狂言の原作を讀んでゐないが、恐らくまだ何かの筋立があつたのを、團十郎が一切省略して仕舞つたのであらうと察せられる。その善悪は姑く措いて、この時代の舞臺の上にこれだけの事を敢然斷行するの勇氣あるものは、團十郎以外に求め得られなかつたのである。

これに限らず、彼は當時の観客が理解すると否とを問はず、感服すると否とを問はず、自分が好しと信じたことは勇敢に遂行するのを常とした。彼は他人に引摺られず、他人に征服されず、常に他人を引摺つて行き、常に他人を征服しようとして試みてゐたのである。團十郎は傲慢であるなど一部誤解を受けたのもこれに起因するのであるが、一代の名優としては、かくあるべきが寧ろ當然であらう。

河原崎座の興行成績はよくなかつた。その後兎も角も興行をつゞけてはゐたものゝ、負債は次第に嵩んで來て、團十郎は東京に身を置くことが出來なくなつた。據るなく地方廻りなどをしてゐた

が、これとても餘り思はしくなかつたので、東京へ歸つて來ても自宅に入ることが出來ず、他人の家に身を潜めてゐるといふ始末で、こゝ四五年間は彼が貧乏の絶頂であつた。いくら働いても借金に責め立てられるので、舞臺の上では常に好評を博してゐながらも、その生活の内状は實に悲惨であつたと、今も劇界の語り草に残つてゐる。團十郎といへば、大名のやうな豪華な生活をしてゐたと早呑込みをしてはならない。彼が藝術の上では最も得意の時代といふべき新富座時代ですらも、彼は菊五郎等と共に座主守田勘彌の借金の連借人に署名してゐた關係上、常に債鬼の迫害を蒙つてゐた。彼がどうやら其の苦患を逃れて、兎も角も團十郎らしい生活を營み得るやうになつたのは、最後の十二三年に過ぎないであらう。假にも市川團十郎と名乗る以上、まさか裏店にも住んでゐられないから、相當の門戸を張り、自家用車にも乗廻してゐたが、その内證はいつも火の車であつたのである。

*

明治九年の五月、彼はその貧困と闘ひながら、中村座で「重盛諫言」を演じた。普通、演劇史の

記録によれば、團十郎の「活歴」はこゝに始まると云ふことになつてゐる。田村成義翁の續々歌舞伎年代記には「この諫言場はすべて平家物語にならひ、河竹（黙阿彌）が筆を執り、況んや就中などと雅俗混淆のせりふを用ひ、見物を烟に巻きたるものなり」とある。その當時の観客は皆こんな風に眺めてゐたのであらう。明治十一年十月、新富座の中幕に「二張弓千種重籐」にちやうのゆみちぢのしげどうを上演した。やはり黙阿彌作の史劇で、齋藤實盛が木曾義仲の身代りに秩父重能の悴の首を受取つてゆくといふ筋であるが、このときに彼は實盛を勤めて、立烏帽子、水干、大口袴、附髭といふ扮装で舞臺にあらはれた。在來の例によれば、これらの役は袴又は長袴であるべく豫想されてゐたのに、彼が立烏帽子水干の姿で出て來たのを見て、いづれも意外の感に打たれた。或者は神主のやうだと批評した。或者は團十郎の悪い道樂だと批難した。

いはゆる「活歴」なる名稱はこの時に始まつたのである。その名付け親は假名垣魯文で、彼はその主宰する假名讀新聞に實盛の劇評をかいて、それを活歴と呼んだ。活きたる歴史ともいふべきを活歴の二字に省略したのである。而もそれは一種の冷評的の新熟語で、あんなものは芝居といふべきものでは無い、單に歴史を活かして見せるに過ぎないといふ意味で、魯文は勿論この實盛の演出

に對して反感を懐いてゐたのである。それに共鳴する人々は、いづれも「活歴」といふ新熟語をよるこんで用ゐた。それがだん／＼に世間に擴まつて、在來の型を破つた團十郎式の新史劇をすべて活歴と呼び慣はすことになつたのである。

さういふわけで、いはゆる「活歴」なる名稱は好意を有する言葉ではなく、一種の嘲笑又は冷笑の意を含んだものであつたが、それが年月を経るにしたがつて、好意でもなく、惡意でもなく、單に一種の名稱に過ぎないことになつたのである。その當時、それらの冷評惡評が團十郎の耳に入らない筈はなかつたが、前にもいふ通り、彼はそれらに一向頓着せず、敢然として自己の信ずるところを遂行してゐた。

今日から觀れば、團十郎の活歴には種々の議論もあらう、種々の批難もあらう。魯文の冷評が寧ろ正當で、團十郎の活歴は單に歴史を活かして見せるに過ぎなかつたかも知れない。而も在來の荒唐無稽の時代劇を一新して、寫實風の新史劇を創造せんとした彼の創意と努力とは、十分に認識すべきである。人間は概して保守的のものであるから、新しい試みは先づ批難を浴びるものと覺悟しなければならぬ。殊に明治の初年に於て、まかり間違へば自己の聲價を失墜し、自己の位置を傾

けるかも知れない危険を冒して、活歴風の新史劇に邁進した團十郎の勇氣は、確に賞讃と尊敬に値すると思はれる。烏帽子をかぶつたり、髭を附けたりするのは、團十郎の道樂であつたなどと云ひ傳へるのは、あまりに不眞面目の説である。

誰が何と云つても、團十郎の「力」には敵し得なかつた。その活歴の新史劇が「仲光」となり、「高時」となり、「伊勢三郎」となり、更に種々の物となつて現はれるに至つて、觀客はだん／＼に征服されて行つた。活歴が團十郎の特色となつた。單に團十郎の登場する劇ばかりでなく、新作の史劇は皆その活歴の形式に従ふことになつて仕舞つた。

*

團十郎が最もその技倆を發揮したのは、明治十年頃から明治二十三年に至る十數年間であらう。いはゆる新富町時代で、守田勘彌が新富座を經營した頃である。勿論、他の劇場へも出勤したが、團十郎の本城は先づ新富座であつた。一座は先代菊五郎、先代左團次、中村仲藏、岩井半四郎、中村宗十郎等で、一時の名優みなこゝに集まるの觀があつた。河竹默阿彌も専らこれに筆を執つたの

である。作者も俳優もみな揃つてゐたので、新富町の黄金時代を現出したのであらう。

守田勘彌が蹉躓して、新富座が衰へると共に、東京劇界の中心は歌舞伎座に移つて、新富町時代は木挽町時代に變つた。明治二十二年十一月に歌舞伎座の新築落成して、團十郎はこゝに籍を移した。この頃から其の生活も安定して、安樂に暮らすやうになつたらしい。爾來、明治三十六年まで十四年間の舞臺生活をつゞけて、その年の九月十三日、相州茅ヶ崎の別荘で世を去つた。最後の舞臺は歌舞伎座五月興行の「春日局」における春日局と徳川家康の二役であつた。

團十郎に就て語るべき事はなか／＼盡きない。殊にその當り役とか、その藝風とかいふものに就て精細に語らうとすれば、優に一部の大冊をなすべき程であるから、到底こゝでは云ひ盡せない。

『團十郎はどんな俳優でしたか。どんなに上手であつたのですか。』

これは屢々繰返される質問であるが、遺憾ながら私には其の質問者を満足させるやうな答辯をあはへることが出来ない。所詮、團十郎を觀ない人には團十郎は判らないと云ふのほかは無い。私の生涯のうちで幸福の一つは、團十郎、菊五郎、左團次等の芝居を幼少から二十年以上も見つゞけて來たといふにある。その以上には何とも答へることが出来ない。

團十郎の舞臺姿は寫眞で觀ることも出来るが、それが生きて動く時はどうなるか、とても具體的に説明し得るものではない。なにしろ彼がその得意とする英雄豪傑に扮して、音吐朗々、活殺自在の雄辯を揮つて満場の觀客を威壓し去るの壯觀は、實に劇界の驚異であつたと云つてよい。彼が舞踊に秀でてゐたのも周知の事實で、明治三十年の二月、歌舞伎座で「關の扉」を上演した時には、團十郎の關兵衛、先代菊五郎の墨染、兩者ともに晩年に近づいてはゐたが、その舞臺の情景は今も眼に残つてゐる。

三十年追遠興行が今日も満員の噂を聞きながら、筆を擱く。

(昭和七年十一月九日)

仁左衛門と梅幸

十月十六日、十一代目片岡仁左衛門は大阪に客死し、十一月五日その本葬を東京で営んだが、その前夜に六代目尾上梅幸は歌舞伎座の舞臺で倒れ、遂に八日の朝を以て仁左衛門のあとを追つた。仁左衛門と梅幸の死——たとひ其の昔、團十郎と菊五郎とを殆ど同時に失つたほどの痛手ではなくとも、現在の劇界に取つて手ひどい打撃であるに相違ない。

晩年の両者は舞臺の上では餘り多くの交渉を持たなかつた。明治三十六年の秋、即ち團菊の歿後に、仁左衛門は大阪から上京して歌舞伎座に籍を置くことになつたので、その當時は兩者一座して出勤してゐたが、梅幸は明治四十四年から帝國劇場に籍を移すことゝなつたので、爾來約二十年、兩者はその舞臺を異にしてゐた。昭和五年から帝劇は松竹の經營に移つて、梅幸は再び歌舞伎座の

舞臺を踏むことになつたが、仁左衛門はその時すでに類老多病、結局は掛け違ひの形で、いづれも世を終つたのである。仁左衛門は七十八歳、梅幸は六十五歳、これを團十郎の六十五歳、五代目菊五郎の六十歳に比ぶれば、彼等の舞臺生活は短いとは云へないが、兩者同時に歌舞伎の舞臺からその影を没したことを思へば、梨園蕭條の感は深い。

仁左衛門は立役、梅幸は女方であるばかりでなく、その性質、その藝風を全く異にしてゐるので、兩者を比較して彼是れ云ふことは出来ない。又、兩者の經歷等は已に諸新聞にも詳しく記載されてゐるのであるから、こゝに改めて紹介する必要もない。私はたゞ漫然と古い記憶をたどつて、兩者に對する自己の感想を語るに過ぎないのである。

順序として先づ仁左衛門を想ふ。彼は安政四年、江戸の淺草猿若町に生れたので、自から江戸子と稱してゐたやうに聞いてゐるが、父の仁左衛門は大阪の俳優であり、自分も大阪に生長したのであるから、先づ上方系統の俳優と云つてよい。明治九年に上京して、明治二十年大阪に歸る。その壯年時代を私はよく知らない。彼は多く二流の劇場に出勤してゐたからである。

明治三十年の二月、再び上京して本郷の春木座（本郷座の前身）に出勤し、一番目の「神靈菅原

實記」で菅原道真、中幕の「鰻谷」で古手屋八郎兵衛に扮してゐた。私が舞臺の上で初めて彼を見識つたのは、この時であつた。その印象は今や甚だ朦朧となつてしまつたが、道真が舞臺の上で書生の劍舞のやうな詩吟などをして、頗るぶち毀しであつた事だけは記憶してゐる。八郎兵衛も餘りに上方式で、東京の舞臺を見馴れてゐる私を悦ばせなかつた。これは私ばかりでなく、東京の一般観客に歓迎されなかつたと見えて、彼は間もなく大阪へ引揚げてしまつた。その當時、片岡我當といふ名さへも碌々に記憶してゐない位に、私は彼に重きを置いてゐなかつた。

それから六年後、彼が又もや上京して、團菊歿後の歌舞伎座に出演すると聞いて、私は少しく意外に思つた。僅々数年のあひだに、彼がそんな名優になつたのかと疑つたからである。而もその技藝は著るしく鍊熟して、數年前の道真や八郎兵衛の比でなかつた。その後、大阪へ歸つて仁左衛門を襲名し、更に上京して歌舞伎座、明治座等に出勤、明治の末期からは東京に居附きの俳優となつて今日に至つたのである。したがつて、私たちが彼をよく知つてゐるのは、彼が五十歳以後の舞臺に過ぎないのであるが、その晩年の藝風は老熟の二字に盡きてゐると思ふ。

*

仁左衛門といへば、沼津の平作とか、野崎村の久作と云つたやうな、義太夫狂言の老役を聯想させるのであるが、彼自身はそれと反對に、寧ろ新作物を得意としてゐるやうであつた。坪内博士の「桐一葉」や「孤城落月」は今日種々の俳優によつて上演されてゐるが、明治時代に最も早くそれを上演したのは仁左衛門であつた。その他の「櫻時雨」といひ、「名工柿右衛門」と云ひ、彼は常に新作物の主人公として成功してゐた。彼は人に向つて「いつも／＼同じやうな役ばかり遣らされて、氣色が悪い。」と云つてゐたさうであるが、それは努めて新しがらばかりでなく、實際に舊套を追ふことを悦ばず、何か新しい工夫を案出しようと思つてゐたらしかつた。仁左衛門が義太夫狂言や古い型物のみを墨守してゐる俳優のやうに認められてゐたのは、世間一般の誤解であつたのではあるまいか。

彼は大正の初年に俳優養成所を創立して、少年俳優の教育をこゝろみ、その當時の有樂座で試演會を催したこともあつた。彼は在來の歌舞伎の樂屋に楯籠つて、後生大事にその畑を耕してゐるに

甘んぜず、何かして新しく出よう／＼と考へてゐる進取的の俳優であつた。若し劇場當事者もそれを認め、世間もそれを認めて、彼に進出の機會をあたへたならば、彼は更に大きい足跡を舞臺の上に残してゐたかも知れない。劇場側では彼に在來の老役をあたへ、一般觀客も亦それを期待してゐた爲に、彼は有形無形の制肘を受けてゐたのでは無いかとも察せられる。團十郎やアーヴィングのやうな特殊の地位にあれば格別、大抵の俳優は自分の思ふ通りを舞臺の上に持出すことはむづかしい。劇場側の註文もあり、周圍の事情もあつて、先づは好加減のところであつて妥協して仕舞ふのほかに無いのである。

彼は若い時から、いはゆる負けじ魂の人物で、殊に非常の神経質であつた。それがために他人と屢々衝突して、時には氣ちがひ扱ひをされた事もあつた。その點においては融通の利かない人物であるらしかつたが、それだけに彼の本性は正直であり、善良であつたのである。その神経質は舞臺の上にも現れて、開幕中にも拘らず、舞臺に芥などが落ち散つてゐるのを發見すると、手づから拾つて窃と背後へ投げ隠すといふのが有名の話になつてゐた。そこらに芥などが散つてゐては、なんだか眼障りになつて、藝が仕にくかつたのであらう。したがつて、その藝は細かい。或一部の人々

からは諄いと眉を撃められる位であつたが、それだけに彼は舞臺の藝に熱心であつたのである。藝に細かい人は何となく俗氣を帯びるものであるが、彼は又別に一種の風骨を備へてゐた。

軒端の柿の梢をみあげて立つ名工柿右衛門の姿は、再び舞臺の上で見られない。

*

仁左衛門が幼時に父をうしなつて、兄の我童と共に殆ど孤兒のごとくに生長したに引きかへて、梅幸は頗る恵まれた環境に生長した。前にいふ如く、仁左衛門がその負けじ魂を發揮して屢々他人と衝突したのも、梅幸が曾て人と争はず、温厚の人格者として知られたのも、各自の性格とはいひながら、所詮はその生長の歴史に因る所が多いかとも思はれる。前者は孤立無援の闘士である。後者は名家の若旦那である。

梅幸は明治三年名古屋に生れたのであるが、早くから五代目菊五郎の養子となつて東京に生長し、折々の地方巡業を除いては曾てその居を移したことが無いので、純然たる東京系統の俳優である。彼は仁左衛門の如く、或は大坂に、或は東京に、幾たびか移動したものは、全くその系統を異に

してゐる。しかも名家の若旦那として順調に進んで来たので、晩年に榮三郎と泰次郎の二子をうしなつた不幸以外には、その生涯に著るしい波瀾もなかつたらしい。

かくの如く、彼は恵まれた環境に生長して来たのであるが、養父菊五郎の存世中、即ち彼が三十三四歳の頃までは、殿しい養父の薫陶を受けて、技藝の上では常に叱られ續けてゐたらしかつた。それが後年の彼に多大の利益をあたへた事は云ふまでもないが、養子の彼としては可なりの苦痛であつたに相違ない。物質的には恵まれてゐても、精神的には餘り恵まれてゐなかつたかも知れない。養父は有名の癩癩持である上に、藝道の吟味は非常にやかましい人であつたので、青年時代の彼は普通の叱言を通り越して、舞臺の上でさんぐに罵倒されたこともあつた。甚しい時には、その芝居が已に興行を終つてしまつたにも拘らず、徹夜でその稽古を繰返させられた事もあつた。

それでも名家の子であるだけに、明治二十四年、即ち彼が二十二歳の夏、榮三郎と改名して名題俳優の一人となつた。その當時、中村福助（現在の歌右衛門）が人氣の絶頂にあつたが、榮三郎もそれに次ぐ花形役者と謳はれ、明治二十五年七月、歌舞伎座で「牡丹燈籠」を初演の當時、彼は飯島の娘お露に扮して好評を博した。それまでにも彼は相等の役を勤めてゐたが、それは養父の餘光

に因るものとして、私たちは餘り多くの注意を拂つてゐなかつた。而もこのお露はそれ等の情實を離れて好い出来であつた。可憐にして凄艶、いかにも牡丹燈籠の持主であるらしく見られた。その後にも「牡丹燈籠」の芝居は繰返して上演されるが、私は彼以上のお露を再び見ないのである。

爾來十餘年、彼は専ら歌舞伎座にあつて順調にその位地を進め、明治三十六年の春、養父菊五郎の歿後に六代目尾上梅幸を襲名した。而も歌舞伎座には歌右衛門が控へてゐて、それが立役と女方を兼ねてゐるので、梅幸は自然第二位に置かれる傾向があつて、十分にその手足を伸ばし兼ねるやうな形であつたが、明治四十四年、帝國劇場の開場と共に、彼はこれに籍を移して、専ら俳優の委員長となつた。彼が今日の名聲を博し得たのは、其後二十餘年間に於ける舞臺の成績に因るのである。彼は帝國劇場の専屬であつたが、同劇場と松竹興行會社との契約によつて、毎年一二回は歌舞伎座或は市村座に出勤した。梅幸の専賣として喧傳せられる「河内山」の三千歳、「十六夜清心」の十六夜、「かさね」の累、「斬られお富」のお富のたぐひは、主に羽左衛門を相手にして歌舞伎座の舞臺に屢々繰返されたものであつた。

彼が得意とするのは、前にいふ三千歳やお富のやうな役々で、要するに世話物役者であつたが、

一面には養父の系統を享けて、土蜘蛛や茨木のやうな變化物をも得意としてゐた。來春三月の養父三十三回忌追善興行には、茨木を出すと云つてゐたが、それを果さずに世を去つた。彼は舞踊を善くするので、坪内博士のお夏狂亂などには好評を博し、現に歌舞伎座の十月興行にも上演した。

私は仁左衛門を主人公とした戯曲を一度も書いたことは無いが、梅幸のためには「平家蟹」「くちなは物語」「雪女五枚羽子板」「御影堂心中」「兩國の秋」「小坂部姫」「小梅と由兵衛」「お化師匠」「五右衛門の釜」「おさだの仇討」等を書いてゐる。最後の「おさだの仇討」は昭和三年一月の帝國劇場の舞臺に上演されたが、その興行中に梅幸は舞臺で倒れた。軽い脳溢血で、それが第一回の發病であつた。彼はもう一度おさだを遣つてみたいと云つてゐたが、それも果さずに終つた。彼は養父譲りで藝道に熱心な人であり、且はあれだけの技倆を具へてゐた人であるから、新作物にも皆それ〴〵に成功して、殆ど不評を取つたやうな例はなかつたが、その得意とするのは新作よりも黙阿彌式の世話狂言であつた。この人去つた後、江戸を背景とする黙阿彌式の世話狂言は、次第に歌舞伎の舞臺から影を潜めることになるであらう。

勿論、今後にも彼に匹敵する女方が出現しないと限らない。而もその技倆の巧拙は別問題とし

て、いはゆる江戸情緒を表現する點に於て、梅幸のごとき俳優は恐らく再現しないであらうと思はれる。その意味に於て、彼は江戸式の世話狂言を演ずる最後の女方であつた。

*

梅幸の死について伊原青々園氏は左の意味のことを語つてゐる。

『この人がなくなつて、あゝ云つた女方が又とは出ないのみならず、一體に女方といふものが歌舞伎になくなつて仕舞ひました。女方の缺乏といふことは、殆ど六十年來、即ち團菊の盛んな時から傾向であります。その間に歌右衛門が現れ、つゞいて梅幸があらはれて、どうにか調節が取れてゐたのが、歌右衛門があつた有様であり、梅幸がなくなつたのでは、歌舞伎劇を料理にたとへると、鏗節か味淋を失つたやうなものです。云々。』

私もこれに同感である。伊原君は更に附け加へて『かうした缺陷から歌舞伎劇は衰亡を早めるであらう。』と悲觀してゐる。その點は私と少しく意見を異にしてゐるが、少くも、梅幸の如き俳優の死によつて、在來の歌舞伎劇がその領域を狭げられたのは事實である。それは梅幸のみでない、

仁左衛門についても同様のことが云へる。かれの死に因つて、竹本劇系統の親父型の老役に扮する老優を失つたので、大歌舞伎の舞臺で野崎村や沼津のごとき狂言を上演する機会が自然に少くなるのは、容易に想像されることである。

私は梅幸の死を悲み、仁左衛門の死を悼むに於て、餘人に劣るものではない。而も黙阿彌式世話狂言の女方をうしなひ、義太夫狂言の老役を失つて、在來の歌舞伎劇に缺陷を生じた結果、そこに新しい歌舞伎劇を生む曙光が見出されるとすれば、たゞ一圖に歌舞伎の前途を悲觀すべきではないと思ふ。梅幸も仁左衛門も明治、大正、昭和の三代に互つて、彼等の爲すべきだけの事をなした。彼等は過去の演劇史にその足跡を残した。後來の俳優等は彼等が苦心のあとを尋ねて、更に新しき領域を開拓するに努力しなければなるまい。

(昭和九年十一月十二日)

明治時代の寄席

私は先頃ある雑誌に圓朝や燕枝のむかし話をかいた。それは特にめづらしい材料でもなかつたが、それでも今の若い人たちは珍しかつたと見えて、私を相當の寄席通と心得たらしく、明治時代の寄席について屢々問合せを受けることがある。そこで老人、好い氣になつて、もう少し寄席のおしやべりをする。今度は圓朝や燕枝の個人に就て語るのではなく、明治時代の寄席はどんな物であつたかと云ふことを一般的に説明するのである。

明治といつても初期と末期との間には、著るしい世態人情の相違がある。それを一口に云ひ盡すことは出来ないので、先づ明治二十年前後から四十年頃までを中心として、その大略を語ることにしたい。

今日と違つて、娯樂機關の少い江戸以來の東京人は芝居と寄席を普通の保養場所と心得てゐた。

殊に交通機關は發達せず、電車もバスも圓タクも無く、わづかに下町の大通りに鐵道馬車が開通してゐるに過ぎない時代にあつては、日が暮れてから滅多に銀座や淺草まで出かけるわけには行かない。先づは近所の夜見世か縁日ぐらゐを散歩するに留まつてゐた。その人々に取つては、寄席が唯一つの保養場所であつた。

自宅にゐても退屈、さりとて近所の家々を毎晩訪問するのも氣の毒、殊に雨でも降る晩には夜見世のそゞろ歩きも出来ない。こんな晩には寄席へでも行くのほかは無。寄席は劇場と違つて、市内各區に幾軒も散在してゐて、めい／＼の自宅から餘り遠くないから、往復も便利である。木戸錢も廉い。それで一夜を楽しんで來られるのであるから、みんな寄席へ出かけて行く。今日の寄席が兎かくに不振の状態にあるのは、その内容如何よりも、映畫その他の娛樂機關が増加したのと、交通機關が發達した爲であると思ふ。實際、明治時代の一夜を楽しむには、近所の寄席へでも行くのほかは無かつたのである。

それであるから、近所の寄席へ行くと、かならず近所の知人に出逢ふのであつた。私は麴町區元園町（此頃は麴町二丁目に編入されてしまつた。）に生長したが、近所の寄席は元園町の青柳亭、麴

町二丁目の萬よし、山元町の萬長で、これらの寄席へ行つた時に、顔を見識つてゐる人に逢はなかつた例は一度もなかつた。かならず二三人の知人に出逢ふ。殊に正月などは、十人乃至二十人の知人に逢ふことは珍しくなかつた。私が子供の時には、その大勢の人達から菓子や煎餅や蜜柑などを貰ふので、兩方の袂が重くなつて困つたことがあつた。

そんなわけで、その頃の寄席は繁昌したのである。時に多少の盛衰はあつたが、私の聞いてゐる所では、明治時代の寄席は各區内に四五軒乃至六七軒、大小あはせて百軒を越えてゐたといふ。その中でも本郷の若竹亭、日本橋の宮松亭を第一と稱し、他にも大きい寄席が五六十軒あつた。江戸以來、最も舊い歴史を有してゐるのは、私の近所の萬長亭であると傳へられてゐた。私は子供の時から屢々この萬長亭へ聴きに行つたので、江戸時代の寄席はこんなものであつたかと云ふ昔のおもかげを想像することが出來たのである。

寄席の種類は色物席と講談席の二種に分れてゐた。色物とは落語、人情話、手品、假聲、物真似、寫繪、音曲のたぐひを併せたもので、それを普通に「寄席」といふのである。一方の講談席は文字通りの講談専門で、江戸時代から明治の初期までは講釋場と呼ばれてゐたのである。寄席は原則と

して夜席、即ち午後六時頃から開演するのを例としてゐたが、下町には正午から開演するものもあつた。これを晝席と稱して、晝夜二回興行である。但し晝夜の出演者は同一でないのが普通であつた。講談席は大抵二回興行と決まつてゐた。

寄席の木戸錢は普通三錢五厘、廉いのは三錢乃至二錢五厘、圓朝の出演する席だけが四錢の木戸錢を取ると云はれてゐたが、日清戦争頃から次第に騰貴して、一般に四錢となり、五錢となり、以後十年間に八錢又は十錢までに騰つた。ほかに坐蒲團の代が五厘、烟草盆が五厘、これもだん／＼に騰貴して一錢となり、二錢となつたので、日露戦争頃に於ける一夕の寄席の入費は、木戸錢と蒲團と烟草盆をあはせて、一人十四五錢となつた。中入には番茶と菓子と鮎を賣りに来る。茶は土瓶一個が一錢、菓子は駄菓子や鹽煎餅のたぐひで一個五厘、鮎は細長い箱に入れて六個三錢であつたが、鮎を賣ることは早く廢れた。

東京電燈會社の創立は明治二十年であるが、その電燈が一般に普及されるやうになつたのは十數年の後であつて、大抵の寄席は客席に大ランプを吊り、高坐には二個の燭臺を置いてゐた。したがつて、高坐に出てゐる藝人は途中で蠟燭の芯を切らなければならぬ。落語家などが自分の話をつ

づけながら蠟燭の芯を切るのは頗るむづかしく、それが満足に出来るやうになれば一人前の藝人である云はれてゐた。今から思へば、場内は薄暗かつたに相違ないが、その時代の夜は世間一般が暗いので、別に暗いとも感じなかつたのである。而も圓朝が得意の「牡丹燈籠」にも「眞景累ヶ淵」にも、この薄暗いと云ふことが餘ほどの便利をあたへてゐたらしい。圓朝の話術がいかにか巧妙でも、今日のやうに電燈煌々の場内では、あれだけに幽暗の氣分を漂はすことが出来なかつたかも知れないと察せられる。

暗い話のついでに云ふが、その頃の夜は甚だ暗いので、寄席へゆくには提灯を持參する人が多かつた。女はみな提灯を持つて行つた。往く時は兎も角も、歸り路が暗いからである。寄席の下足場には、めい／＼の下駄の上に提灯が懸けてあつた。そこで、閉場になると、場内の客が一度にどや／＼と出て来る。それに對して、提灯の火を一々に點けて渡すのであるから、下足番は非常に忙しい。雨天の節には傘もある。傘と提灯と下駄と、この三つを一度に渡すのであるから、寄席の下足番はよほど馴れてゐなければ勤められない事になつてゐた。その混雜を恐れて、自宅から提灯を持つて迎ひに来るものもあつた。それも明治二十二年頃からだん／＼に廢れて、日清戦争以後には

提灯をさげて寄席へゆく人の姿を見ないやうになつた。それでも明治四十一年の秋、私が新宿の停車場附近を通ると、これから寄席へゆくと話しながら通る二人づれの女、その一人は普通の提灯を持ち、ひとりは大きい河豚提灯を持つてゐるのを見た。その頃の新宿の夜はまだ暗かつたのである。今日の新宿に比べると、實に今昔の感に堪へない。

今日の若い人達も薄々その噂を聞いてゐるであらうが、その當時における女義太夫の人気は恰も今日の映畫女優やレビユー・ガールに比すべきものであつた。江戸時代の女義太夫は頗る卑められたものであつたが、東京の寄席でおひく賣出すやうになつたのは明治十八九年頃からのことで、竹本京枝などがその先驅であつたと思はれる。やがて竹本綾之助があらはれ、住之助が出で、高坐の上は紅紫爛熳、大阪上りとか阿波上りとか色々の名をつけて、四方からおびたゞしい女義太夫が東京に集まつて來たのである。その全盛時代は明治二十二年頃から四十年前後に至る約二十年間で、東京の寄席の三分の一以上は、女義太夫一座によつて占領さるゝ有様であつた。彼等のうちには勿論老巧の上手もあつたが、その大部分は若い女で、高島田に紅い花かんざしを賣物にしてゐたのであるから、一般に女義太夫と云はずして娘義太夫と稱してゐた。藝の巧拙は二の次として、所

詮は「娘」であるから人氣を博したのである。

今日の映畫女優やレビユー・ガールの支持者に對しては、ファンといふ外來語をあたへられてゐるが、その當時の娘義太夫支持者に對しては、ドウスル連といふ名稱があたへられてゐた。字を宛てれば、堂摺連と書くのである。その名稱の由來は、義太夫のサワリの絲に連れて、ドウスルくと奇聲を發して拍手喝采するからである。まじめな聴衆の妨害になること勿論であるが、何分にも多數が騒ぎ立てるのであるから、彼等の跋扈に任せるのほかは無かつた。堂摺連には學生が多かつたから、今日は社會的に相當の地位を占めてゐる實業家や政治家や學者のうちにも、曾てドウスルに憂身をやつした經歷の所有者を少からず見出すであらう。

娘義太夫全盛の證據には、その當時の諸新聞は、二三の大新聞を除いて大抵は「今晚の語り物」といふ一欄を設けて、各席亭毎晩の淨瑠璃外題と太夫の名を掲載してゐたのであつた。日露戦争前後から堂摺連も次第におとろへ、娘義太夫もまた衰へた。

日清戦争以後からは浪花節が流行して來た。その以前の浪花節は専ら場末の寄席に逼塞して、聴衆も下層の人々が多かつたのであるが、次第に勢力を増して來て、市内で相當の地位を占めてゐる

席亭も「御座敷淨瑠璃、浪花節」のピラを懸けるやうになつた。聴衆もまた高まつて、相當の商人も行き、髭の生えた旦那も行き、黒縮緬の羽織を著た奥さんも行くやうになつた。そのほかに、明治三十年以後には源氏節、大阪仁和賀、改良劍舞のたぐひまでが東京の寄席にあらはれて、在來の色物はだん／＼に壓迫されて來た。今日落語界の不振を説く人があるが、右の事情で東京の落語界はその當時から已に凋落の徑路を辿りつゝあつたのである。

大劇場を憂ふ

近來わが劇界を見渡すに、大劇場方面には憂ふべき事相が頗る多い。それは歌舞伎劇の將來がどうか、新派劇の將來がどうか云ふ問題ではなく——勿論それも大問題ではあるが——差當り我々の眼前に現れてゐる事相について觀察しただけでも、我々に種々の不安を感じさせるものがある。第一には演劇の映畫化である。近來、映畫の著るしく進歩し、大いに流行するに伴つて、演劇も無意識に、或は有意識に、その感化を受けて、だん／＼に映畫化されて行く傾向がある。その結果、なるべく場面を多くし、臺詞を少くし、バタ／＼と片付けてゆくのが流行する。立體的などは嫌はれて、たゞ平面的に筋を運んでゆく。要するに、筋が判れば好いといふ行き方である。苟くも「芝居」といふものを、單に「判れば好い」で片付けられては堪らない。

演劇には演劇の特色がある。映畫には映畫の特色がある。兩者相侵すこと無くして、たがひにそ

の特色を發揮するのが本道であるのに、近來は兩者が互ひに接近して相侵さうとしてゐる。思へば實に愚かしいことで、舞臺を限られてゐる演劇が如何に苦心努力したところで、無制限の舞臺を有する映畫に敵對し得べきではない。又、いかにトーキーが發明されたところで、スクリーンに映寫される人間の影法師が、生きて物をいふ人間の演劇に拮抗し得べきではない。演劇が映畫を模倣し、映畫が演劇を模倣するが如きは、文字通りに「勞して功無き」ものである。

映畫に就ては今こゝに論議するを避けて、單に演劇に就てのみを云へば、演劇の映畫化する時は即ち演劇の滅亡する時であると、私は認めざるを得ない。その理由は管々しく説明するまでもなく、實に明白であると思ふ。演劇の特色は何か、映畫の特色は何か、それを考へれば直ぐに判ることである。而も我が大劇場では近來努めて演劇を映畫化さうと試みてゐる形跡があり／＼と看取される。映畫を向うへ廻して映畫は映畫、演劇は演劇と、正面から堂々と對抗する勇氣を缺いてゐる。

以前は舞臺で評判の好かつた狂言を、映畫の方で取入れたのであるが、近來は映畫で評判の好かつたストーリーを、舞臺の方でドシ／＼借用する事になつた。その結果、多くは失敗であるにも拘らず、劇場側では猶懲りずに其失敗を繰返してゐるのは、愚かを通り越して寧ろ慘めである。劇場

側では映畫の宣傳力を利用してゐる積りであらうが、それは却つて反對の結果を招いて、演劇は映畫よりも面白くないといふ惡評を蒙りつゝあるのを知らないのである。

第二は脚色物の流行である。好評の新聞小説のたぐひを脚色するのは今に始まつたことではないが、殊に新派劇は依然として其舊態を改めないばかりか、ますますそれを助長してゐるやうな傾向が見られる。新派劇が一旦衰微したのは、常に新聞その他の脚色物のみを繰返して、新派独自の脚本を所有しなかつたことに原因してゐるが、それが再興の今日、更に先度の失敗を繰返さうとしてゐるのは、これもまた愚かである。前に云つた映畫の場合と同様、原作の宣傳力に頼らうとする弱味があるからであらうが、今日の時代、もう他力本願ばかりではいけない。敢然として自分自身の力で闘ふことを考へる必要がある。勿論、興行物であるから相當の宣傳をしなければなるまいが、それは自己の力で自己を宣傳するのであつて、他の宣傳力を利用するといふやうな横着な方法は避けなければならない。横着な方法は永續性に乏しく、所詮は觀客に倦きられて自己の不利を招くことになる。

由來、小説の脚色は演劇の本道でない。これも映畫と同様、小説は小説、演劇は演劇であつて、

良き小説が必ずしも良き演劇とはなり得ない。いかなる脚色者といへども、已に原作がある以上、それをメチャクに破壊するのは出来得ないことであるから、結局は原作をそのままに劇化するだけのことで、どうしても純然たる創作劇とは違つた性質の物になり易い。これも知らず識らずの間に、演劇を傷けてゆく事になるのである。

第三は女優である。女形と女優と、この問題に觸れると中々長くなるから、こゝでは姑く云はないが、女優の舞臺に登る者がだん／＼に増加したのは事實である。私もそれに對して異論はない。なんと云つても、將來に於て女形はおとろへ、女優が榮えるであらうとは、誰にでも考へ得られることである。而も女の役には女が扮するのを自然とすると云ふだけの理由で、未熟の女優を無條件に歓迎し、むやみに登場させるのは考へ物である。單に自然といふだけならば、男の役に男が扮するのも自然であると云ひ得る。さりとて總ての男が「舞臺の上の男」にはなり得ない。それと同じことで、單に女であるといふだけでは「舞臺の上の女」にはなり得ない。それには相當の天分と相當の藝とを持たなければならぬのは明白である。この判り切つた理窟を忘却して、單に女であるといふに過ぎないやうな女優を採用して、果して好い芝居が出来るであらうか。殊に大劇場の當事

者はこゝに注意しなければなるまい。

第四は在來の狂言の短縮である。時間の節約のみを專一とする結果、在來の狂言を手あたり次第にカットすることが頻りに流行する。これも前に云つたやうに「判れば好い」の方針である。演劇といふものは、判りさへすれば好いものであらうか。そんなことを眞面目に論議するのは實に馬鹿らしいくらいであるが、今日のありさまでは、開き直つて理窟を云はなければならぬ事にもなる。これも好加減にして置かないと、我が國劇崩壞の端緒となるであらう。

今と昔とは興行時間の長短が違ふのであるから、在來の狂言に對して適當のアーレンヂを加へるのは好い。寧ろそれが當然であるかも知れない。而もそのアーレンヂは適當の作家に相當の時間をあたへて、完全な定本を作るべきであつて、單に時間の都合や、登場俳優の都合などで、出たらめにカットするのは禁物である。たとひ昔から仕古したもので、観客がよく其狂言の筋を呑み込んでゐるものでも、妄りにカットするのは宜しくない。今に始まつたことでは無いが、『太功記』十段目を「残る蕾」から始めたり、『寺子屋』を「源藏戻り」から始めるたぐひは、明かに原作を傷けるものと云はなければならぬ。今日の傾向から察すると、こんなことは將來いよ／＼流行するであ

らうが、これも確に憂ふべきである。

第五、第六、それからそれへと數へ立て、行く、いはゆる「等、等、等」で、文句をいふことは澤山に發見されるが、以上列擧した四個條だけでも、わが國劇の進歩と保存とに著しい障害をあたへるものであると思はれる。就中、有害と認められるのは、第一に擧げた演劇の映畫化であつて、この一つでも我が國劇をほろぼすべき病根となり得る。これだけは絶対に排撃しなければならぬ。近來一種の大劇場論が起つて演劇のレビュー化さへも唱へられるやうであるが、それらは論外であるから、こゝでは云はない。單に「明日の劇場」とかいふ新しい名の下に、傳統を無視し、藝術を無視し、演劇をレビューやサアカスと同列に低下させようなどと考へる者あらば、彼等はわが國劇の賊と云つても好いくらゐである。

豫定の紙數を超えるのを恐れた爲に、すべての議論が簡に過ぎた。よろしく御判讀を希ふ。

かたき討の芝居

一

復讐は人間の本能であるから、遠い昔から存在したに相違ない。それに就いては他の専門家の研究が發表されてゐるから、私は單に日本の芝居に於ける「かたき討」について少しく述べることにする。

改めて註するまでもないが、普通に用ゐられる「かたき討」といふ言葉は、汎い意味における復讐ではない。君父兄弟、あるひは親類縁者の仇を報るるために、その相手を殺す場合に限られてゐるのである。江戸時代に流行した「かたき討」の芝居や小説や講談のたぐひも、皆この限られたる復讐の範圍を出でない。随つて、千編一律の單調になるのもまた已むを得ないのである。

能樂にも「小袖會我」「夜討會我」「望月」のたぐひが仇討物として一般に知られてゐる。殊に

「望月」の如きは頗る劇的に出来てゐて、芝居の方面にも種々の影響をあたへてゐるやうに思はれる。この「望月」は明治以後に劇化されて、新富座で上演されてゐる。西鶴その他の小説にも仇討物があり、又實際にも仇討事件が諸國に行はれたのであるから、劇の方面にも仇討物を脚色するのは當然で、江戸時代に上演された仇討狂言はおびたゞしい數字に上つてゐる。芝居道には「曾我物」といふ通言さへあつて、毎年正月には必ず曾我兄弟に縁のある狂言を上演するのを例としてゐた位である。

江戸の三座は十一月の顔見世狂言、一月の初春狂言、三月の彌生狂言、五月のさつき狂言、七月の盆狂言、九月の秋狂言、この六回を以て一年の興行を終るのを例としてゐた。その中で、初春狂言に曾我物を擇むのは前述の通りである。その外に、いつの頃から始まつたのか知らないが、臯月狂言には仇討物を上演することになつてゐた。それは五月が曾我兄弟仇討の當月であるが爲かと思はれる。そんなわけで、一年六回興行の中で二回は仇討物を上演するを例とし、特に例外が無いでもなかつたが、原則としては此の慣例を守つてゐたのであるから、仇討狂言がしばしば繰返されたのも怪むに足らないことで、渥美清太郎氏の説によると、江戸時代に生れた歌舞伎狂言の三分の一

は仇討物であるといふ。

劇場側では勿論なにかの意味があつて仇討物を繰返したのではなく、それが一般観客に喜ばれたが爲に過ぎない。江戸時代の士人は芝居小屋などに足を入れないのが普通で、劇場の観客は農、工、商の三階級に限られ、殊に商人と職人が多數を占めてゐたのは周知の事實である。それにも拘らず、仇討物が一般に歓迎されたのを見ると、仇討禮讃は我が國民性といふべきであらう。芝居や講談の仇討物で代表的と認められるものは曾我兄弟の仇討、赤穂浪士の仇討、伊賀越の仇討で、就中、曾我と赤穂浪士の一件を脚色したものは數百種に上ると云はれてゐる。

曾我は芝居道で吉例と稱する「曾我の對面」以外に、代表的の狂言はない。而も年々歳々の初春狂言に上演するのであるから、單に五郎とか、十郎とか、朝比奈とか云ふ名を假りただけで、その内容は史實に頓着なく、勝手次第に脚色されたのが多く、歌舞伎十八番の「助六」すらも、助六實は曾我五郎と云ふたぐひであるから、他も推して知るべしで、大磯の虎が八百屋お七を兼ねるといふ始末。観客もまた曾我に縁のある人物が登場して、かたき討の一件を背景にして動いてゐれば、舞臺の上では如何なる狂言を演じてゐても咎めないといふ風であつた。甚しきは曾我に何の縁もな

い狂言を上演して、その外題だけに「何々曾我」と冠せたものもある。要するに、その内容の如何を問はず、なんでも「曾我」と云へば観客も納得し、今度の春狂言には「曾我」を上演すると聞けば、それだけで春らしい気分を感じたのである。

曾我と違つて、赤穂の仇討には「假名手本忠臣蔵」といふ代表的の狂言がある。「忠臣蔵」は竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作で、寛延元年八月、大阪の竹本座のあやつり芝居に上演されたものであるが、大好評を博して十一月まで興行した。それが間もなく三都で劇化されると、いはゆる「脚なくして天下を走る」といふ勢ひで、全國の津々浦々にまで行き渡り、四五十年の後には殆ど「忠臣蔵」の名を知らざる者なく、略して「くら」と云つても直ぐに判るほどになつたばかりか、これを上演すれば必ず成功するといふので、芝居道の獨參湯と呼ばれるやうになつた。これに次いで近松半二作の「太平記忠臣講釋」がある。

右の如くに「忠臣蔵」を第一とし、「忠臣講釋」を第二として、その他に赤穂一件を脚色したものは、義太夫にも歌舞伎にも澤山ある。これも前に舉げた「曾我」と同様、屢々くり返すうちには材料も盡きてしまつて、殆ど史實には關係なく、單にその人名を假りただけで、全く作者の空想に出

でたものが多くなつた。彼の「明烏」の浦里と時次郎も赤穂一件に關係があり、彼の「四谷怪談」のお岩や田宮伊右衛門も赤穂一件に關係があるやうに作られてあるのは、観客に馴染の深い「忠臣蔵」に縁のあるやうに企てられたに過ぎない。

次は伊賀越の仇討で、その代表的の物は近松半二作の「伊賀越道中双六」である。これは半二の絶筆で、天明三年四月、やはり大阪の竹本座のあやつり芝居に上演されたものであるが、その九月には直ぐに大阪の中座で歌舞伎化され、彼の「忠臣蔵」と同様に忽ち三都に擴められた。仇討物語としては、荒木又右衛門、澤井又五郎の名は甚だ有名であるが、劇としては曾我や忠臣蔵に遠く及ばず、この一件を脚色した狂言の種類も多くない。以上の三者のほか、仇討狂言として有名なものは「天下茶屋」「龜山の仇討」「崇禪寺馬場」「田宮坊太郎」「合邦辻」「鶯塚」「檻樓錦」のたぐひで、女の仇討でよく知られてゐるのは「加々見山」のお初、「白石噺」の宮城野信夫などであらう。殊に寛政以後、小説界にも劇界にも仇討物が多くなつたのは注意すべき傾向で、怪談物の流行と共に、時代が漸く頽廢期に入つたのを語るものである。

二

小説に演劇に仇討物を愛好するのは、わが國民性であることは前に述べたが、その以外に強い刺戟を追求する傾向が著るしく現はれて來たのは寛政以降のことで、文化文政に至つていよく甚だしく、惹いて江戸末期に及んだのである。怪談物と仇討物と、その本質は異つたものでありながら、それが車の兩輪の如くに併立の流行を來したのは、強烈の刺戟を求むる點に於て一致してゐるからである。怪奇と残酷と、それでなければ小説の讀者と演劇の觀客を満足させることが出來なくなつたのである。怪談物は姑く云はず、仇討物も在來とは次第にその形を變へて來たのを見逃すことは出來ない。

仇討物を好むのは忠孝の精神の發露と認むべきであるが、忠孝以外に残酷を好むやうになつたのは、確に頽廢的である。在來の仇討狂言には差したる残酷の場面はない。而も寛政以降の仇討物には「返り討」といふことが多くなつた。前に擧げた「天下茶屋」「龜山」「崇禪寺馬場」その他、いづれも「返り討」を以て有名となつてゐるのである。

「返り討」は云ふまでもなく、仇を狙ふ者が却つて仇のために討たれるのである。その事が已に不愉快であるのに、返り討は決してあつさり片付けられる事なく、仇の本人が多勢を恃み、或は相手の病弱に乗じて、極めて残酷の手段を以て相手を虐殺するのである。したがつて、なぶり殺しの血みどろな場面が屢々展開される。今日では「返り討」の場が上演されるとしても極めてあつさり、と演じ去るのであるが、故老の談によると昔の「返り討」の場は、これでもか／＼と云ふやうに、あらゆる殘虐の手段を盡し、文字通りに「眼を掩ふ」の慘狀を演出したといふ。かうなると、忠孝も節義も問題でない。觀客は唯その凄慘の情景に魅せられて、病的の快感に酔へばよいのである。その目的に合致するために、仇討物とはいひながら、最後の仇討は甚だ簡單に片付けられてしまつて、その間の「返り討」に主力をそゞくやうになる。つまり、返り討を見せ場として一日の狂言を組み立てることになつて仕舞つたのである。悪人が暴力を揮つて大いに威張る、善人が血みどろになつて踏みにじられる。さういふ筋の芝居でなければ、仇討狂言も一般觀客に歡迎されないやうになつたのは、一種の變態であると云つてよからう。

「返り討」の残酷だけでは、まだ満足されないと見た場合には、更に又、甚だしい戀愛の濕れ場を

加へる。猶その上に、殺された者の幽霊が現れると云ふやうな凄い場面を加へる。残酷、卑猥、怪奇、これ等の責め道具を取揃へて、観客に満足を迫るのである。かうした責め道具は必ずしも仇討物には限らないのであるが、仇討物の形式を假りるのが比較的に便利であるのと、仇討物といふことが一般の人氣を呼ぶにも都合が好いので、劇場側では好んで仇討物にこの手段を用ひ、観客もまたそれを喜んだのである。この傾向は先づ大阪の小芝居に始まつて大芝居に移り、更に江戸に移つたのであると云ひ傳へられてゐるが、その起源の前後は兎もあれ、江戸でも大いに流行したのである。

江戸時代の作者、たとへば鶴屋南北、櫻田治助、河竹新七等の脚本をみれば、その傾向がありありと看取される。今日出版されてゐる江戸時代の脚本類は、發賣禁止を恐れて相當の改訂を加へてあるから、それ程にひどいとは思はれないのであるが、その原作を見たら大變、残酷と云はうか、卑猥と云はうか、よくもこんな物が舞臺の上に實演されたと驚嘆するやうなのが往々ある。仇討物を武士道と結び付けて考へたりすると、案外の間違ひが出来ないとは限らない。

勿論、最初は武士道の影響を受け、わが國民固有の忠孝節義の精神から仇討物を歓迎したに相違

ないが、中頃から變じて右の始末となつてしまつた。實際に於ては、江戸末期まで仇討は絶えなかつた。世間でもそれを讚美した。したがつて、かたき討の芝居を演ずることは人氣を呼ぶ一つの興行法であつたが、その内容は著るしく變つてゐた。たとひ其の題目は仇討であつても、忠孝節義の一點張りでは観客が承知しない時代となつたのである。かうした傾向は傳統的に江戸末期まで繼續したが、明治以後は流石に面目を改めなければならなくなつた。文明開化の世間も承知せず、第一に當局者が許可しないことになつたから、狂言の形式もおのづから變つて來た。

個人の仇討は禁止された。世間も仇討を否認するやうになつた。その結果、明治以後には仇討狂言の新作が少くなつた。稀に新作が出るとしても、大體の筋は實録に據つたもので、残酷や怪奇を見せ場とするものは殆ど跡を絶つた。江戸時代の仇討狂言が再演される場合でも、適當にカットされ、アーレンヂされて、昔の色も匂ひも甚だ稀薄なものになつて仕舞つた。五月狂言に仇討物を上演するといふ慣例も疾うの昔に忘れられた。

唯その中で、代表的といふべき會我的仇討、赤穂浪士の仇討、伊賀越の仇討、これだけは今も廢れない。この三者は江戸時代でも血みどろの「返り討」などを仕組んだものは無い。事實が餘りに

明白で、曾我十郎を返り討にしたり、大石主税を返り討にしたりする事を許されなかつた爲でもあらう。併し「忠臣藏」の傍系の物には、四十七浪士以外の人物が活躍して、残酷や卑猥を見せ場としてゐるものが無いではない。勿論そんな物は今廢れた。今日これ等の代表的仇討狂言を鑑賞するのは、江戸末期の頽廢氣分を清算して、更に最初の本道に復したものと云ひ得る。その行爲を論ぜず、その精神を味ふならば、曾我也赤穂も伊賀越も仇討狂言として舞臺の上に生命を保つてあらう。

今日、一部の観客に歡迎される「劍劇」といふものがある。これは江戸時代の仇討狂言の系統を引いたやうなもので、單に闘ひを主眼とした殺伐な劇である。それが非藝術な物であるのは云ふまでもなく、所詮永續すべきものでもあるまい。

太子河

「水」について何か話せと、雑誌社の注文を受けたが、元來が出不精で、天下の名山大川を跋涉した經驗に乏しいので、山に就ても水に就ても多く語るべき材料を持合せないのは遺憾である。こゝには唯、水について多少の記憶を語るに過ぎない。扱さうなると、どうしても記憶にはつきりと残つてゐるのは、異國の山水である。

滿州の遼陽城外には太子河がある。南滿には河川が少いので、この太子河は有名の大河である。契丹がこゝに遼の國都を建てたのも無理はないと首肯される。南に首山堡その他の高地を控へ、北にこの大河をめぐらしてゐるのは、正に險要の地であらう。私は滿洲の歴史に暗いので、河の名の由來を知らないが、土人の話によると、何とかいふ太子が工事を監督し、幾年の歲月を費してこの河堤を改修したので、河に太子の名を冠したのであるといふ。もちろん正確の測量をしたわけでは

無いが、見渡した所では我が利根川ぐらゐかとも思はれる。但し現在の遼陽城は清の太祖の築いたもので、遼代又は明代の城の位置とは違つてゐるさうである。

現在の城は城壁の一方に河をめぐらしてゐるが、昔の城は河から少しく距れてゐたらしい。明の熹宗帝の天啓元年二月、清の太祖が奉天を攻め落した勢で、更に南下してこの遼陽に迫ると、遼東經略の袁應泰は太子河の水を外濠に引いて死守した。一勝一敗、かなりの激戦が繰返されたらしいが、清兵は城西の水門を破つて濠の水を他へ押流し、濠を渡つて肉薄して來たので、遼陽は遂に陥落、袁應泰は城に殉じた。太祖も敵ながら其の忠勇を賞したといふから、袁は最後まで奮闘したらしい。この戦に、河水に溺るゝもの算無しと傳へられてゐる。

この歴史も今は三百餘年の昔である。それを追懐しながら太子河の長堤に立つと、月並といへば云ふものゝ、やはり今古蒼茫の感が深い。殊に私がこの河邊を幾たびか往來したのは、日露戦争の遼陽陥落當時であつたから、今古對照して史蹟追弔の感をいよゝ深うしたのであつた。

河が何處から發して何處に落ちるか、又その長さが何十里であるかなどといふ事は、滿洲案内記等によつて今日では容易に判るのであるが、その當時の私には何もわからない。單に大河だと思つ

て眺めただけであるが、利根川などと同じやうに河の左右は廣い河原で、芦のたぐひが茂つてゐる。而も河心はなか／＼深いさうで、唐詩にいはゆる「不盡長江滾々來」と云ひさうな勢で滔々と流れてゐるのである。汽車の鐵橋は露兵退却の際に破壊して去つたので、當分は交通杜絶であつた。

一方の城壁を除いて、兩岸には長い堤が見果ても無しに遠く連り、大木の榆柳が所々に陰を成してゐる。堤の下は高粱と蕎麥の畑で、四顧茫々、我が内地では鳥渡見られない風景である。何が釣れるか知らないが、河原の芦のあひだに釣つてゐる人も見える。私はこゝでこんな絶句を作つた。

孤舟落日渡長河。流水蕭蕭秋不波。挾岸芦花白於雪。暮寒吹上釣人簑。

句の善悪は措いて、實景である。時は秋であつたので、夜は河原に落ちる雁の群が多い。月夜ここに立つと、早い霜におどろかされたやうな雁の聲が亂れて聞える。戦後の村落からは砧を擣つ聲も遠く響いて來る。私は一種の詩情の湧き起るのを禁じ得ないで、何か無暗に漢詩や俳句などを唸り出したが、今は大かた忘れてしまつた。

而も忘れられないのは、この河ばたで私がひどく困つたことである。私たちが遼陽を去つて、その北方の大紙房といふ村落に滞在してゐる頃、なんでも九月の末とおぼえてゐるが、私は苦力を連

れて遼陽の城内へ買物に行つた。遼陽へ行くならついでに買つて来てくれと云つて、他の新聞記者達からも色々の買物を頼まれた。かうなると、苦力と私だけでは持切れないので、近所に同じく滞在してゐる従軍僧のところへ行つて、その驢馬を借りることにした。従軍僧は快く貸してくれたが、その代りにこゝでも買物を頼まれた。

苦力と一緒に城内へ行つて、それからそれへと買物に駆けあつた。それで眞直に歸つて来ればよかつたのであるが、私は城内にある我が兵站部をたづねると、よく来たといふので御馳走された。そこで小半日を暮らして、午後五時頃にこゝを出ると、あたりはもう薄暗い。どうしてはぐれたのか、私は城門の邊で苦力の姿を見失つた。暫く待つてゐたが、遂にめぐり逢はないので、私は思ひ切つて歩き出した。けふの買物の一部は麻袋に入れて苦力に擔がせ、その餘は驢馬の脊に積んでゐる。私はその驢馬を牽いて太子河の堤にさしかゝると、細かい雨が降り出して来た。

長い堤は眞暗で、大河の水明りが薄白く見えるばかりである。あたりに人家もなく、灯のひかりも無い。私は用意の火繩を振りながら、片手に馬の綱を牽いて寒い雨のなかをとぼくと辿つて行くと、やがて三清里も過ぎたかと思ふ頃に、驢馬はびたりと立停つて動かなくなつた。これには私も

閉口して、しきりに綱を牽いたり、馬の脊を叩いたりしたが、強情な驢馬は一步も進まない。私は焦れて、馬の耳をつかんでぐいぐいと引張るやら、前足を靴でこつくと蹴るやら、あらゆる手段を講じて引立てようとしたが、馬は頑として應じない。驢馬は一面柔順でありながら、一面非常に頑強であることを知つてゐる私は、もう諦めるより外はなかつた。而も諦められないのは、馬の脊に積んだ荷物である。自分の物だけならば格別、他人からの頼まれ物が澤山に積んであるので、それを捨て去るわけには行かない。第一、この馬も借物であるから、路ばたに捨て去ることは出来ぬ。私は柳の下に腰をおろして、驢馬が自然にあるき出すのを氣長に待つことにした。

そのあひだ約三十分、實に三四時間の長さを覺えたが、幸ひに雨は強くもならず、暗い空に雲切れがして薄月の影が洩れて来た。私も少し落付いて、しづかに烟草を吸ひながら、更に河の上を見渡すと、水は次第に明るくなつて、夜風にみだれる芒や芦の花も薄白く見られた。今夜は雁の聲も多く聞えないで、滔々と流れる水の音のみが高く響いてゐる。川上はよほど降つたらしい。この大河を前にして、天地寂寞のあひだに私ひとり茫然として水を眺めてゐるのである。さびしいのを通り越して、私はなんだか夢のやうな心持になつた。

さつきから水の音にのみ耳を奪はれてゐたが、よく聴けばそらの草の根にこぼろぎも鳴いてゐる。私は夜の寒さが肌にしみて来るやうに覺えた。驢馬も寒いのか、このとき俄に身顫ひして一聲高く嘶いたので、さあ占めたと私は直ぐに起ち上つて、試みに手綱を把つて牽き出すと、馬は素直にあるき始めた。この時の嬉しさは今も忘れない。私はほつとして足を早めると、驢馬も一緒に急いで来る。月はだん／＼に明るくなる。私は元氣を回復して、およそ一清里も歩きつゞけたと思ふ頃、うしろから追つて来るらしい足音がきこえた。月のひかりに透して観ると、それは私の苦力であつた。

「山と水」の課題は、恐らく山水の風光を紹介せよといふ註文であらう。それに對して、こんな追憶談めいた記事を書いては相濟まないが、私が「水」を憶ふ時、先づ自分の頭に描き出されるのは、遼陽の太子河と倫敦のテームズである。テームズは今更らしく紹介するまでも無いから、こゝには云はない。

御堀端三題

一 柳のかげ

海に山に、涼風に浴した思ひ出も色々あるが、最も忘れ得ないのは少年時代の思ひ出である。今日の人はもちろん知るまいが、麴町の櫻田門外、地方裁判所の横手、後に府立第一中學の正門前になつた所に、五六株の大きい柳が繁つてゐた。

堀ばたの柳は半藏門から日比谷まで續いてゐるが、こゝの柳はその反對の側に立つてゐるのである。どう云ふわけでこれだけの柳が路ばたに取殘されてゐたのか知らないが、往來のまん中よりも稍や南寄りに青い蔭を作つてゐた。その當時の堀端は頗る狭く、路幅は殆ど今日の三分の一にも過ぎなかつたであらう。その狭い往來に五六株の大樹が繁つてゐるのであるから、邪魔と云へば邪魔であるが、電車も自動車もない時代には左のみの邪魔とも思はれないばかりか、長い堀ばたを徒歩

する人々に取つては、その地帯が一種のオアシスとなつてゐたのである。

冬は兎もあれ、夏の日盛りになると、往來の人々はこの柳のかげに立寄つて、大抵は一休みをする。片肌ぬいで汗を拭いてゐる男もある。蝙蝠傘を杖にして小さい扇を使つてゐる女もある。それ等の人々を當込みに甘酒屋が荷をおろしてゐる。小さい氷屋の車屋臺が出てゐる。今日ではまったく見られない堀ばたの一風景であつた。

それにつゞく日比谷公園は長州屋敷の跡で、俗に長州原と呼ばれ、一面の廣い草原となつて取残されてゐた。三宅坂の方面から參謀本部の下に沿つて流れ落ちる大溝は、裁判所の横手から長州原の外部に續いてゐて、昔は河瀬が出るとか云はれたさうであるが、その古い溝の石垣のあひだから鰻が釣れるので、うなぎ屋の印半纏を着た男が小さい岡持をたづさへて穴釣りをしてゐるのを屢々見受けた。その穴釣りの鰻屋も、この柳のかげに寄つて來て甘酒などを飲んでゐることもあつた。岡持にはかなり大きい鰻が四五本ぐらゐ蜿くつてゐるのを、私は見た。

そのほかには一種の輕子、いはゆる立ちん坊も四五人ぐらゐは常に集まつてゐた。下町から麴町四谷方面の山の手へ上るには、こゝから道路が爪先あがりになる。殊に眼の前には三宅坂がある。

この坂も今よりは峻しかつた。そこで、下町から重い荷車を挽いて來た者は、こゝから後押しを頼むことになる。立ちん坊はその後押しを目あてに稼ぎに出てゐるのであるが、距離の遠近によつて二錢三錢、あるひは四錢五錢、それを一日に數回も往復するので、その當時の彼等としては優に生活が出來たらしい。その立ちん坊もこゝで氷水を飲み、あま酒を飲んでゐた。

立ちん坊といつても、毎日おなじ顔が出てゐるのである。直ぐ傍には櫻田門外の派出所もある。したがつて、彼等は他の人々に對して、無作法や不穩の言動を試みることはない。こゝに休んでゐる人々を相手に、いつも愉快に談笑してゐるのである。私もこの立ちん坊君を相手にして、屢々語つたことがある。

私が最も多くこの柳の蔭に休息して、堀ばたの涼風の恩恵にあづかつたのは、明治二十年から二十二年の頃。即ち私の十六歳から十八歳に至る頃であつた。その當時、府立の一中は築地の河岸、今日の東京劇場所在地に移つてゐたので、麴町に住んでゐる私は毎日この堀ばたを往來しなければならなかつた。朝は登校を急ぐのと、まだそれ程に暑くもないので、この柳を横眼に見るだけで通り過ぎたが、歸り路は午後の日盛りになるので、築地から銀座を横ぎり、數寄屋橋見附を這入つて

有樂町を通り抜けて來ると、こゝらが丁度休み場所である。

日蔭のない堀ばたの一本道を通つて、例のうなぎ釣りなどを覗きながら、この柳の下に辿り着くと、そこにはいつでも三四人、多い時には七八人が休んでゐる。立ちん坊もまじつてゐる。氷水も甘酒も一杯八厘、その一杯が實に甘露の味であつた。

長い往來は強い日に白く光つてゐる。堀ばたの柳には蟬の聲がきこえる。重い革包を柳の下枝にかけて、帽子をぬいで、洋服のボタンをはづして、額の汗をふきながら一杯八厘の甘露を吸つてゐる時、どこから吹いて來るのか知らないが、一陣の涼風が青い影を揺がして颯と通る。まったく文字通りに、涼味骨に透るのであつた。

『涼しいなあ。』と、私達は思はず聲をあげて喜んだ。時には跳りあがつて喜んで、周圍の人々に笑はれた。私達ばかりでなく、この柳のかげに立寄つて、この涼風に救はれた人々は、毎日何十人、あるひは何百人の多きに上つたであらう。幾人の立ちん坊もこゝを稼ぎ場とし、氷屋も甘酒屋もここで一日の生計を立てゝゐたのである。いかに鬱蒼といふべき大樹であつても、わづかに五株か六株の柳の蔭がこれほどの功德を施してゐようとは、交通機關の發達した現代の東京人には思ひも及

ばぬことであるに相違ない。その昔の江戸時代には、他にも斯ういふオアシスが澤山見出されたのであらう。

少年時代を通り過ぎて、私は銀座邊の新聞社に勤めるやうになつても、やはり此の堀ばたを毎日往復した。而も日が暮れてから歸宅するので、この柳のかげに休息して涼風に浴するの機會がなく、年ごとに繁つてゆく青い蔭をながめて、昔年の涼味を忍ぶに過ぎなかつたが、我國に帝國議會といふものが初めて開かれても、こゝの柳は伐られなかつた。日清戦争が始まつても、こゝの柳は伐られなかつた。人は昔と違つてゐるであらうが、氷屋や甘酒屋の店も依然として出てゐた。立ちん坊も立つてゐた。

その懐かしい少年時代の夢を破る時が遂に來つた。彼の長州原がいよゝ日比谷公園と改名する時代が近づいて、先づその周圍の整理が行はれることになつた。鰻の釣れる溝の石垣が先づ破壊された。つゞいて彼の柳の大樹が次から次へと伐り倒された。それは明治三十四年の秋である。涼しい風が薄寒い秋風に變つて、こゝの柳の葉もそろ／＼散り始める頃、むさんの斧や鋸がこの古木に祟つて、淨瑠璃に聞き慣れてゐる「三十三間堂棟由來」の悲劇をこゝに演出した。立ちん坊もどこ

かへ巢を換へた。氷屋も甘酒屋も影をかくした。

それから三年目の夏に日比谷公園は開かれた。その冬には半藏門から數寄屋橋に至る市内電車が開通して、こゝらの光景は一變した。その後幾たびの變遷を経て、今日は昔に三倍するの大道となつた。街路樹も見ごとに植ゑられた。昔の涼風は今もその街路樹の梢に音づれてゐるのであらうが、私に涼味を思ひ起させるのは、やはり昔の柳の風である。

二 怪談

御堀端の夜歩きについて、こゝに一種の怪談をかく。但し本當の怪談ではないらしい。いや、本當でないに決まつてゐる。

私が二十歳の九月はじめである。夜の九時ごろに銀座から麴町の自宅へ歸る途中、日比谷の堀端にさしかゝつた。その頃は日比谷にも昔の見附の跡があつて、今日の公園は一面の草原であつた。電車などは勿論往來してゐない時代であるから、このあたりに灯の影の見えるのは櫻田門外の派出所だけで、他は眞暗である。夜に入つては往來も少い。時々人力車の提灯が人魂のやうに飛んで

行く位である。

しかも其時は二十日前後の天候不穩、風まじりの細雨の飛ぶ暗い夜であるから、午後七八時を過ぎると殆ど人通りがない。私は重い雨傘をかたむけて、有樂町から日比谷見附を過ぎて堀端へ來かゝると、俄にうしろから足音がきこえた。足駄の音ではなく、草履か草鞋であるらしい。その頃は草鞋もめづらしくないので、私も別に氣に留めなかつたが、それが餘りに私のうしろに接近して來るので、私は何ごころなく振返ると、直ぐ後ろから一人の女があるいて來る。

傘を傾けてゐるので、女の顔は見えないが、白地に桔梗を染め出した中形の單衣を着てゐるのが暗いなかにもはつきりと見えたので、私は實にぎよつとした。右にも左にも灯のひかりの無い堀端で、女の着物の染模様などが判らう筈がない。幽霊か妖怪か、いづれ唯者ではあるまいと私は思つた。暗い中で姿の見えるものは妖怪であるといふ古來の傳説が、わたしを強く脅かしたのである。

まさかにきやつと叫んで逃げる程でもなかつたが、わたしは再び振返る勇氣もなく、たゞ眞直に足を早めてゆくと、女もわたしを追ふやうに附いて來る。女の癖になか／＼足がはやい。さうなるのと、私はいよ／＼氣味が悪くなつた。江戸時代には三宅坂下の堀に河瀬が棲んでゐて、往來の人を

嚇したなどと云ふ傳説がある。そんなことも今更に思ひ出されて、私はひどく臆病になつた。

この場合、唯一の救ひは櫻田門外の派出所である。そこまで行き着けば灯の光があるから、私のあとを付けて来る怪しい女の正體も、あり／＼と照らし出されるに相違ない。私はいよ／＼急いで派出所の前まで辿り着いた。こゝで大膽に再び振返ると、女の顔は傘にかくされてやはり見えないが、その着物は確に白地で、桔梗の中形にも見誤りはなかつた。彼女は瘦形の若い女であるらしかつた。

正體は見とゞけたが、不安はまだ消えない。私は黙つて歩き出すと、女はやはり附いて來た。私は氣味の悪い道連れ(？)を後ろに脊負ひながら、たうとう三宅坂下まで辿り着いたが、女は河瀬にもならなかつた。坂上の道は二筋に分れて、隼町の大通りと半藏門方面とに通じてゐる。今夜の私は、灯の多い隼町の方角へ、女は半藏門の方角へ、こゝで初めて分れ／＼になつた。

先づほつとして歩きながら、更に考へ直すと、女は何者か知れないが、暗い夜道のひとり歩きがさびしいので、恐らく私のあとに附いて來たのであらう。足の早いのが少し不思議だが、私にはぐれまいとして、若い女が一生懸命に急いで來たのであらう。更に不思議なのは、彼女は雨の夜に足

駄を穿かないで、素足に竹の皮の草履をはいてゐた事である。しかも着物の裾をも引き揚げないで、濡れるがまゝにびちや／＼と歩いてゐた。誰かと喧嘩して、臺所からでも飛び出して來たのかも知れない。

もう一つの問題は、女の着物が暗い中ではつきりと見えたことであるが、これは私の眼のせりかも知れない。幻覺や錯覺と違つて、本當の姿がそのままに見えたのであるから、私の頭が怪しいといふ理窟になる。わたしは女を怪むよりも、自分を怪まなければならぬ事になつた。

それを友達に話すと、君は精神病者になるなぞと嚇された。而もそんな例は後にも先にも唯一度で、爾來四十餘年、幸ひに蘆原將軍の部下にも編入されずにゐる。

三三 宅 坂

次は怪談でなく、一種の遭難談である。讀者には餘り面白くないかも知れない。

話はかなりに遠い昔、明治三十年五月一日、私が二十六歳の初夏の出來事である。その日の午前九時ごろ、私は人力車に乗つて、半藏門外の堀端を通つた。去年の秋、京橋に住む知人の家に男の

兒が生まれて、この五月は初の節句であるといふので、私は祝物の人形をとよげに行くのであつた。私は金太郎の人形と飾り馬との二箱を風呂敷についで抱へてゐた。

わたしの車の前を一臺の車が走つて行く。それには陸軍の軍醫が乗つてゐた。今日の人はあまり氣の附かないことであるが、人力車の多い時代には、客を乗せた車夫が兎かくに自分の前をゆく車のあとに附いて走る習慣があつた。前の車のあとに附いてゆけば、前方の危険を避ける心配が無いからである。而もそれがために、却つて危険を招く虞れがある。私の車なども其一例であつた。

前は軍醫、後は私、二臺の車が前後して走るうちに、三宅坂上の陸軍衛戍病院の前に來かゝつた時、前の車夫は突然に梶棒を右へ向けた。軍醫は病院の門に入るのである。今日と違つて、その當時の衛戍病院の入口は、往來よりも少しく高い所にあつて、差したる勾配でもないが一種の坂路をなしてゐた。

その坂路にかゝつて、車夫が梶棒を急轉した爲に、車はずりりと後戻りをして、そのあとに附いて來た私の車の右側に衝突すると、はずみは怖ろしいもので、双方の車は忽ち顛覆した。軍醫殿も私も地上に投げ出された。

ぞつとしたのは、その刹那である。單に投げ出されただけならば、まだしも災難が軽いのであるが、私の車の又あとから外國人を乗せた二頭立の馬車が走つて來たのである。軍醫殿は幸ひに反對の方へ落ちたが、私は地上に落ちると共に、その馬車が乗りかゝつて來た。私ははつと思つた。それを見た往來の人たちも思はずあつと叫んだ。私のからだは完全に馬車の下敷になつたのである。

馬車に乗つてゐたのは若い外國婦人で、これも帛を裂くやうな聲をあげた。私を轢いたと思つたからである。私も無論に轢かれるものと覺悟した。馬車の馬丁もあわてゝ手綱をひき留めようとしたが、走りつゞけて來た二頭の馬は急に止まることが出來ないで、私の上をズル／＼と通り過ぎてしまつた。馬車がやう／＼止まると、馬丁は馭者臺から飛び降りて來た。外國婦人も降りて來た。私たちの車夫も駈け寄つた。往來の人もあつまつて來た。

誰の考へにも、私は轢かれたと思つたのであらう。而も天佑といふのか、好運といふのか、私は無事に起き上つたので、人々は又おどろいた。私は馬にも踏まれず、車輪にも觸れず、身には微傷だも負はなかつたのである。その仔細は、私のからだに縦に倒れたからで、若し横に倒れたならば、首か胸か足を車輪に轢かれたに相違なかつた。私が縦に倒れた上を馬車が眞直に通過したのみな

らず、馬の蹄も私を踏まずに飛び越えたので、何事も無しに済んだのである。奇蹟的といふ程ではないかも知れないが、私は我ながら不思議に感じた。他の人々も『運が好かつたなあ。』と口々に云つた。

この當時のことを追想すると、私は今でもぞつとする。このごろの新聞紙上で交通事故の多いのを知ること、私は三十数年前の出来事を想ひ起さずにはゐられない。支那にこんな話がある。大勢の集まつたところで虎の話が始まると、その中の一人がひどく顔の色を變へた。聞いてみると、その人は曾て虎に出逢つて危ふくも逃れた経験を有してゐたのである。私も馬車に轢かれさうになつた経験があるので、交通事故には人一倍のショックを感じられてならない。

そのとき私からだは無事であつたが、抱へてゐた五月人形の箱は無論投げ出されて、金太郎も飾り馬もメチャ／＼に毀れた。よんどころなく銀座へ行つて、再び同じやうな物を買つて持参したが、先方へ行つては途中の出来事を話さなかつた。初の節句の祝ひ物が途中で毀れたなどと云つては、先方の人たちが心持を悪くするかも知れないと思つたからである。その男の兒は成人に到らずして死んだ。

孝子貞女

明治の初年、外國の事情がよく判らない時代に、誰が云ひ出したのか知らないが、外國には孝行といふ言葉はないとか、貞節といふ言葉はないとか——實は立派に有るのであるが——云ふやうなことが誤まり傳へられたのが始まりで、今日でもさう考へてゐる人が少くないやうである。

正直に白状すれば、私もその思ひ違ひの仲間、たとひ孝行とか貞節とかいふ言葉があるにしても、個人主義の發達した歐米諸國では、親子夫婦の人情がおのづから我國とは相違してゐるらしいと考へてゐたのであるが、ひとたび外國の地を踏んで、その實際を目撃すると、案に相違の事どもが屢々ある。

たとへば倫敦とか巴里とかいふやうな大都市の公園や川端を、朝夕又は日曜日に散歩してゐる際に、老いたる父母あるひは祖父母、あるひは病める夫と見える人々を、妻や娘や息子たちが或は手

をひき、或は車に載せて、介抱しながら散歩してゐるのを屢々見受けるのである。日本でもさう云ふの見受けないではないが、外國のやうには多くないやうに思はれる。而も外國の事情に精通しない私には、それが本當の妻や娘であるか、あるひは一種のナアズのやうな雇ひ人であるか、その判別が附かなかつたのであるが、ある日偶然にそれを確めることが出来た。

五月下旬の日曜日である。私は倫敦のテムズ河のほとりを散歩してゐると、長い草堤には前に云つたやうな人々が幾組も出てゐる。その中でも私の注意を惹いたのは、青年男女の一組であつた。彼等が兄妹で、相當の家庭の子女であるらしいことは、その顔容と服装とを見て直ぐに覺られた。

兄は二十一、妹は十八九で、大きい乳母車のやうなものに載せてゐるのは老衰の婦人であつた。彼等は川柳の木かげに車を停めて、携へて來たバスケットをあけた。兄は林檎を取り出して、ナイフで皮を剥いて、更にそれを細かく切つて、車の上の婦人にあたへると、妹は大きい壘とコップを取出して、なにかの飲み物を婦人にすゝめる。彼等がいかに優しく老婦人を勤はつてゐるかは、その態度を見ても明かに察せられた。

私はしばらく黙つて眺めてゐたが、なんだかこの兄妹に話し掛けてみたいやうな氣がしたので、餘計な邪魔をするのは悪いと思ひながら、兄らしい青年に聲をかけて、訊く必要もない道を訊くと、かれらも私が日本人であることを知つて、幾分の好奇心も手傳つたのであらう、案外に打解けて話し出した。

それからだん／＼訊いてみると、彼等は倫敦市中に住む辯護士の子で、車に載せて來たのは八十一歳の祖母である。家には父と母と一人の女中があるが、母と女中は家事に忙がしいので、自分たちが祖母を連れて出たのであるといふ。兄も妹も學校に通てゐるので、日曜日でなければ祖母を連れて出ることが出来ない、彼等は更に説明した。

兄も妹も今が遊び盛りである。一週に一度の日曜日、彼等は定めて勝手に飛び廻りたいのであらうが、揃ひも揃つてお祖母さんのお供をして、歩行の自由でない老婦人を車に載せて、兄は車を押し、妹はバスケットをさげて、このテムズ河畔に初夏の一日を暮らすのである。

私たちから十間あまり離れた所に、他の一組が車をとどめてゐた。車を押して來たのは三十を少し越えたらしい婦人であつた。兄の青年はそれを指さして私に教へてくれた。車上の男は彼の婦人の夫で、市内のある商店の番頭を勤めてゐたが、重いリウマチスのために店を退いて療養中で、

天氣のよい日には細君が車を押してこゝらへ散歩に来るのであるといふ。病める夫を車に載せて來るのは、璧勝五郎の初花ばかりでは無いのである。

見渡したところ、まだ他にも同じやうなのが幾組も見えた。一々に訊いてみるまでも無く、いづれも大同小異の人々であらう。時は初夏、堤の上を散歩してゐる人もある。堤の下に釣を垂れてゐる人もある。河の中にボートを漕ぎ廻つてゐる人もある。思ひくゝの遊樂を擅まゝにしてゐる中に、老いたる祖母の介抱をしてゐる人もある。病める夫の看護をしてゐる人もある。孝行と貞節を東洋の獨占のやうに思ひ込んでゐるのは大なる間違ひではないかと、私はつくづく考へた。

恰もそこへ花賣の車が來たので、わたしはその一束を買つて車上の老婦人にさゝげた。老婦人にさゝげると云ふよりは、寧ろこの若い兄妹を喜ばせたいやうな心持が多かつたのである。果して兄妹は喜んだ。その感謝の聲を聞きながら、私は孝行の孫たちに別れた。

正月の思ひ出

ある雑誌から「正月の思ひ出」といふ質問を受けた。一年一度のお正月、若い時から色々の面白い思ひ出が無いでもないが、最も記憶に残つてゐるのは、お正月として甚だお目出たくない、暗い思ひ出であることを正直に答へなければならぬ。

明治二十八年の正月、その前年の七月から日清戦争が開かれてゐる。すなはち軍國の新年である。海陸ともに連戦連捷、舊冬の十二月九日には上野公園で東京祝捷會が盛大に舉行され、もう戦争の山も見えたといふので、戦時とはいひながら歳末の東京市中は例年以上の賑はしさで、歳の市の賣物も「負けた、負けた」と云つては買手がないので、いづれも「勝つた、買つた」と呶鳴る勢ひで、その勝つた勝つたの戦捷氣分が新年に持越して、それに屠蘇氣分が加はつたのであるから、去年の下半季の不景氣に引きかへて、こんなに景氣のよい新年は未曾有であると云はれた。

その輝かしい初春を寂しく迎へた一家がある。それは私の叔父の家で、その當時、麴町の一番町に住んでゐたが、叔父は秋のはじめからの患ひで、歳末三十日の夜に世を去つた。明くれば大晦日、わたし達は柩を守つて歳を送らなければならないことになつたのである。かういふ経験を持つた人々は他に澤山あらう。しかもそれが戦捷の年であるだけに、私たちにはまた一しほの寂しさが感ぜられた。

二三日前に立てた門松も外してしまつた。床の間に掛けてある松竹梅の掛物も取除けられた。特別に親しいところへは電報を打つたが、他へは一々通知する方法がない。大晦日に印刷所へ頼みに行つても、死亡通知の葉書などを引き受けてくれるところはない。電報を受け取つて驅けつけて来た人々も大晦日では長居は出来ない、一通りの悔みを述べて早々に立去る。遺族と近親あはせて七八人が柩の前にさびしい一夜をあかした。晴れてはゐるが霜の白い夜で、お濠の雁や鴨も寒さうに鳴いてゐた。

さて困つたのは、一夜明けた元旦である。近所の人はずでに知つてゐるが、他の人々は何にも知らないで、早朝から續々年始に来る。今日と違つて、年賀郵便などのない時代であるから、本人

または代理の人が直接に回禮に来る。一々それに對して「實は……」と打ち明けなければならぬ。祝儀と悔みがごつちやになつて、来た人も迷惑、こちらも難儀、その應對には實に困つた。

二日の午前十時、青山墓地で葬儀を営むことになつた。途中葬列を廢さないのが其當時の習慣であるから、私たちは番町から青山まで徒歩で送つて行く。新年早々であるから、碌々に會葬者もあるまいと豫期してゐたが、それでも近所の人々その他を合はせて五六十人が送つてくれた。

舊冬以來、幸ひに日和つゞきであつたが、その日も快晴で、朝からそよとの風も吹かない。前にもいふ通り、戦捷の新年である。しかもこの好天氣であるから、市中の賑はひはまた格別で、表通りには年始まはりの人々が袖をつらねて往來する。家々の國旗、殊にこの春は新調したのが多いとみえて、旗の色がみな新しく鮮やかであるのも、新年の町を明るく華やかに彩つてゐた。松飾りも例年よりは張り込んだのが多く、緑のアーチに「祝戦捷」などの文字も見えた。

交通の取締が嚴重でないで、往來で紙鳶をあげてゐる子供、羽根をつけてゐる娘、これも例年よりは威勢よく見える。取りわけて例年より多いのは酔つ拂ひで、「唐の大將あやまらせ」などと呶鳴つて通るのもある。

青々と晴れた大空の下に、この新年の繪巻が展げられてゐる。その混雜の間を潜りぬけて、私たちは亡き人の柩を送つて行くのである。世間の春にくらべて、私たちの春はあまりに寂しかった。私は始終うつむき勝ちで、麴町の大通りを横に切れ、辨慶橋を渡つて赤坂へさしかゝると、こゝは花柳界に近いだけに、春着の藝者が往來してゐる。酔つ拂ひもまた多い。見るもの、聞くもの、戦捷の新年風景ならざるはない。

かゝる夜の月も見にけり野邊送り

これは俳人去來が中秋名月の夜に、甥の柩を送つた時の句である。私も叔父の野邊送りに、かゝる新年の風景を見るかと思ふと、なんだか足が進まないやうに思はれた。

こゝにまた一つの思ひ出がある。葬式を終つて、會葬者は思ひ／＼に退散する。私達は少し後れて、新しい墓の前を立ち去らうとする時、若い陸軍少尉が十四五人の兵士を連れて通りかゝつた。彼は私が中學生時代の同期生吉田君で、一年志願兵の少尉であるが、去年の九月以來召集されてゐる。その吉田君に偶然こゝで出逢つたのは意外であつたが、叔父の死を聞いて、彼も氣の毒さうに顔をしかめた。

『葬式に好い時節といふのは無いが、新年早々は何とも云ひやうがない。』

いづれお目にかゝりますと云つて別れたが、私はその後再び吉田君に逢ふ機會がなかつた。吉田君は臺灣鎮定に出征して、その年の七月十四日、桃仔園で戦死を遂げた。青山墓地の別れがこの世の別れであつた。同じ日に二つの思ひ出、人の世には暗い思ひ出が多い。

年賀郵便

新年の東京を見わたして、著るしく寂しいやうに感じられるのは、回禮者の減少である。もちろん今でも多少の回禮者を見ないことは無いが、それは平日よりも幾分か人通りが多いぐらゐの程度で、明治時代の十分の一、乃至二十分の一にも過ぎない。

江戸時代のことは、故老の話に聴くだけであるが、自分の眼で視た明治の東京——その新年の賑ひを今から振り返つてみると、文字通りに隔世の感がある。三ヶ日は勿論であるが、七草を過ぎ、十日を過ぎる頃までの東京は、回禮者の往來で實に賑やかなものであつた。

明治の中頃までは、年賀郵便を發送するものは無かつた。恭賀新年の郵便を送る先は、主に地方の親戚知人で、府下でもよほど邊鄙な不便な所に住んでゐない限りは、郵便で回禮の義理を濟ませると云ふことはなかつた。まして市内に住んでゐる人々に對して、郵便で年頭の禮を述べるなどは、

有るまじき事になつてゐたのであるから、總ての回禮者は下町から山の手、或は郡部にかけて、知人の戸別訪問をしなければならぬ。市内電車が初めて開通したのは明治三十六年の十一月であるが、それも半藏門から數寄屋橋見附までと、神田美土代町から數寄屋橋までの二線に過ぎず、市内の全線が今日のやうに完備したのは大正の初年である。

それであるから、人力車に乗れば格別、さもなければ徒歩のほかは無い。正月は車代が高いのみならず、全市の車臺の數も限られてゐるのであるから、大抵の者は車に乗ることは出来ない。男も女も、老いたるも若きも、殆どみな徒歩である。今日ほどに人口が多くなかつたにもせよ、東京に住むほどの者は一戸に少くも一人、多くは四人も五人も一度に出動するのであるから、往來の混雑は想像されるであらう。平生は人通りの少い屋敷町のやうなところでも、春の初めには回禮者が袖をつらねてぞろ／＼と通る。それが一種の奇觀でもあり、また春らしい景色でもあつた。

日清戦争は明治二十七八年であるが、二十八年の正月は戦時といふ遠慮から、回禮を年賀ハガキに換へる者があつた。それ等が例になつて、年賀ハガキがだん／＼に行はれて來た。明治三十三年十月から私製繪ハガキが許されて、年賀ハガキに種々の意匠を加へることが出来るやうになつたの

も、年賀郵便の流行を助けることになつて、年賀を郵便に換へるのを怪まなくなつた。それが又、明治三十七八年の日露戦争以來いよ／＼激増して、松の内の各郵便局は年賀郵便の整理に忙殺され、他の郵便事務は殆ど抛擲されて仕舞ふやうな始末を招來したので、その混雜を防ぐために、明治三十九年の年末から年賀郵便特別扱ひといふことを始めたのである。

その以來、年賀郵便は年々に増加する。それに比例して回禮者は年々に減少した。それでも明治の末年までは昔の名残りをとゞめて、新年の巷に回禮者のすがたを相當に見受けたのであるが、大正以後はめつきり廢れて、年末の郵便局には年賀郵便の山を築くことになつた。

電車が初めて開通した當時は、新年の各電車ことごとく満員で、女や子供は容易に乗れない位であつたが、近年は元日二日の電車でも満員は少い。回禮の著るしく減少したことは、各劇場が元日から開場してゐるのを見ても知られる。前に云つたやうなわけで、男は回禮に出る、女はその回禮客に應接するので、内外多忙、とても元日早々から芝居見物にゆくやうな餘裕はないので、大劇場はみな七草以後から開場するのが明治時代の習ひであつた。それが近年は元日開場の各劇場満員、新年の市中寂寥たるも無理はないのである。

忙がしい世の人に多大の便利をあたへるのは、年賀郵便である。それと同時に、人生に一種の寂寥を感じしむるのも、年賀郵便であらう。

銀座

私は明治二十五年から二十八年まで満三年間、正しく云へば京橋區三十間堀一丁目三番地、俗にいへば銀座の東仲通りに住んでゐたので、その當時の銀座の事ならば先づ一通りは心得てゐる。即ち今から四十餘年前の銀座である。その記憶を一々ならべ立てゝもゐられないから、こゝでは歳末年始の風景その他を語ることにする。

由來、銀座の大通りに夜店が出るのは、夏の七月、八月、冬の十二月、この三月間に限られてゐて、その以外の月には夜店を出さないのが其當時の習はしであつたから、初秋の夜風が氷屋の暖簾に訪づれる頃になると、さすがの大通りも宵から寂寥、勿論ぞろぞろ歩きの人影は見えず、所用ある人々が足早に通り過ぎるに過ぎない。商店は電燈をつけてはゐたが、今から思へば夜と晝との相違で、名物の柳の木蔭などは薄暗かつた。裏通りは殆どみな住宅で、どこの家でもランプを用ゐてゐ

たから、往來は一層暗かつた。

その薄暗い銀座も十二月に入ると、急に明るくなる。大通りの東側は勿論、西側にも露店が一杯に列ぶこと、今日の歳末と同様である。尾張町の角や、京橋の際には、歳の市商人の小屋も掛ければ、その他の角々にも紙鳶や羽子板などを賣る店も出た。この一ヶ月間は實に繁昌で、いはゆる押すな押すなの混雑である。二十日過ぎからはいよゝ混雑で、二十七八日頃からは夜の十時、十一時頃まで露店の灯が消えない。大晦日は十二時過ぎるまで賑はつてゐた。

但しその賑ひは大晦日かぎり、一夜明ければ元の寂寥に復る。さすがに新年早々はどこの店でも門松を立て、國旗をかけ、回禮者の往來もしげく、鐵道馬車は満員の客を乗せて走る。いかにも春の銀座らしい風景ではあるが、その銀座の歩道で、追ひ羽根をしてゐる娘達がある。小さい紙鳶をあげてゐる子供がある。それを咎める者もなく、さのみ往來の妨害にもならなかつたのを考へると、新年の混雑も今日とは全然比較にならない事がよく判るであらう。大通りでさへ其の通りであるから、裏通りや河岸通りは追ひ羽根と紙鳶の遊び場所で、そのあひだを萬歳や獅子舞がしばしば通る。その當時の銀座界限には、まだ江戸の春のおもかげが残つてゐた。

新年の賑ひは晝間だけのことで、日が暮れると寂しくなる。露店も元日以後は一軒も出ない。商店も早く戸を閉める。年始歸りの酔つ拂ひがふら／＼迷ひ歩いてゐる位のもので、午後七八時を過ぎると、大通りは暗い町になつて、その暗いなりに鐵道馬車の音が響くだけである。

今日と違つて、其頃は年賀郵便などと云ふものもなく、大抵は正直に年始まはりに出歩いたのであるから、正月も十日過ぎまでは大通りに回禮者の影を絶たず、晝は毎日賑はつてゐたが、日が暮れると前に云つた通りの寂寥、露店も出なければ散歩の人も出ず、寒い夜風のなかに暗い町の灯が沈んで見える。今日では郊外の新開地へ行つても、こんなに暗い寂しい新年の宵の風景は見出されまい。東京の繁華の中心といふ銀座通りが此の始末であるから、他は察すべしである。

その頃、銀座通りの飲食店といへば、東側に松田といふ料理屋がある。それを筆頭として天ぶら屋の大新、同じく天虎、蕨蕎麥、牛肉屋の吉川、鳥屋の大黒屋ぐらゐに過ぎず、西側では料理屋の千歳、そば屋の福壽庵、横町へ這入つて例の天金、西洋料理の清新軒。先づザツとこんなものであるから、今日のカフェーのやうに遊び半分に入るといふ店は皆無で、まじめに飲むか食ふかの外はない。吉川のおますさんと云ふ娘が評判で、それが幾らか若い客を呼んだといふ位のこと、他

に色つばい噂はなかつた。したがつて、どこの飲食店も春は多少賑はふと云ふ以外に、春らしい氣分も漂つてゐなかつた。かう云ふと、甚だ荒涼寂寞たるものであるが、飲食店の姐さん達も春は小綺麗な着物に新しい袴でも掛けてゐる。それを眺めて、その當時の人々は春だと思つてゐたのである。

その正月も過ぎ、二月も過ぎ、三月も過ぎ、大通りの柳は日ましに青くなつて、世間は四月の春になつても、銀座の町の灯は依然として生暖かい霧の底に沈んでゐるばかりで、夜はそゞろ歩きの人もない。たゞ賑はふのは毎月三回、地蔵の縁日の宵だけであるが、それとても交通不便の時代、遠方から來る人もなく、往來のまん中で犬ころが遊んでゐた。

今日の銀座が突然ダーク・チェンジになつて、四十餘年前の銀座を現出したら、銀ブラ黨は定めて驚くことであらう。

鳶

去年の十月頃の新聞を見た人々は記憶してゐるであらう。日本橋蠣殻町のある商家の物干へ一羽の大きい鳶が舞ひ降りたのを店員大勢が捕獲して、警察署へ届け出たといふのである。ある新聞には、その鳶の寫眞まで掲げてあつた。

そのとき私が感じたのは、鳶といふ鳥がそれほど世間から珍らしがられるやうになつた事である。今から三四十年前であつたら、鳶などが其處らに舞つてゐても、降りてゐても、誰も見返る者もあるまい。云はゞ鴉や雀も同様で、それを捕獲して警察署へ届け出る者もあるまい。鳶は現在保護鳥の一種になつてゐるから、それで届け出たのかも知れないが、昔なら恐らくそれを捕獲しようとする者もあるまい。それほどに鳶は普通平凡の鳥類と見なされてゐたのである。

私は山の手の麴町に生長したせゐか、子供の時から鳶などは毎日のやうに見てゐる。天氣晴朗の

日には一羽や二羽はかならず大空に舞つてゐた。トロ／＼／＼と云ふやうな鳴き聲も常に聞き慣れてゐた。鳶が鳴くから天氣が好くなるだらうなぞと云つた。

鳶に油揚げを攫はれると云ふのは嘘ではない。子供が豆腐屋へ使に行つて笹や味噌こしに油揚げを入れて歸ると、その途中で鳶に攫つて行かれることは屢々あつた。油揚げばかりでなく、魚屋が人家の前に盤臺をおろして魚をこしらへてゐる處へ、鳶が突然にサツと舞ひ下つて來て、その盤臺の魚や魚の腸などを引摺んで、あれといふ間に虚空遙かに飛び去ることも珍らしくなかつた。鳶が子供を攫つて行くのも恐らく斯うであらうかと、私たちも小さい魂を脅かされたが、それも幾たびか見慣れると、やあ又攫はれたなぞと面白がつて眺めてゐるやうになつた。往來で白晝搔拂ひを働く奴を東京では「晝とんび」と云つた。

小石川に富坂町といふのがある。富坂はトビ坂から轉じたので、昔はこゝらの森に澤山の鳶が棲んでゐた爲であるといふ。してみると、江戸時代には更に澤山の鳶が飛んでゐたに相違ない。鳶ばかりでなく、鶴も飛んでゐたのである。明治以後、鶴を見たことはないが、鳶は前に云ふ通り、毎日のやうに東京の空を飛び廻つてゐたのである。

鳶も鷲と同様に、いはゆる鷲鳥とか猛禽とか云ふものに數へられ、前に云つたやうな悪いたづらをも働くのであるが、鷲のやうに人間から憎まれ恐れられてゐないのは、平生から人家に近く棲んでゐるのと、鷲ほどの兇暴を敢てしない爲であらう。子供の飛ばす凧は鷲から思ひ附いたもので、日本ではトンビ凧といひ、漢字では紙鷲と書く。英語でも凧をカイトといふ。即ち鷲と同じことである。それを見ても、遠い昔から人間と鷲とは餘ほどの親みを持つてゐたらしいが、文明の進むに連れて、人間と鷲との縁がだん／＼に遠くなつた。

日露戦争前と記憶してゐる。麴町の英國大使館の旗竿に一羽の大きい鷲が止まつてゐるのを見付けて、英國人の館員や留學生が嬉しがつて眺めてゐた。留學生の一人が私に云つた。

『鷲は男らしくて好い鳥です。併しロンドン附近ではもう見られません。』

まだ其頃の東京には鷲のすがたが相當に見られたので、英國人はそんなに鷲を珍らしがたり、嬉しがたりするのかと、私は心ひそかに可笑しく思つた位であつたが、その鷲もいつか保護鳥になつた。東京人もロンドン人と同じやうに、鷲を珍らしがる時代が來たのである。もちろん鷲に限つたことではなく、大都會に近いところでは、鳥類、蟲類、魚類が年々に亡びて行く。それは餘儀な

き自然の運命であるから、特に鷲に對して感傷的の詠嘆を洩すにも及ばないが、初春の空に彼のトンビ凧を飛ばしたり、大きな口をあいて「トンビ、トロロ」と歌つた少年時代を追懐すると、鷲の衰滅に對して一種の悲哀を感せずにはゐられない。

むかしは矢羽根に雉又は山鳥の羽を用ゐたが、それ等は多く得られないので、下等の矢には鷲の羽を用ゐた。その鷲の羽すらも拂底になつた頃には、矢は廢れて鐵砲となつた。そこにも需要と供給の變遷が見られる。

私はこのごろ目黒に住んでゐるが、こゝらにはまだ鷲が棲んでゐて、晴れた日には大きい翼をひろげて悠々と舞つてゐる。雨のふる日でもトロ／＼と鳴いてゐる。私は舊友に逢つたやうな懐かしい心持で、その鷲が輪を作つて飛ぶ影をみあげてゐる。鷲はわが巢を人に見せないといふ俗説があるが、私の家のあたりへ飛んで來る鷲は近所の西郷山に巢を作つてゐるらしい。その西郷山もおひ／＼に拓かれて分譲地となりつゝあるから、やがてはこゝらにも鷲の棲家を失ふことになるのかも知れない。いかに保護されても、鷲は次第に大東京から追ひ遣らるゝの外はあるまい。

私はよく知らないが、金鷄勳章の鷄は鷲のたぐひであると云ふ。然らば、たとひ鷲がいつこの果

へ追ひ遣られても、或はその種族が絶滅に瀕しても、その雄姿は燦として永久に輝いてゐるのである。鳶よ、憂ふる勿れ、悲む勿れと云ひたくもなる。

けふも暮春の晴れた空に、二羽の鳶が舞つてゐる。折から一臺の飛行機が飛んで來たが、彼等はそれに驚かされたやうな氣色も見せないで、やはり悠々として大きい翼を空中に浮べてゐた。

(昭和十一年四月)

汽車の窓

雑誌「食通」の九月號に「汽車の窓から」と題して、汽車の窓から買ふ辨當、鮭、その他について諸家の回答を掲げてゐる。それを一々讀んで、私は少からざる興味をおぼえた。實際、鐵道の各驛で土地の名物を賣つてゐるのは、それを買ふと否とに拘らず、確に旅客の疲れを慰める一風景たるを失はない。

名物を食ふが無筆の旅日記

古川柳にいふ通り、旅中の各驛で名物を買つたり食つたりする事は、いつまでも忘れられない思ひ出の種になるものである。私も若いとき諸方を旅行すると、好んで汽車の窓から色々の物を買つた。さうして、碌々に食ひもしないで、車内に置いて來るのである。無駄といへば無駄であるが、なんとなしに買つてみたい、一口でも食つてみたいのであつた。而も近年は出不精になつたので、

減多に旅行を試みない。旅行といへば、せい／＼二時間か三時間の短距離旅行であるから、汽車の窓から賣子を呼ぶやうな事も減多にない。

したがつて、現今の「汽車の窓」からどんな旨い物が買へるかを能く知らないのであるが、私の貧しい経験によると、大體に於て旨いものが少くなつたらしい。どこかの驛へ着いたら、是非あれを買はうと待構へてゐる程の物が減少したらしい。近來の私は、稀に長途の旅行を試みる場合でも、先づ食堂に這入るか、或は少々我慢して、下車驛まで行き着いて食事をするか、二つに一つで、汽車の窓から食ひ物を買ふやうな事をしなくなつた。

併し私は自分が食ふといふよりも、他の乗客が汽車の窓から何を買ふかを見物することに、一種の興味を感じてゐる。堂々たる紳士が何を買ふか、妙齡の令嬢が何を買ふか、それを傍觀してゐると頗る面白い。面白いと云つては失禮かも知れないが、それを眺めてゐると、色々考へさせられる事がある。中には、驛へ着くと無暗に買ひ込む、而も碌に食はない。恰も私の若い時と同様の人々を往々見受けて、さういふ道樂は私ばかりでも無いと、心ひそかに微笑することもある。

何と云つても、汽車の窓から買ふ食物では、山陽鐵道の辨當が第一であつたと思ふ。鐵道が國有にならない以前、即ち三十年も昔の事であるから、今の若い人達はもちろん御承知あるまいが、由來この山陽鐵道は私設鐵道の中でも設備の良いのを以て誇りとしてゐたが、その辨當も頗る立派なものであつた。たしか二十五錢と三十五錢の二種に分れてゐたと記憶してゐるが、その三十五錢の辨當なるものは素晴らしかつた。

第一にその體裁が物々しい。普通の汽車辨のやうな薄ツペらな笹折ではなく、三重の辨當箱を萌黄の打紐で四つに括つて、何かの骨董品かとも思はせるやうな體裁である。下の箱が飯、その上の箱には口取りまがひの品々に焼肴と旨煮のたぐひを入れ、又その上の箱には奈良漬など五種ぐらゐの香の物が入れてある。その料理が頗る旨い上に、分量が多い。大抵の人々は食ひ切れない位である。詰まらない飲食店へ行つて、怪しげな料理を食はされるよりも、この辨當を食つた方が確に優しであつた。三十餘年前にこの辨當を食つた経験のある人は、私の説明が嘘でないことを證明してくれるであらう。今日どこへ行つても、決してあんな辨當は見出されまい。さういふわけで、私は汽車の食ひ物の話が出ると、いつも山陽鐵道の辨當を思ひ出すのである。須磨や舞子の風景を眺めながら、あの辨當を食ふ。むかしの旅は好かつたなアと思ふ。

併しよく考へてみると、昔の辨當を讚美して、今の辨當を輕蔑するのは無理であらう。第一に金の價が相違してゐる。三十餘年前の三十五錢は今日の一圓五六十錢にも相當する。したがつて旨い辨當も食はされた筈である。今日は諸物價騰貴にも拘らず、依然として三十五錢か五十錢の相場を守つてゐるのであるから、質も粗悪、量も輕少に陥るのは已むを得ない。唯、昔に比べると乗客數が著るしく増加してゐるので、いはゆる大量製産で何うにか償つて行かれるのであらう。以前は國府津驛あたりの辨當も、二十五錢で相當の物を食はせた。どこの汽車辨も昔とは比較にならない。私は英國を旅行中、話の種に二度ばかり汽車辨を食つたことがある。いはゆるバスケットランチである。たしか七十五錢と記憶してゐるが、肉が二品、パン、コーヒー、果物で、料理もまづくなかつた。それ等の品々が籠に入れてあつて、なか／＼便利に出來てあるから、皆これを買つて食ふのである。日本でも長途の列車には、かういふ物を賣らせては何うだらうかと思ふ。獨り旅などに取つては、わざ／＼食堂へ行くよりも便利であらう。

牛

『來年は丑年ださうですが、何か丑に因んだやうはお話はありませんか。』と、青年は訊く。

『なに、丑年……。君たちなんぞも干支えとをいふのか。かうなると、どつちが若いか分らなくなるが、まあ好い。干支に因んだ丑ならば、繪はがき屋の店を捜して歩いた方が早手廻しだと云ひたいところだが、折角のお訊ねだから何か話ませう。』と、老人は答へる。

『そこで、相成るべくは新年に因んだやうなものを願ひたいので……。』

『色々の註文を出すね。いや、ある、ある。牛と新年と藝妓と……。かういふ三題話のやうな一件があるが、それぢやあどうだな。』

『結構です。聽かせて下さい。』

『どうで私の話だから昔のことだよ。その積りで聽いて貰はなけりやあならないが……。江戸時代

の天保三年、これは丑年ぢやあない辰年で、例の鼠小僧次郎吉が召捕になつた年だが、その正月二日の朝の出来事だ。」と、老人は話し出した。「今でも名残を留めてゐるが、むかしは正月二日の初荷、これが頗る盛んなもので、確に江戸の初春らしい姿を見せてゐた。そこで、話は二日の朝の五つ半に近いころだといふから、先づ午前九時ごろだらう。日本橋大傳馬町二丁目の川口屋といふ酒屋の店先へ初荷が来た。一丁目から二丁目へかけては木綿問屋の多いところで俗に木綿店といふくらゐだが、この川口屋は酒屋で店も舊い。殊に商賣が商賣であるから、取分けて景氣が好い。朝からみんな赤い顔をして陽氣に騒ぎ立てゝゐる。

初荷の車は七八臺も繋がつて来る。いふまでもないが、初荷の車を曳く牛は五色の新しい鼻綱をつけて、綺麗にししらへてゐる。その牛車が店さきに停まつたので、大勢がわやくいひながら、車の上から積樽をおろしてゐる。そのあひだは牛を休ませるために、綱を解いて置く。すると、ここに一つの騒動が起つた。といふのは、この朝は京橋の五郎兵衛町から正月早々に火事を出して、火元の五郎兵衛町から北紺屋町、南傳馬町、白魚屋敷のあたりまで焼いてしまつた。その火事場から引揚げて来た町火消の一組が恰度にくゝを通りかゝつたが、春ではあるし、火事場歸りで威勢が

好い。この連中が何かわつと云つて來かゝると、牛はそれに驚いたとみえて、そのうちの二匹は急に暴れ出した。

さあ、大變。下町の目抜といふ場所で、正月の往來は賑はつてゐる。その往來のまん中で二匹の牛が暴れ出したのだから、實に大騒動。肝腎の牛方は方々の振舞酒に酔つ拂つて、みんなふらふらしてゐるのだから何の役にも立たない。火消し達もこれには驚いた。店の者も近所の者も唯あれあれといふばかりで、誰も取押へる術もない。なにしろ暴牛は暴馬よりも始末が悪い。それでも見えてはゐられないので、火消し達はあぶない危ないと呟鳴りながら暴牛のあとを追つて行く……。」

『なるほど大變な騒ぎでしたね。定めて怪我人も出來たでせう。』
『ふだんと違つて人通りが多いのと、今日と違つて道幅が狭いので、往來の人たちは身をかはす餘地がない。出會ひがしらに突き當る者がある、逃げようとして轉ぶ者がある。なんでも十五六人の怪我人が出來てしまつた。中でも酷いのは通油町の京屋といふ菓子屋の娘、年は十七、お正月だから精々お化粧をして、店さきの往來で羽根を突いてゐるところへ一匹の牛が飛んで來た。きやつといつて逃げようとしたが、もう遅い。牛は娘の内股を兩角にかけて、大地へ堂と投げ出したので、

可哀さうにその娘は二三日後に死んださうだ。そんなわけだから、始末に負へない。二匹の牛は大傳馬町から通旅籠町、通油町、通鹽町、横山町と、北をさして眞蔦地に駈けて行く。火消し達も追つて行く。だん／＼に彌次馬も加はつて、大勢がわあ／＼云ひながら追つて行く。さうして、たうとう兩國の廣小路へ出ると、なんと思つたか一匹の牛は左へ切れて、柳原の通りを筋違ひの方角へ驅けて行つて、昌平橋の際でどうやらかうやら取押へられた。』

『もう一匹はどうしました。』

『それが話だ。もう一匹は眞直に淺草見附、即ち今日の淺草橋へさしかゝつたが、何分にも不意の騒ぎで見附の門を閉める暇もない。番人達もあつといふ中に、牛は見附を通りぬけて藏前の大通りへ飛び出してしまつたから、いよ／＼大變。この勢ひで觀音様の方へ飛んで行つたら、どんな騒ぎになるか知れない。兩側の町家から大勢が出て来て、石でも棒切れでも何でも構はない、手あたり次第に叩きつける。札差しの店からも大勢が出て来て、小桶や皿小鉢まで叩きつける。』

さすがの牛も少しく疲れたのと、方々から激しく攻め立てられたのとで、もう眞直には行かれなくなつたらしく、駒形堂のあたりから右へ切れて、河岸から大川へ飛び込んだ。汐が引いてゐたと

見えて、岸に寄つた方は淺い洲になつてゐる。牛はそこへ飛び降りて一息ついてゐると、追つて来た連中は上から色々の物を投げつける。牛はまた大川へ這入つて、川下の方へ泳いで行く。大勢は河岸づたひに追つて行く。おどろいたのは柳橋あたりの茶屋や船宿だ。この牛が棧橋へ上つて、自分たちの家へ飛び込まれては大變だから、料理番や下足番や船頭達が棧橋へ出て、こつちへ寄せつけまいと色々の物を投げつける。新年早々から人間と牛との鬨ひだ。』

『場所が場所だけに、騒ぎはいよ／＼大きくなつたでせうね。』

『いや、もう、大騒ぎさ。こゝに哀れを留めたのは柳橋の小雛といふ藝者だ。なんでも明けて二十とかいふ話だつたが、この藝者は京橋の福井といふ紙屋の旦那と龜戸の初卯詣でに出かける筈で、土地の松屋といふ船宿から船に乗つて、今や棧橋を離れたところへこの騒動だ。船頭はいつそ戻さうかと躊躇してゐると、旦那はあとへ戻すのも縁喜が悪い、早く出してしまへといふ。そこで、思ひ切つて漕ぎ出して、やがて大川のまん中まで出ると、方々の家から逐はれた牛は、とても柳橋寄りの河岸へは着けないと諦めたものか、今度は反對に本所寄りの河岸に向つて泳ぎ出した。それを見て驚いたのは小雛の船だ。』